

中島遺跡
北近藤第一地点遺跡
南近藤遺跡

国道354号道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1988

館林市教育委員会

中 島 遺 跡
北近藤第一地点遺跡
南 近 藤 遺 跡

國道 354 号 道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1 9 8 8

館林市教育委員会

例　　言

1. 本書は、国道354号道路改良工事の施行に伴い事前調査された、中島遺跡・北近藤第一地点遺跡・南近藤遺跡の3遺跡の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、群馬県の委託により、館林市教育委員会が主体となり実施したもので、その組織は次の通りである。

教育長　堀越　亘

教育次長　伊藤　敏夫（昭和63年3月まで）

田村　幹男（昭和63年4月より）

担当主管　館林市教育委員会 文化振興課 文化財係

文化振興課長　坂本　充弘

文化財係長　三田　正信

学芸員　岡屋　英治

資料館学芸員　岡屋　紀子

社会教育主事　吉田　悦子

主　　事　黒沢　文隆（担当）

調査員　藤坂　和延

調査補助員　寺内　景子

調査作業員(順不同)

新田　由美子　菅沼　一男　飯島　富子　原　しげ

葭葉　嘉亮　葭葉　タカ　越谷　長男　小林　江里

小曾根　靖子　坂村　ヨツ　長沢　作次　早野　茂

石川　栄吉　八木　嘉市　山田　竹雄　小須賀　清

近藤　久美子　寺内　義正　川島　清　北上　晋子

渡辺　喜一　太田　鉄雄　坂田　彦次　菅沼　徳次

内山　加代子　須永　義　高際　陽子　鹿野　実吉

梁瀬　高蔵　町井　美知子　杉山　信作　中里　昇

石橋　矢三　津田　照子　根岸　良子　新井　清松

長谷川　雪江　森田　充子　中井　貞次　林　正行

今泉　多津子　松本　末吉　吉沢　春男　逸見　勢津子

今井　恵子　井上　文子　岩本　美智恵　加藤　絹代

橋本富司　坂村尚美　岩上真弓　山田キミエ
滝澤一美　若度秀子　石井ソノ

3. 調査は昭和62・63年度の2ヶ年に実施し、昭和62年9月～昭和63年7月までを現地での発掘調査、昭和63年7月～平成元年3月までを出土遺物整理および報告書作成にあてた。
4. 調査に伴う経費は、調査37,218,000円(昭和62年度23,766,000円、昭和63年度13,452,000)、整理17,867,000円であり、群馬県が負担した。
5. 調査における実測は、空中写真測量を中心に行い一部の手取り実測図との編集により報告書図版とした。
6. 本報告書の作成は、黒沢・藤坂が中心となって行った。
7. 中島遺跡・北近藤第一地点遺跡・南近藤遺跡の出土遺物や資料などは、館林市教育委員会にて管理・保管してある。
8. 本書報告書中の第Ⅲ章は遺跡分布調査協力者能登健氏、徳江秀夫氏、小島敦子氏提出の資料を基に館林市教育委員会が再構成したものである。
9. 発掘調査ならびに本書の作成にあたり、多くの方々からご指導・ご協力を賜わりました。伏して感謝申し上げます。

凡　　例

1. 遺構名称は調査時の名称をそのまま使用した。
2. 遺構図版にはそれぞれに比例尺を付した。基本的には $\frac{1}{60}$ である。
3. 遺構図版中の断面基準は、標高でこれを表した。
4. 土層注記中の土壌の色名は「新版標準土色粘」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修）によった。
5. 遺構についての主な計測値は、 $\frac{1}{20}$ の原図での計測値である。
6. 遺構についての表現は下記のとおりである。

位置 遺跡ごとの設定グリットで表示。

方位 竪の主軸方位をもって表示。

形状 正方形・長方形・方形・台形の四種に区分した。

規模 竪をもつ辺の長さ×竪に直交する辺の長さ。

竪 位置 住居址の辺・辺中の位置。

焚口部幅、燃焼部、煙道部 $\frac{1}{20}$ 原図での計測値。

構築材 出土状態より判断。

貯蔵穴 位置 住居址中の位置。

平面形 橋円形・隅丸方形・円形の三種に区分した。

規模 $\frac{1}{20}$ 原図での計測値。

壁溝 確認された辺を表示

壁高 床面最高点より壁上面最高点 ($\frac{1}{20}$ 断面図より計測)

柱穴 Pit番号は竪に向かって右の一一番近い柱穴より時計回りに順次Pit 1、Pit 2…
とし、Pit 1・Pit 2間の距離—Pit 2・Pit 3間の距離……を $\frac{1}{20}$ 原図による
計測値で示した。

重複関係 重複関係の新旧関係の判断のつくものはその新旧関係を示した。

遺物出土状況 概略および覆土中の遺物出土状態等について記述した。

7. 本書の図版中に入れた方位記号は座標北を表す。
8. 遺物実測図の遺物番号、および遺物写真図版の遺物番号は対応している。遺物番号は、出土の際の番号をそのまま使用した。数片接合した遺物は、最若番を代表番号とした。
9. 土器の実測図は原則として四分割法をとった。
10. 遺物実測図版は、それぞれに比例尺を付した。基本的には $\frac{1}{3}$ および $\frac{1}{2}$ である。

目 次

例 言	I
凡 例	III
目 次	IV
第Ⅰ章 調査に至る経過	1
第Ⅱ章 遺跡の環境	2
第Ⅲ章 遺跡分布調査における中島・北近藤第一地点・南近藤遺跡	4
第Ⅳ章 中島調査	17
第1節 調査内容	17
第2節 検出された遺構	21
第Ⅴ章 北近藤第一地点遺跡	23
第1節 調査内容	23
第2節 検出された遺構	27
第3節 出土遺物	96
第Ⅵ章 南近藤遺跡	107
第1節 調査の内容	107
第2節 検出された遺構	110
第3節 出土遺物	120
出土遺物写真図版	124

図 版 目 次

第 1 図	遺跡周辺図	3
第 2 図	地形調査図	5
第 3 図	古墳～奈良・平安時代の遺跡分布	7
第 4 図	字界図(旧東沼低地帯周辺)	8
第 5 図	遺物散布図	10
第 6 図	字界図(近藤沼低地帯周辺)	12
第 7 図	封内境界図誌(青柳村)	14
第 8 図	迅 速 図	15
第 9 図	中島遺跡調査区全体図	19～20
第 10 図	北近藤第一地点遺跡調査区全体図	25～26
第 11 図	1号住居址	29～30
第 12 図	2号住居址	33～34
第 13 図	3号住居址	37～38
第 14 図	4号住居址	41～42
第 15 図	5号住居址	45～46
第 16 図	6号住居址	47
第 17 図	7号住居址	49
第 18 図	8・9・16・25号住居址	51
第 19 図	10・11号住居址	55～56
第 20 図	12号住居址	59
第 21 図	13号住居址	61
第 22 図	14・17号住居址	65～66
第 23 図	15号住居址	68
第 24 図	18・24号住居址	73～74
第 25 図	19号住居址	76
第 26 図	20号住居址	80
第 27 図	21号住居址	81
第 28 図	22・23号住居址	85～86
第 29 図	26号住居址	90
第 30 図	円形周溝遺構	91

第31図	鍛冶遺構	93
第32図	北近藤第一地点遺跡出土遺物(1)	96
第33図	北近藤第一地点遺跡出土遺物(2)	97
第34図	北近藤第一地点遺跡出土遺物(3)	98
第35図	北近藤第一地点遺跡出土遺物(4)	99
第36図	北近藤第一地点遺跡出土遺物(5)	100
第37図	北近藤第一地点遺跡出土遺物(6)	101
第38図	北近藤第一地点遺跡出土遺物(7)	102
第39図	北近藤第一地点遺跡出土遺物(8)	103
第40図	北近藤第一地点遺跡出土遺物(9)	104
第41図	北近藤第一地点遺跡出土遺物(10)	105
第42図	北近藤第一地点遺跡出土遺物(11)	106
第43図	南近藤遺跡調査区全体図	109
第44図	1号住居址	111~110
第45図	2号住居址	113
第46図	3号住居址	115
第47図	4号住居址	117
第48図	南近藤遺跡出土遺物(1)	120
第49図	南近藤遺跡出土遺物(2)	121
第50図	南近藤遺跡出土遺物(3)	122
第51図	南近藤遺跡出土遺物(4)	123

写 真 目 次

写真1	調査風景	17	写真2		18
写真3	6号溝状遺構	21	写真4	1号土塁	21
写真5	1号井戸址	21	写真6	竪穴状遺構	22
写真7	調査風景	23	写真8	1号住居址	27
写真9	1号住居址遺物出土状態	27	写真10	1号住居址 竪	28
写真11	土玉出土状態	28	写真12	2号住居址	31
写真13	2号住居址・遺物出土状態	31	写真14	2号住居址 竪	32
写真15	3号住居址	32	写真16	3号住居址遺物出土状態(1)36	
写真17	3号住居址遺物出土状態(2)	36	写真18	3号住居址遺物出土状態(3)36	

写真19	3号住居址 瓦	36	写真20	4号住居址	39
写真21	4号住居址遺物出土状態	39	写真22	4号住居址 瓦	40
写真23	刀子出土状態	40	写真24	鐵鏃出土状態	40
写真25	5号住居址	43	写真26	5号住居址遺物出土状態(1)	43
写真27	5号住居址 瓦	44	写真28	5号住居址遺物出土状態(2)	44
写真29	5号住居址遺物出土状態(3)	44	写真30	6号住居址	47
写真31	6号住居址遺物出土状態	48	写真32	6号住居址 瓦	48
写真33	7号住居址	49	写真34	7号住居址遺物出土状態	50
写真35	8号住居址	50	写真36	8号住居址 瓦	52
写真37	9号住居址	52	写真38	9号住居址遺物出土状態	53
写真39	9号住居址 瓦	53	写真40	16号住居址	53
写真41	25号住居址	54	写真42	10号住居址	54
写真43	10号住居址遺物出土状態	57	写真44	10号住居址 瓦	57
写真45	11号住居址	58	写真46	11号住居址遺物出土状態	58
写真47	11号住居址 瓦	59	写真48	12号住居址	60
写真49	12号住居址遺物出土状態	60	写真50	石製品出土状態	61
写真51	13号住居址	62	写真52	13号住居址遺物出土状態	62
写真53	14号住居址	63	写真54	14号住居址遺物出土状態	63
写真55	14号住居址 瓦	64	写真56	17号住居址	64
写真57	17号住居址遺物出土状態	67	写真58	17号住居址 瓦	67
写真59	15号住居址	69	写真60	15号住居址遺物出土状態	69
写真61	15号住居址 瓦	70	写真62	勾玉出土状態	70
写真63	18号住居址	71	写真64	18号住居址遺物出土状態	71
写真65	18号住居址 瓦	72	写真66	24号住居址	72
写真67	24号住居址遺物出土状態	75	写真68	24号住居址 瓦	75
写真69	19号住居址	77	写真70	19号住居址遺物出土状態	77
写真71	19号住居址 瓦	78	写真72	20号住居址	78
写真73	20号住居址遺物出土状態(1)	79	写真74	20号住居址遺物出土状態(2)	79
写真75	紡錘車出土状態	79	写真76	20号住居址 瓦	79
写真77	21号住居址	82	写真78	21号住居址遺物出土状態	82
写真79	21号住居址 瓦	83	写真80	22号住居址	83
写真81	22号住居址遺物出土状態(1)	84	写真82	22号住居址遺物出土状態(2)	84

写真83	22号住居址 窓	84	写真84	23号住居址	87
写真85	23号住居址遺物出土状態	87	写真86	23号住居址 窓	88
写真87	26号住居址	88	写真88	26号住居址 遺物出土状態	89
写真89	26号住居址 窓	89	写真90	円形周溝遺構	92
写真91	鍛冶遺構羽口出土状態	93	写真92	鍛冶遺構	94
写真93	1号井戸址	94	写真94	2号井戸址	95
写真95	3号井戸址	95	写真96	4号井戸址	95
写真97	調査風景	107	写真98	1号住居址	110
写真99	1号住居址遺物出土状態	110	写真100	1号住居址 窓	113
写真101	2号住居址	114	写真102	2号住居址 遺物出土状態	114
写真103	2号住居址 窓	115	写真104	3号住居址	116
写真105	3号住居址遺物出土状態	116	写真106	3号住居址 窓	117
写真107	4号住居址	118	写真108	4号住居址 遺物出土状態	118
写真109	4号住居址 窓	119	写真110	1号井戸址	119
出土遺物写真図版		124~146	見学会風景		148

第Ⅰ章 調査に至る経過

昭和62年5月29日、国道354号道路改良工事の計画に伴い、館林工区内の埋蔵文化財包蔵地の取り扱いの協議が、館林土木事務所・群馬県教育委員会・館林市教育委員会により、開始された。

路線にかかる埋蔵文化財包蔵地は、『群馬県遺跡台帳（東毛編）』（1971年刊）によると大字青柳に所在する「北近藤第一地点遺跡」のみであるが、昭和58年度より館林市教育委員会が実施した遺跡詳細分布調査（以下遺跡分布調査と表記す）においては、大字小桑原字中島および大字青柳字南近藤地内でも遺物の散布が確認されていた。

協議は分布調査の結果を踏まえ、群馬県教育委員会文化財保護課が試掘調査を実施し、調査の要ありと示された区域について、館林市教育委員会が群馬県からの委託事業として発掘調査を行うことになった。

7月25日、群馬県教育委員会による試掘調査が行われ、北近藤第一地点遺跡の他に分布調査で確認された2地点も含まれることとなった。この2地点については、それぞれ小字名を付し「中島遺跡」・「南近藤遺跡」と命名された。

9月8日付で、群馬県、館林市に委託契約が締結され、翌10月より中島遺跡の調査に着手した。この調査は11月中旬にかけて実施したが、地形の人工改変が著しく、表探遺物と結びつくような遺構は検出されなかった。

11月より、北近藤第一地点・南近藤の2遺跡の発掘調査に着手した。現況が農地であること、耕作者と未調整であること等から、調査にあたって着手の時期をずらしたものである。また、遺跡地内には、62年度内に用地買収の完了しない区域もあり、調査は翌昭和63年度にかけて実施するものとした。

昭和63年6月10日、南近藤遺跡の調査終了。翌7月15日に北近藤第一地点遺跡の調査を終了した。北近藤第一地点遺跡の調査においては、本市の既往調査では例を見ないまとまった住居址（総数26軒、同遺跡において検出された住居址は延30軒になる。）が検出された。現地調査の終了した7月以降を出土遺物整理作業および調査報告書の作成の期間にあてた。

調査中の6月18日㈯の午後に、北近藤第一地点遺跡発掘調査現場を会場として見学会を開し地元の方々を中心に遺跡に対する普及啓蒙を図った。見学者は約350名を数えた。

本事業を実施するにあたり、群馬県・館林土木事務所・群馬県教育委員会文化財保護課をはじめとする諸機関、群馬県史編さん室能登 健氏・大阪市立大学辻 譲一郎氏を中心とする県内外の研究者の方々のご指導と、地元副区長および地域の皆様のご理解とご協力を戴いたことを付記し、深く感謝申しあげます。

第Ⅱ章 遺跡の環境

館林市は、関東地方のほぼ中央、同平野の北西部にあり、群馬県の南東部に位置する。

地形は、台地（洪積台地・内陸古砂丘・自然堤防など）と低地（沖積低地・開折谷・池沼など）に大別される。「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地は、邑楽郡大泉町から同郡板倉町まで延びる。本市におけるその標高は概ね平坦であるが、埼玉県北東部を中心とする関東造鉱地運動の影響により、西部から東部にかけて緩やかな傾斜を見せる。この台地の南北を挟むように利根・渡良瀬の両大河が東流しており、本市の沖積低地はこれに伴うかっての大小河川の氾濫原である。台地を開折する部分には城沼をはじめ多々良沼・近藤沼・茂林寺沼などの池沼や湿地帯が形成され、本市の景観の特徴となっている。

本市の遺跡総数は144遺跡である。内訳は、旧石器時代-3、繩文時代（繩文時代の遺物のみが散布）-13、弥生時代-0、古墳時代から平安時代を含む遺跡-93（うち繩文時代の遺物が散布する遺跡-23）、古墳（墳墓）が推定地を含め16（延25基）、中世生産址-1（多々良沼遺跡）中世城館址-16（伝承地を含む）、近世-2（館林城跡、近藤陣屋跡）である。

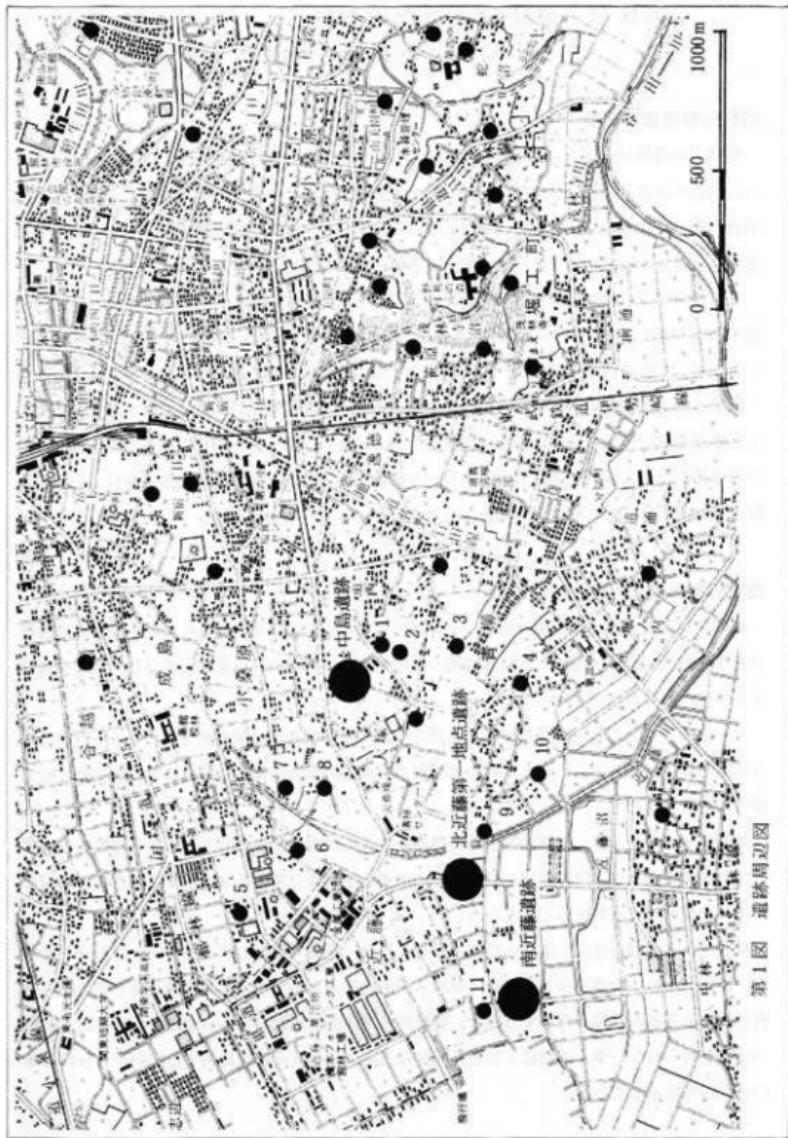
居住区域と想定された遺跡は主として低地に臨む台地上に立地している。

中島遺跡は、国道122号線小桑原交差点の西方300mに所在する。旧東沼（現在は分福町）から北へ延びる開折谷の谷頭付近に立地している。散布する遺物は平安時代のものであり、密度は薄い。旧東沼から台地南部を開折する谷の周辺には、清水橋遺跡①・大塚遺跡②・青柳中島遺跡③・萩原遺跡④が分布する。いずれも谷に沿うように平安時代の遺物が広がっている。

北近藤第一地点遺跡は、東武鉄道小泉線成島駅の南方2kmに所在する。近藤沼に連なる沖積低地を南に臨む高約3mの洪積台地東部に立地している。散布する遺物は繩文時代前期が点在古墳時代後期および平安時代のものは近藤沼より北に延びる谷（現鶴生田川放水路）に沿って濃く見られる。この開折谷は北に延びるに伴い樹枝状の支谷を形成している。奥部付近には近藤障子遺跡⑤・伝右エ門遺跡⑥・北小袋遺跡⑦・小袋遺跡⑧が分布する。（近藤障子遺跡は、近藤北工業団地建設に伴い破壊された。）このうち伝右エ門遺跡は昭和37年の群馬大学による発掘調査に於て5世紀初頭に比定された住居址2軒が検出されている。北近藤第一地点遺跡の対岸付近には、苗木西遺跡⑨・苗木遺跡⑩が分布する。両遺跡とも平安時代の遺物が散布するが、苗木遺跡では古墳時代前期の遺物も部分的に見られる。

南近藤遺跡は、北近藤第一地点遺跡の西方500mに所在する。北近藤第一地点遺跡の立地する台地とは小さな谷により隔てられた台地に立地している。散布する遺物は古墳時代前期が点在、同時代後期および平安時代のものは全体的に濃く見られる。また、同遺跡跡の西200m邑楽町との境にも開折谷が見られる適地点付近には北近藤第二地点遺跡⑪が所在する。

第1図 遺跡周辺図



第Ⅲ章 遺跡分布調査における 中島・北近藤第一地点・南近藤遺跡

遺跡分布調査の概要

館林市の遺跡分布調査は、館林市全域を対象として昭和58年度から五ヶ年事業として実施した。調査の主体は館林市教育委員会であり、調査協力者として、群馬県埋蔵文化財調査事業団調査研究員を中心とする群馬県内の考古学研究者の方々に、環境変遷を探るための試錐調査の実施と分析を大阪市立大学辻 誠一郎氏にそれぞれ依頼した。

この調査により存在が推定された遺跡数は総数 144 遺跡であり、旧台帳（『群馬県遺跡台帳 東毛編』（1971年刊）の遺跡数46遺跡を大きく上回る。遺物の散布地に至っては 700 箇所近い数字となり、その半数以上が奈良～平安時代の土師器片が散布する地点である。

国道 354 号道路改良工事に伴う今回の発掘調査は、遺跡分布調査の結果を踏まえた初めての大規模な発掘調査である。本章は、遺跡分布調査により発見された中島・南近藤の両遺跡および旧台帳を超える範囲で遺跡が推定された近藤第一地点遺跡の発掘調査結果を材料として、遺跡分布調査に照らして検討し、今後の参考にしようとしたものである。

遺跡分布調査の方法と限界

遺跡分布調査の方法は、遺物のマッピングと言う考古学的手法のほかに、地形の歴史的遷行の追求と時代的復元・地域における環境の歴史的変遷の想定の二点を加え検討し、遺跡を推定する手法がとられている。

しかしながら、これ等の手法には自ずから一定の限界があり発掘調査を待たずして遺跡を語り得ないことは周知のことでもあるので、個々の遺跡の調査結果との照合に入る前に整理して置くこととしたい。

遺物のマッピングは、遺跡の営まれた時期から現在に至るまでの間、何等かの影響をもってして地表に現れた土器等の破片をはじめとする遺物を調査対象の地域を限なく踏査し、採取した地点を地図上に記録することを言う。

採取された遺物を基に、遺跡の時代・種類・性格・範囲・残存の状況を推定するわけであるが、住宅密集の市街地をはじめ山林・草原・沢沼地等人為的また自然的影響を強く受け過ぎ遺物の採取に不適の地域が存在する事と、偶発的に地表面に現れる事から遺跡の全容を語る遺物の採取が得られない事、遺物量・散布範囲等は遺跡の残存状況に反比例する傾向が見られる等の諸問題を提示している。

第2図 地形調査図



また、地形の歴史的遷行に関して言えば、遺跡の営まれた時代に対応する地形の復元が、それぞれの時代においてなされ、可能な限り時間を遡上し自然景観にまで到達することが望ましいわけであるが、今回の分布調査においては現在の地表面を観察するに留まり、わずかに「土地条件図」・「空中写真」・「迅速図」を参考に現地での聞き取りを加え、洪積台地と沖積低地を分ける地形分類を行ったに過ぎない。

殊に、本地域において実施されたは場整備としての土地改良は低地の水田耕作地のみか台地にまで及び市街地を除く大部分を占め平坦化する等、台地・低地共に微地形の復元を困難なものとしている。

環境の歴史的変遷の手がかりを得るものとして、シンウォールサンブラーによる試錐調査がある。この調査は低地中の堆積物を柱状に採取するもので、堆積物の土壤サンプル中の花粉化石、大型植物化石、珪藻化石およびテフラなどを分析することで、試錐地点の歴史的環境の変遷を推定しようとするものである。テフラなどを根拠としての実年代の比定もある程度可能なものとなるが、調査の対象が低地にのみ限定され、なおかつその範囲が局地的なものであるという限界性は否めない。台地上の環境の歴史的変遷については、全く不明と言わざるを得ず、台地中の土層に対する実年代の比定というものが解明できない課題となっている。

※ 本市においては、1983年より85年にかけて茂林寺沼他の各池沼と1987年に渡良瀬川河川床および市内東北部の沖積低地においてそれぞれ実施されており、これを基にした推定の結果を参考として下記に提示しておく。（『館林市の遺跡』より抜粋）

- 3000年前以前……………低地は大規模な谷であり、河川は谷底を流れ、一部に池沼や湿原が拡がる。台地と低地の比高差は大きく7m以上と推定される。
- 3000年～2000年前 ……河川の水位が下り、谷地の中の一部は乾燥したものと推定される。
- 2000年～1400年前 ……河川の水位が上り、谷底は水域および湿原となる。堆積による埋没はこの時期と推定される。
- 1400年～1100年前……火山噴火の影響で河川の氾濫が頻繁となり、谷が埋没していく。市内東北部の旧河道と自然堤防はこの時期に形成されたと推定される。



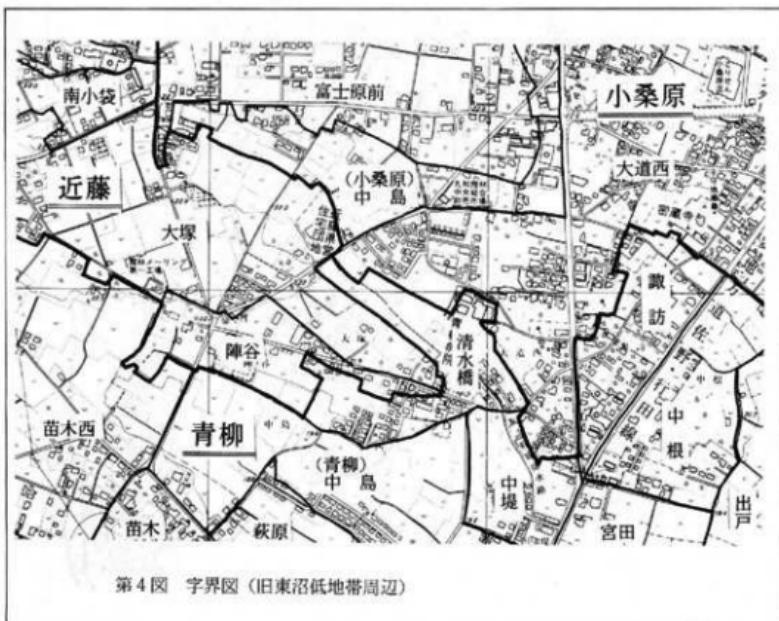
第3図 古墳～奈良・平安時代の遺跡分布

館林市における遺跡分布調査の結果

遺物マッピングでは 689ヶ所の遺物散布地が確認された。このうち遺物が一片のみ見られたのは 402ヶ所、範囲としての散布地が 294ヶ所である。これを立地条件などを下敷に推定したところ 144遺跡が推定された。144の遺跡は、古墳（墳墓）・中世生産址・中世城館址の近世館林城なども含めた数であり、集落としての可能性を持つのは 109遺跡である。

前述の通り遺跡分布調査の方法には、それぞれ一定の限界性を含んでいる。このため遺跡分布調査における「遺跡の確定」は不可能とも言え「遺跡の推定」に留まる。遺跡を確定させるため個々の遺跡の発掘調査がここに必要とされるのである。

今回発掘調査された中島・北近藤第一地点・南近藤の3遺跡においては、全面発掘調査前に試掘調査が行われた。試掘調査は、遺跡の所在、範囲・性格などを探ることを目的としており、これにより遺跡の推定は具体的な裏付を持つことになる。しかし部分調査としての限界性から地下の遺構の内容や保存状況を十分明らかにするには至るものではない。以下各遺跡について試掘調査までの段階で考えられた課題と、調査結果との照合を行ってみたい。



第4図 字界図（旧東沼低地帯周辺）

遺跡分布調査と発掘調査－中島遺跡の場合－

東沼は昭和57年からの宮田川改修事業に伴い埋め立てられその大部分は分福町となつたが、天和二年（1682）の史料（「天和二年六月徳川綱吉代領中諸用集」『群馬県史資料編16』P95）に「東沼長式丁十一間横式丁深さ式尺反別五町式反四畝歩青柳村」と記録されているように、青柳集落と堀工集落の立地する洪積台地に挟まれた低地に細長く広がる沼であった。櫛状のクリーク（堀上田）が見られ、現地での聞き取り調査では稻作も行われていたと言う。

この旧東沼より「邑楽・館林台地」を開拓する谷は3本確認された。つまり①大字青柳字宮田より同字中島を経て字苗木西へ延びる谷（現況は苗木幹線排水路）、②大字青柳字宮田より同字中堤、字清水谷、大字近藤字大塚を経て大字小桑原字中島まで至る谷（現況は漱訪幹線排水路）、③大字青柳字宮田より同字出戸へ延びる谷（宮田2号幹線排水路）の3本である。

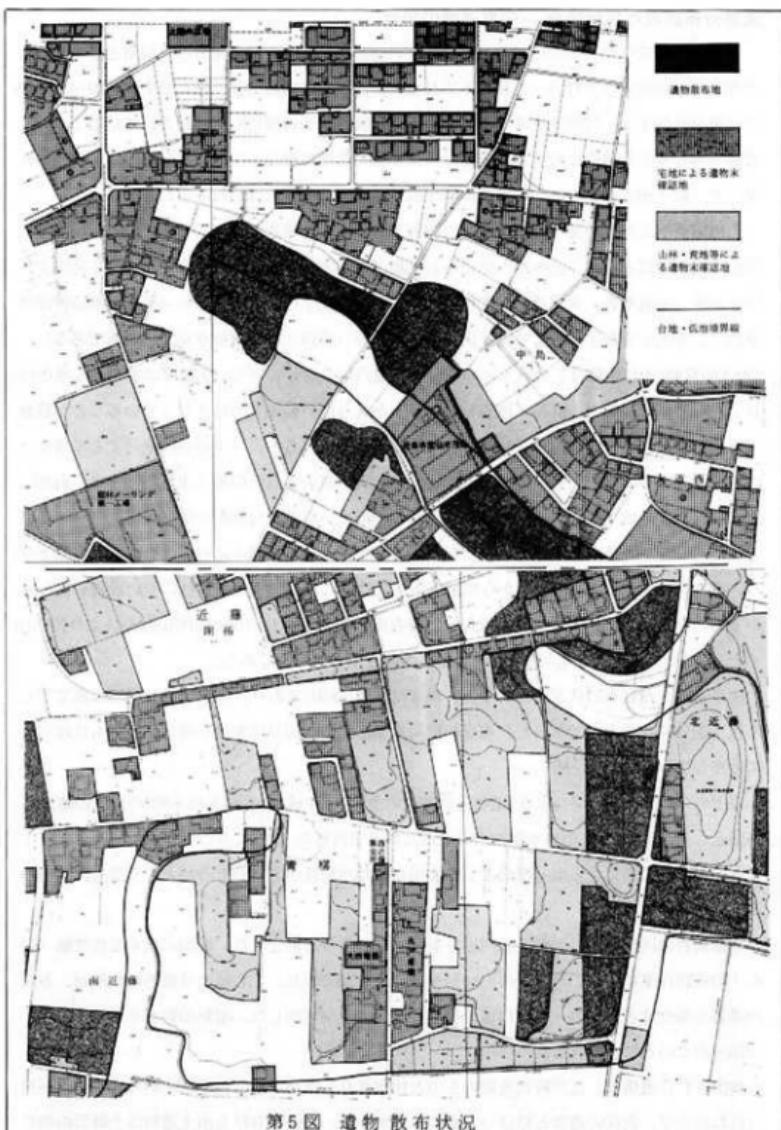
(第4図参照)中島遺跡はこのうち②の谷が遡る地点に立地している。これらの谷の遡る地点付近は一見平坦に見えるが、詳細に踏査してみるとかなり広い範囲で凹地となっていることが観察できる。建設省国土地理院発行の「土地条件図古河」を見ると、3本の谷は遡行するに伴い、広い範囲で浅い凹地が広がっている。「土地条件図」に表された凹地（浅い谷）とは、台地の表面に、細流や地下水の作用により形成された地形で、標高は台地面に比して数センチ程度低くなっているため降水時には集水域になり易く、下流（沖積低地）に向かう表流水の通路となり、必然的に上流（谷頭）は早くから埋積作用を受けて、現況では読み取りにくい景観を呈しているものを言う。中島遺跡の発掘調査区の調査前の標高を「1/1000館林市現況図」より拾い出すと、東側台地—22.3m、凹地—21.7m、西側台地—22.7mである。

次に遺物分布調査の状況を述べると、現況は農地(陸田)であり、確認された遺物は総て平安時代（国分期）のものであった。現在の標高21.8m前後の辺りに密度が薄いながらもほぼ均一に散布していた。

以上の分布調査の結果により、遺物と同時代の遺構（居住域・生産域かは不明）の存否の確認が課題となつた。また現在の排水路が遡る地点に残る三角形の土地が、かつて漏水していたという聞き取り調査の結果から溜井灌漑として使用された可能性があるかどうかという点も調査前の課題となっていた。

発掘調査の区域は、谷頭付近の凹地を東西に貫くような形となり、断面に見える自然層（地山）の確認作業によりこの凹地の旧地形を探ることができた。これにより東西幅約50m、谷底の深さが現台地との比高—2m程度の規模であることが判明した。遺物の散布する範囲の多くの部分がこの谷に含まれる。

検出された遺構は、江戸時代後期のものと比定される水路の他に、時期不明の溝や土垣が見られたのみで、表採の遺物と結びつくものは無かった。調査における出土遺物は土師器の他に



縄文時代のものが出土した。磨耗状況が著しいため時期の比定はできない。

排水路が通る地点にある三角形の土地については、同遺跡の生産形態を考える上で重要な要素と考えられたため、地権者の承諾をいただき試掘調査を実施した。この結果土層断面において滲水した形跡は窺われず、同地点を利用した溜井灌漑についての想定は否定された。

また、谷の部分の土層断面を詳細に観察したところ、自然層であるローム面と現表土を含む堆積層の間に一層残っていることを読み取ることができた。出土する遺物は磨耗した縄文土器であるが、純層であるかどうかは判断できない。ローム面を削っているかどうかについては、調査時においては未確認である。但し現表土はこの層を削り込んだ形で堆積しており、かなり大きな規模の削剥作用があったことが窺われた。このようなことから、掘り込みの深い遺構しか残らなかったものとも考えられる。表採遺物とのかかわりでは「破壊された遺跡」となる。

遺跡分布調査と発掘調査—北近藤第一地点遺跡の場合—

近藤沼は現在でこそ土地改良事業の実施により、方形の沼となりその面影は失われたが、かつては東西に細長く延びた大河川の旧河道の様を呈していた。橋目に開発されたクリーク（掘上田）については有名である。かつての水深は最大で2m、水表面積280,000m²であり、季節による水位の変動が1m内外であったことが『館林市誌自然篇』(1969)に記録されている。

近藤沼より「邑楽・館林台地」を北に開折する谷は3本確認できる。つまり、①大字青柳字北近藤の東端・大字近藤字広手を経て、北へ開折する大きな谷（現況は鶴生田川放水路）、②大字青柳字南近藤を分割する谷、③大字青柳字西ノ谷へ延びる谷（現況は開拓第二号幹線排水路であり、邑楽郡邑楽町との境界となっている。）の3本である。このうち③の谷の西岸に立地するのが北近藤第一地点遺跡である。

同遺跡地の現況は、農地（陸田・畑）・山林・草地となっており、遺物マッピングの対象地は、農地に限定された。散布する遺物は、縄文時代前期（諸磯期）・古墳時代後期（鬼高期）・平安時代（国分期）のものであった。散布状況は、縄文時代は点在、古墳時代・平安時代の遺物は農地に広く濃く見られた。

同遺跡は、旧台帳と言うべき「群馬県遺跡台帳東毛編」(1971年)に掲載されている遺跡であるが、遺跡分布調査において開折谷に沿うような形で範囲が広げられた。山林については遺物の確認が不可能であったものの、群馬県教育委員会が実施した試掘調査により住居址の存在が確定されたので、山林区域にも遺跡が広がることが予想されていた。

今回の調査区は、台地に限定されたが、東西に貫く幅25mの試掘溝を入れるような形となつたため、集落の居住域の東西幅を探すことができた。この結果西へ一宅地住居址の広がりが見られたものの、ほぼ遺跡分布調査の結果との整合がみられた。



住居址の配置を見ると26軒中22軒が、開折谷に沿うように過密し、谷地へ向う傾斜地においても住居址が検出されている。こうした点からは、近藤沼からの開折谷（支谷を含む）に沿った台地東部に集落の居住域が展開していたことを予想させる。

また調査全体を通して出土した遺物は、表採の時代の他に縄文時代中期（加曾利E式期）、古墳時代前期（石田川期）および中期（和泉期）のものが加わったが、これらに結びつく遺構として比定できるものはなかった。

その他調査結果の中で特記したいのは、保存状況が良好であったという点である。壁高を指標とすると、最深の住居址（4号住居址）は確認面から約90cmを計る。竈が検出されたものは22軒を数え、出土遺物も一括のもののが多かった。八方遺跡の調査（1982.8.3-8.4年）で検出された古墳時代の住居址における壁高の平均が約20cm内外、竈の検出例無しという事実と比較しても、遺構の保存状況が良好な削剥の規模の少ない台地であることが判明した。

基礎資料である安政二年（1855）の「封内経界図誌」青柳村の絵図を見ると、近藤沼北側の台地一帯は山林として色分けされている。明治17年（1884）の「迅速図」においても表記は同様である。一般的な場合、地表が山林として覆われている場合、外部營力による削剥は少なくなり、遺跡の保存状況は比較的良好なものとなる。同遺跡が山林として覆われていた期間については検討材料が限られているが、あえて保存状況が良好であるという事実の要因を求めるならば、江戸時代後期以降山林である状態がある程度続いたため大きな削剥を受けなかったということを一つに上げたい。

遺跡分布調査と発掘調査—南近藤遺跡の場合—

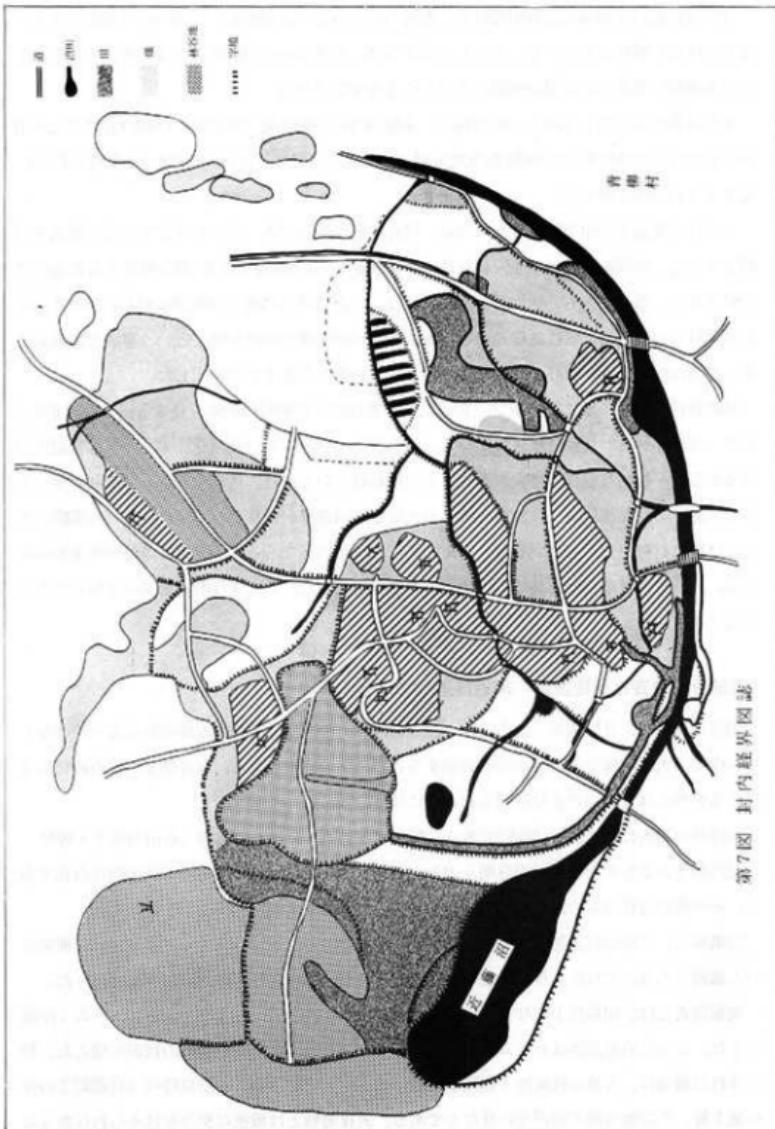
南近藤遺跡は、北近藤第一地点遺跡の西方約200mの位置にある。近藤沼から北へ延びる3本の中でも、大字青柳字南近藤の地を分割する谷の西岸の立地である。北近藤第一地点遺跡の立地する台地とはこの谷により区切られた形になっている。

遺跡地の現況は緑て農地（畠地）であり、散布する遺物は古墳時代前期（石田川期）・後期（鬼高期）および平安時代（国分期）のものであった。散布状況は、古墳時代前期は点在であり、その他の時代のものは標高20m弱の台地に広く濃く見られた。

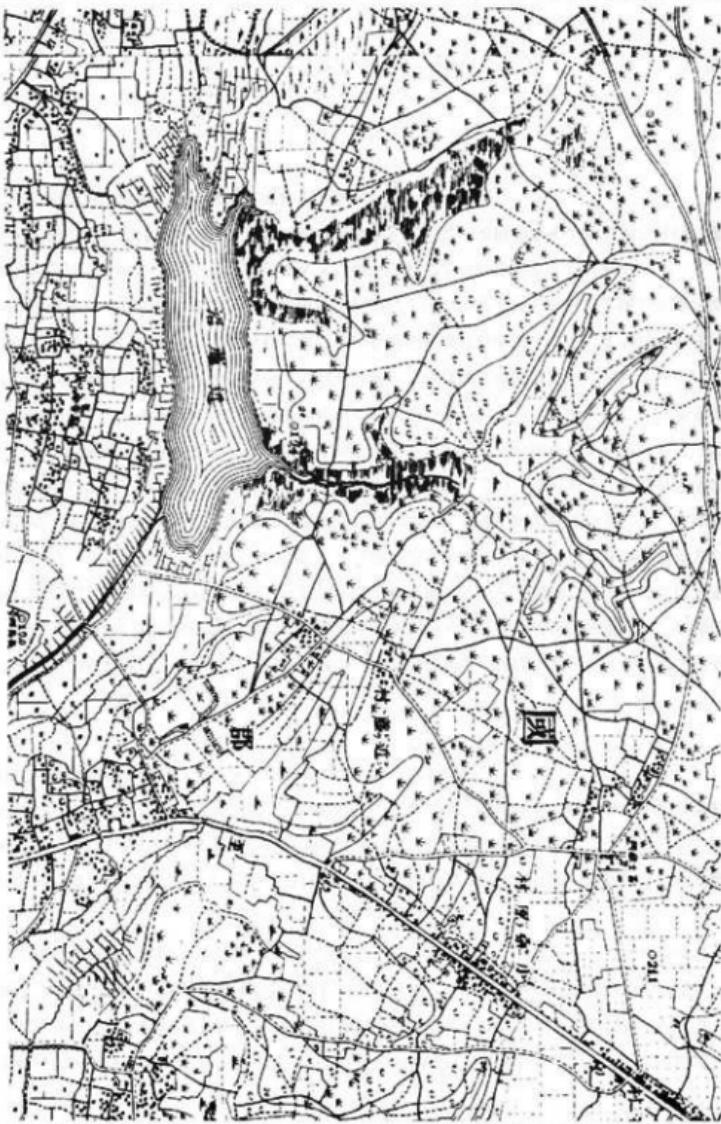
同遺跡は、「群馬県遺跡台帳東毛編」には未掲載であり、遺跡分布調査により遺跡が推定された遺跡である。これにより、散布する遺物と結びつく遺構の存否の確認が課題となつた。

発掘調査では、現耕作土となっている表土が薄く約30cmで1ローム面（ハードローム）が露呈した。このため確認面はローム面となり、自然層（地山）に達する削剥の状況が覗えた。検出された遺構は、古墳時代後期（鬼高期）に比定される住居址3軒と奈良時代（真間期）の住居址1軒、その他時期不明の井戸址などである。表採遺物とは厳密な整合性はみられなかった

第7圖 封內經界圖誌



第8圖 通 道 圖



ものの、古墳時代後期（鬼高期）・奈良時代（真間期）の継続性の考えられる複合遺跡であることが示されたものである。

4軒の住居址は、覆土の色がほぼ同一であり、頭初同時代の住居址であると見られていたものであるが、遺構に結びつく出土遺物により時代を比定したものである。奈良時代（真間期）と比定された住居址は、竈の構築材として使用されている土器の形態編年が決め手となつた。これにより奈良時代（真間期）以降のものであることは間違いなく、それ以前には遇り得ない。

住居址の覆土は、住居址が作られた造代以降の居住域の表土の状況により色採、土質が相違すると考えられるが、この4軒の住居址からは微妙な違いを識別することはできなかった。本遺跡地の立地する台地は、前述の通りハードローム面に達する削削が行われており、検出された住居址の各時代の地表（文化層）を追求するに至っていない。

展望

遺跡分布調査において推定された遺跡の多くは、かつて付近に生活が営まれていた可能性を示すものであるが、その限界性は否めず、実際の発掘調査結果との、低地の埋没状況、台地の削削状況、地下の遺構の性格、時代・保存状況等の整合性を見ると、遺跡ごとに多様な状況を示している。こうした中で今回の3遺跡における調査結果と昭和55年以降館林市教育委員会が実施した発掘調査結果を総観した上で、着目したいのは、「台地の削削状況が著しく、局地的な試錐調査結果を、台地上の層序に整合することができない」という点である。多くの発掘調査に見る土層断面は、現地表を含む層が自然層（地山）であるローム面を削削した形となっている例が多いため、本市における台地上の基本的な層序が明確にできないのである。削削を受けていない台地における遺跡の調査が待たれる反面、今後は中島遺跡の調査において見られた自然層と現表土を含む層の間に見られた層などにも留意しなければならない。また同一遺跡において検出された異なる時代の住居址の覆土の状況などについても同じ性質の土壤が平面的に広がり層を持つものかどうかという点に大きな留意が必要とされると考えられる。

今後の展望としては、以上のような留意点を踏まえた上で、発掘調査を中心とする資料の集積に努めその中で実例に基く検討を進めていきたい。

第Ⅳ章 中島遺跡

第1節 調査内容

本遺跡の調査区は東から、道路・水路によって区切られた4区よりなり、東からⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区と呼称した。(第9図参照)

調査は、Ⅰ区から順次行い、竪穴状造構1基・溝状造構13条・土塙8基・井戸址1基を検出した。各区ごとの造構の内わけはⅠ区(竪穴状造構1基・溝状造構9条・土塙7基)・Ⅱ区(溝状造構1条・土塙1基)・Ⅲ区(井戸址1基)・Ⅳ区(溝状造構3条)である。

溝状造構は、11号溝状造構を除き(この造構のみ南北に軸線をもつ)、東西に軸線をもち、ほぼ平行して並ぶ。その性格については、不明な点が多いものの明治6年地租改正図作成時における小桑原村絵図面、(『上野国邑楽郡小桑原絵図面』(群馬県立文書館蔵))により、11号溝状造構が明治6年時には水路として使用されていたことが裏付けられた。

また6号溝状造構は、明治6年の絵図面では見られないものの、形状・規模が11号溝状造構に類似するため、水路等として使用されていたと考えられる。

他の小規模の溝状造構についてはその性格を明らかにすることはできなかった。



写真1 調査風景

土塙については、1号土塙が陥し穴である可能性を持つが、構築および使用の時期を比定する要素はない。その他の土塙は、縦じて形状・規模などが類似しているものの、発掘調査では性格・時代を明らかにするに至らなかった。井戸址についても同様である。

また、調査区域の南北に2本の試掘溝を掘り下げ断面の観察により同遺跡の旧地形および現地形の形成過程の確認を試みた。自然層（地山）であるローム面からは現況よりかなりの凹地であったことが窺え、現在の台地面との比高—2m程度となる。（現況では—0.5m程度の凹地である。）谷頭地点の断面において、ローム面と現地表を含む層の間に黒色の一層が見られた。この層中からの出土遺物は縄文時代の土器片が見られたが、堆積状況から純層であるかどうかの判断できなかった。但し、現地表を含む層は明らかにこの層を削剥した形で堆積しており、かかる状況から、同地においてはローム面に達する掘り込みである数状の溝しか残らなかったものと考えられる。

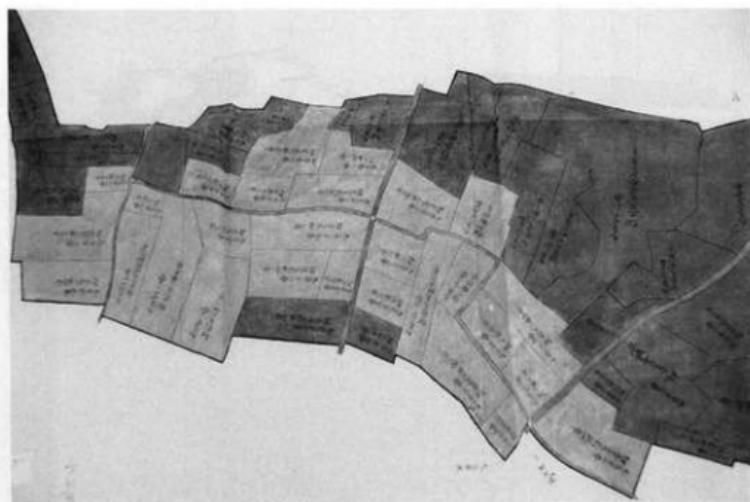
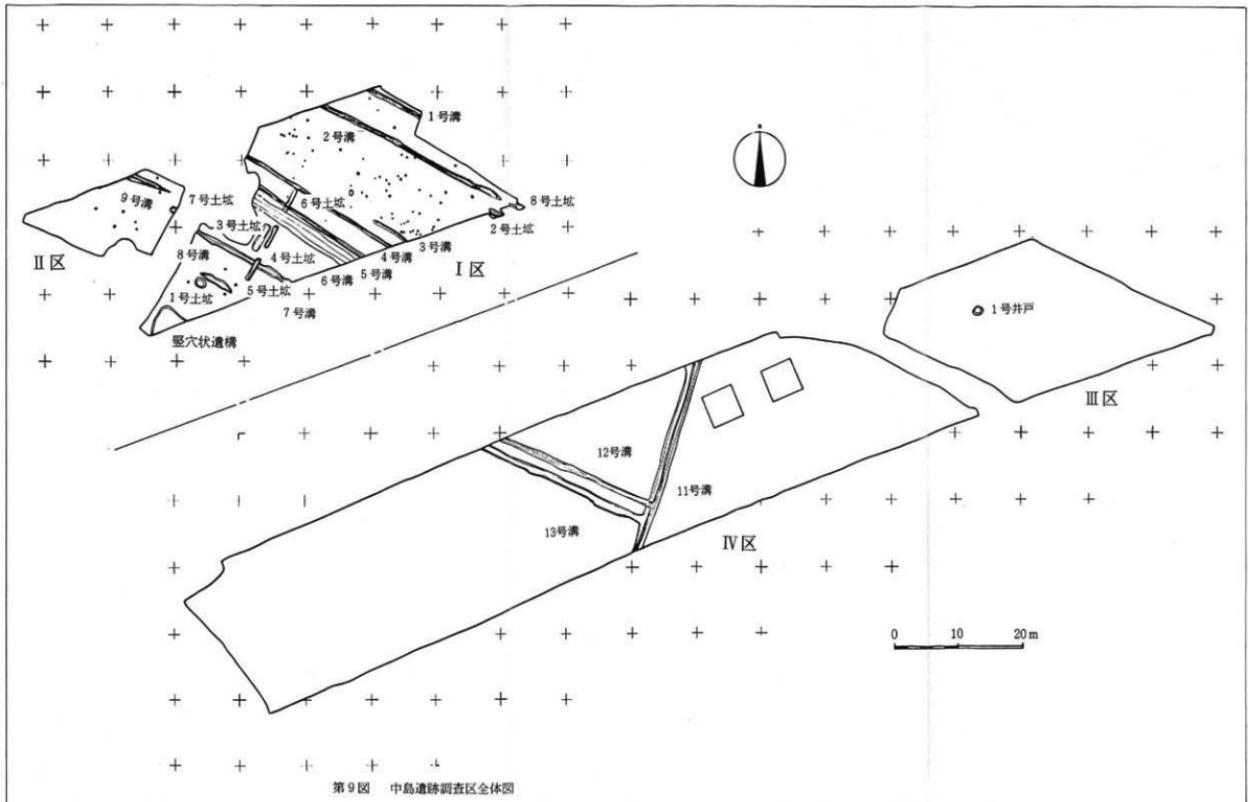


写真2 上野国邑楽郡小桑原絵図面



第9図 中島遺跡調査区全体図

第2節 検出された遺構

溝状遺構

調査において確認・調査された溝状遺構は13条ある。

11号溝状遺構を除いて（この遺構のみ南北に軸線を持つ。）すべて東西方向に軸線を持ち、ほぼ平行して並ぶ。

6号溝状遺構は、確認された溝状遺構中最大のもので底部に幅30m、深さ20mの断面形が方形の溝をもつ二段構造をしており、西へ向かってわずかに傾斜する。

いずれの溝状遺構も、時期を確定できる要素はないものの、陸田のパイプ配管よりは古いことは確認できた。



写真3 6号溝状遺構

土 坡

確認・調査された土坡は、8基である。

いずれも構築の時期を比定できる遺物は出土していない。

1号土坡については、逆茂木（さかもぎ）痕等は確認されなかったが、その形状から陥し穴である可能性が強い。

他の土坡についてはその性格、時期とも確定できる要素はない。

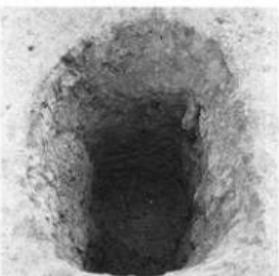


写真4 1号土坡

井 戸 址

本遺跡で確認された井戸は1基である。完掘していないので、構築・使用的時期は確定できないが、覆土の状況より、その廃棄は人為的に短時間に行なわれたものと思われる。（ロームブロックと暗褐色土壤の混土）



写真5 1号井戸址

堅穴状遺構

本遺構は、調査区外にそのほとんどの部分が存在するものと思われるが、調査区内から推定すると方形を呈するものと思われる。

床面はかなりの凹凸を持ち、壁溝・柱穴・竈（炉）などの検出もなく、住居址としては握えることができない。

出土遺物も少なく、床面から僅かに数個の礫（円礫）と覆土中より数片の土師片の出土を見たに留まる。



写真 6 堅穴状遺構

第V章 北近藤第一地点遺跡

第1節 調査の内容

本遺跡の調査区は道路によって区切られた3区より成り、東からⅢ区・Ⅰ区・Ⅱ区と呼称した。(第11図参照)。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの名称は調査の順により付したものである。

調査はⅠ区から順次着手し、表土の掘削を行い、遺構確認作業後、遺構調査を行った。

調査グリッドは、国家座標(X=25380、Y=-29240)を基準として、南へA～Mの13G、西へ1～28Gの28G、計364個の10m×10mのグリッドを想定し、路線にかかるA-1～3G、B-1～5G、C-1～9G、D-1～9G、E-3～9G、F-6～15G、G-8～17G、H-10～19G、I-13～22G、J-15～24G、K-20～26G、L-20～28G、M-23～28Gの計105個のグリッドを調査した。

調査によって検出された遺構は、住居址26軒、掘立て柱遺構2棟・鍛冶遺構1基・井戸址5基、円形の周構遺構1基で、各区ごとの遺構の内訳は、Ⅰ区(住居址3軒、円形周構遺構1基・井戸址1基)、Ⅱ区(住居址1軒、掘立て柱遺構2棟・鍛冶遺構1基・井戸址4基)、Ⅲ区(住居址22軒)であった。



写真7 調査風景

本遺跡は、近藤沼から北へ長く延びる開析谷の基部西岸から近藤沼北岸に広がる古墳時代の集落址である。

今回の調査で検出された住居址は、いくつかの形態に分けることができる。（調査区外に未調査部分を持つ6・7・8・9・12・13・16・25号住居址の8住居址は分類から除く。）

まず大きく正方形・縦長方形・横長方形の3つに大きく分けられる。

正方形の住居址はさらに付属施設から3種に分けられる。一辺4.5m以上の正方形の住居址(1・2・3・4・5・10・18・23号住居址)は、竈を付設する辺のほぼ中央に持つ。貯蔵穴を竈の右側に持ち、柱穴も4本主柱(5号住居址のみ5本の柱穴を持つが、1本は後の附加か付け換と推定)であり、壁溝も全周する整然とした住居設計を持つ。一辺3.5m以下の正方形の住居址は、竈を付設するものの主柱穴を欠く。11号住居址は大きさが前述2種の中間にあたり、竈の付設・4本主柱などは、大きな住居址と共通するものの貯蔵穴を欠いている。

縦長方形の住居址は2軒であったが、竈の付設とその右側に貯蔵穴を持つが主柱穴は5本と(22号住居址)と6本(26号住居址)である。

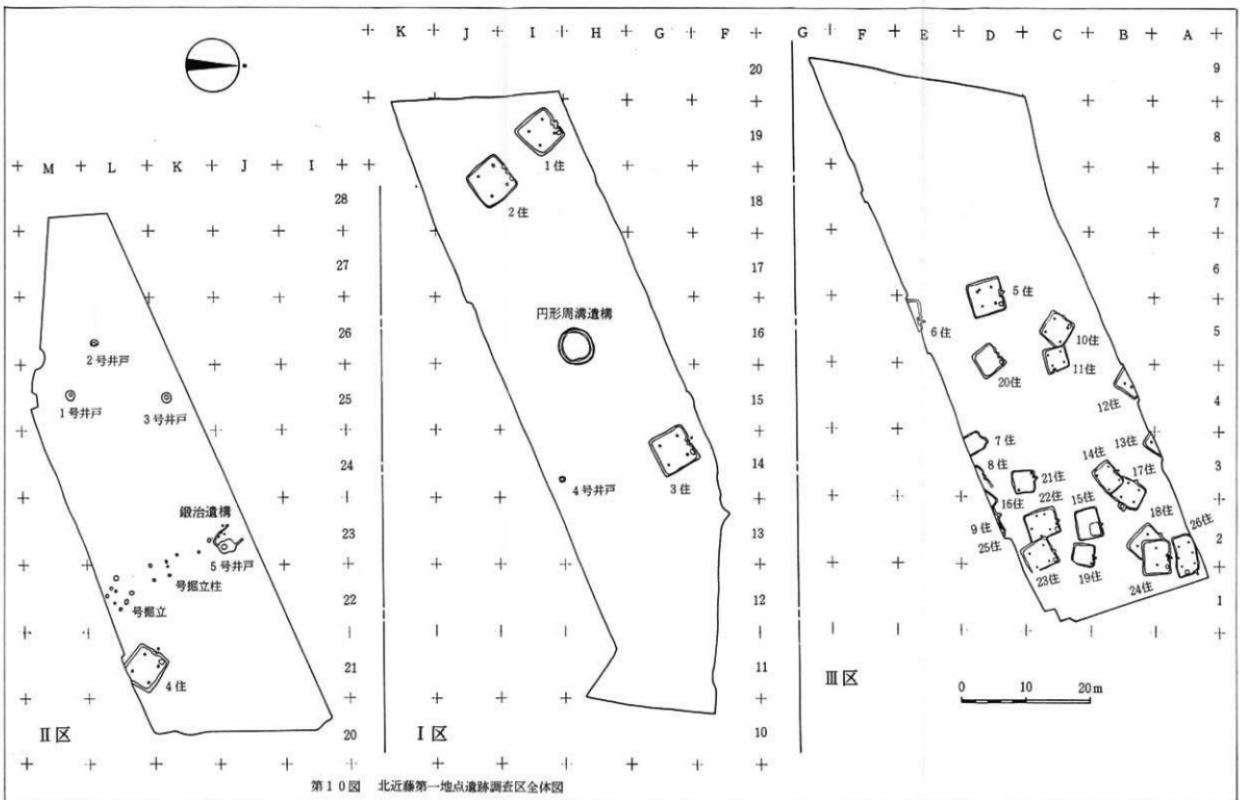
横長方形の住居址は、同規模の住居址がなく、その大きさからは形態を分けることはできない。この型の住居址の形態は多様である。4本主柱で貯蔵穴を持たない14・17号住居址、竈右側に貯蔵穴を持ち主柱穴のない20号住居址、主柱穴・貯蔵穴ともに持たない15号住居址、竈右側に貯蔵穴を持ち主柱穴2本の24号住居址など、細分する基準に欠く。今後、本遺跡の横長方形、縦長方形の住居址の資料追加を待ち分類を企りたい。

本遺跡の竈の主軸はほとんどかやや北から西に傾いており(11・26号住居址の2軒は東へ60度程度傾く)、その付設する辺も住居址の北辺(4・10号住居址が西辺)であった。

竈構築材としては、袖に土器師の長胴甕を使うものが目立つ他、本遺跡地ローム下層の砂質石材(内陸古砂丘の構成砂か)を使う例が大型の住居址においてみられた。支脚材としては土製の支脚・高杯(逆位)・紡錘状角閃石安山岩等の使用が見られた。

また、本遺跡においては焼失住居と思われる住居が3軒検出(1・2・3号住居址でいずれもI区より検出された住居址)されており、出土遺物からも同時期に存在されたと推定できる。住居址の焼失時期の解明については今後の課題としたい。

最後に、本遺跡を特徴できる遺物として土玉・土錘の出土量の豊富さが指摘できる。生産域としての近藤沼との深いかかわりが想定される。



第10図 北近藤第一地点遺跡調査区全体図

第2節 検出された遺構

1号住居址



写真8 1号住居址

位置 H.I-19G
方位 N-39°-W
形状 台形
規模 5.97×6.03m
竪 位置 北辺・中央

焚口部幅 48cm

終焼部 51×43cm

煙道部長 不明（擾乱）

構築材 袖…砂質石材・粘土

臺砂質石材…この石材は、本遺跡のローム下に存在する細砂からなる石材で、締りが弱く崩れやすい。内陸古砂丘を構成する砂層と同一と考えられる。

貯蔵穴 位置 北東隅 平面形 楕円形 規模 86×70cm

壁溝 全周 壁高 68cm



写真9 1号住居址 遺物出土状態

柱穴 4本 (2.96—2.66—

2.70—2.82m)

重複関係 無

遺物出土状況

- ① 貯蔵穴周辺・柱穴と柱穴を結ぶ線上に集中して出土する傾向をもつ。
- ② 全体的に出土量は少ない。
- ③ 完形個体（土玉は除く）の出土はなかった。破片での出土がほとんどであった。
- ④ 土玉は、南西の柱穴の南から集中して出土した。

調査者観察・考察

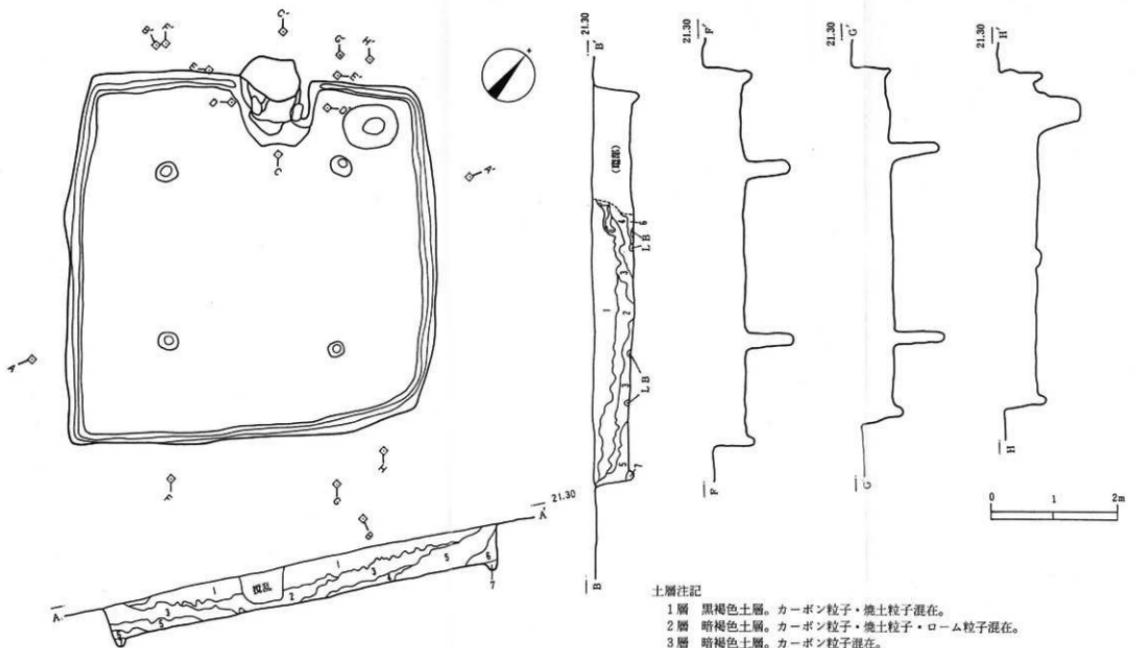
- ① 住居址床面からは、カーボン粒子・焼土粒子が全面にわたって確認された。
- ② ①より焼失住居である可能性がある。
- ③ 土玉の出土位置は、同2号住居址・同3号住居址に共通し、住居址の南西の柱穴周辺であった。
- ④ 出土土玉の総数は19個体に及ぶ。



写真10 1号住居址 電



写真11 土玉出土状態



土層記

- 1 層 黒褐色土層。カーボン粒子・焼土粒子混在。
- 2 層 暗褐色土層。カーボン粒子・焼土粒子・ローム粒子混在。
- 3 層 暗褐色土層。カーボン粒子混在。
- 4 層 暗褐色土層。カーボン粒子混在。
- 5 層 黒褐色土層。ローム粒子・焼土粒子混在。
- 6 層 黒褐色土層。ロームブロック少量認められる。
- 7 層 にぶい黄褐色土層。ハードロームブロック・ソフトロームブロックの混土層。カーボンブロック点在。
- '1 層 1 層と同層。より焼土粒子が多い。
- '1 層 1 層と同層。よりカーボン粒子が多い。

第11図 1号住居址

2号住居址



写真12 2号住居址

位置 L.J-18・19G

方位 N-43°-W

形状 正方形

規模 6.41×6.28m

窓位置 北辺・中央

焚口部幅 53cm(推定)

燃焼部 65×79cm

煙道部長 不明 構築材 粘土

貯蔵穴 位置 北東隅 平面形 楕円形 規模 70×60cm

壁溝 全周 壁高 62cm

柱穴 4本(3.35—3.35—3.49—3.33m)

重複関係 無

遺物出土状況

① 窓周辺・南西の柱穴周辺に集中して出土する傾向をもつ。

② 全体的に出土量は少ない。



写真13 2号住居址 遺物出土状態

③ 完形個体（土玉は除く）
の出土はなかった。破片で
の出土がほとんどであった。

④ 土玉は、南西の柱穴周辺
から集中して出土した。

調査者観察・考察

- ① 住居址床面からは、カーボン粒子・焼上粒子が全面にわたって確認された。
② ①より焼失住居址の可能性がある。

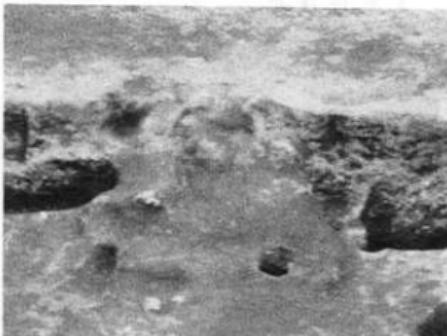


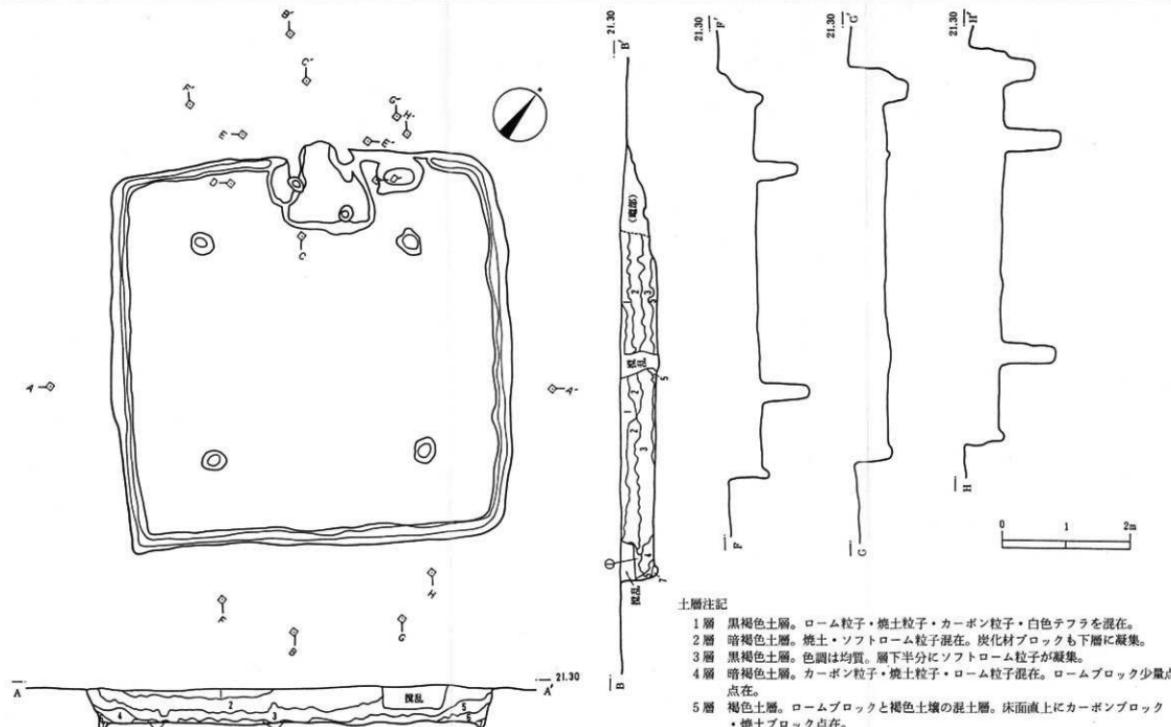
写真14 2号住居址 窯

3号住居址



写真15 3号住居址

位置	F・G-14, G-15G	方位	N-42°-W
形状	正方形	規模	6.13×6.08m
窯 位置	北辺・中央	焚口部幅	51cm
		燃焼部	54×50cm
煙道部長	84cm	構築材	袖…砂質石材・粘土 支脚…土製品 煙道部…粘土
貯蔵穴 位置	北東隅	平面形	楕円形
壁溝	全周	壁高	82cm
柱穴	4本 (3.35-3.02-3.10-3.16m)		
重複関係	無		



第12図 2号住居址

土層注記

- 1層 黒褐色土層。ローム粒子・焼土粒子・カーボン粒子・白色テフラを混在。
- 2層 暗褐色土層。焼土・ソフトローム粒子混在。炭化材ブロックも下層に凝集。
- 3層 黒褐色土層。色調は均質。層下半分にソフトローム粒子が凝集。
- 4層 暗褐色土層。カーボン粒子・焼土粒子・ローム粒子混在。ロームブロック少量点在。
- 5層 暗褐色土層。ロームブロックと褐色土壌の混土層。床面直上にカーボンブロック・焼土ブロック点在。
- 6層 暗褐色土層。ロームブロックと5層混土層。カーボンブロック混在。
- 7層 にぶい黄褐色土層。ハードロームブロック・ソフトロームブロックの混土層。
- ①層 黒褐色土層。カーボン粒子混在。

遺物出土状況

- ① 総体的に遺物の出土量は多い。
- ② 完形個体は貯蔵穴・竈周辺に集中して出土する傾向をもつ。
- ③ 住居址の北西部・床面より土師器のハソウが出土している。
- ④ 破片遺物は、床面直上、全面にわたり出土している。
- ⑤ 完形個体の多くは、順位もしくは逆位で出土しており、大きく原位置を動いたとは思われない出土状況を示す。
- ⑥ 1号・2号住居址と同様、土玉が南西柱穴の周辺より出土している。（6個体）
- ⑦ 覆土中より、土製の勾玉の破片が出土している。
- ⑧ 竈の構築材としての支脚が、竈燃焼部の中央より出土しているほか、竈脇から2個体住居址中央の床面直上から出土している。
- ⑨ 竈右脇から土師器・瓶が土師器・小壺の上に順位で重なって出土している。

調査者観察・考察

- ① 住居址の床面より多量のカーボン粒子の検出があった。
- ② ①の観察より、焼失住居である可能性が強い。遺物の出土状況、出土量の豊富さからも焼失による緊急な住居の廃棄が窺える。
- ③ 土師器・ハソウ、土製の勾玉の出土等、住居址としての特殊性が窺える。
- ④ 西辺・中央やや北よりの壁際床面直上から、竈袖の構築材と同質の砂質石材が出土している。その性格については不明である。
- ⑤ 本住居址の設計プランは、 $6.13 \times 6.08\text{m}$ の整然としたプランを持つ。竈の主軸が、竈の付設壁に対して直交せずやや西へ傾いている。



写真16 3号住居址 遺物出土状態(1)



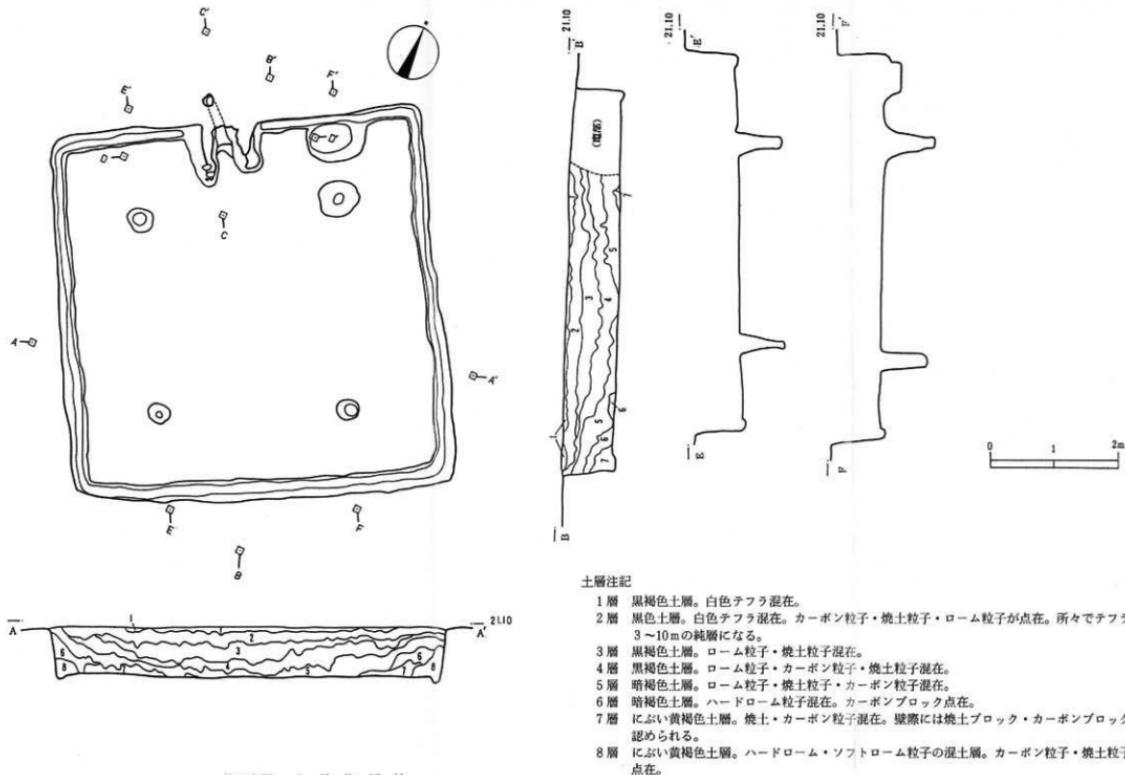
写真17 3号住居址 遺物出土状態(2)



写真18 3号住居址 遺物出土状態(3)



写真19 3号住居址 窑



第13図 3号住居址

4号住居址

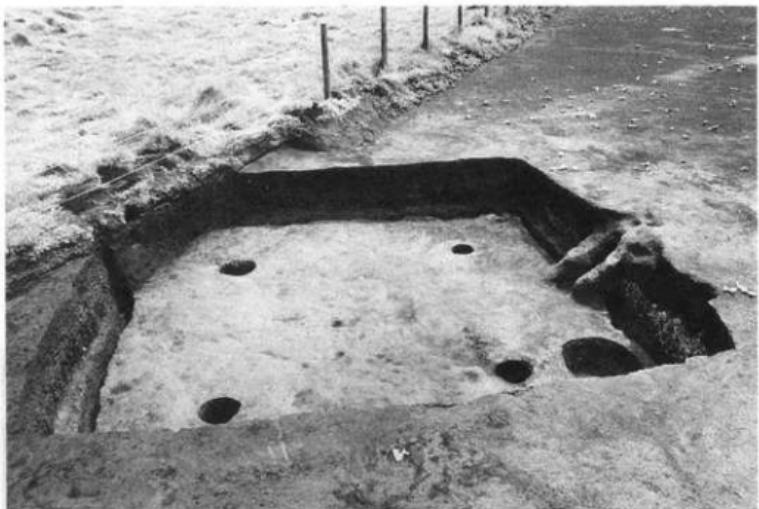


写真20 4号住居址

位置 K, L-21G
 方位 N-66° -W
 形状 長方形
 規模 5.76×6.14m
 焚 位置 西辺・中央
 焚口部幅 40cm
 燃焼部 40×67cm
 煙道部長 73cm
 構築材 粘土
 廪藏穴 位置 北西隅 平面形 隅丸長方形 規模 100×75cm
 壁溝 全周(?) (一部調査区外のため未調査) 壁高 97cm
 柱穴 4本 (2.94-2.96-3.06-2.80m)
 重複関係 無
 遺物出土状況

① 完形個体の出土は、鉄製品（刀子・鉄鎌）等の小型遺物を除き見られなかった。



写真21 4号住居址 遺物出土状況

- ② 刀子は、竈の左側袖外側の中位の部分から出土している。
- ③ 鉄族は、住居址北東部分床面直上より出土した。
- ④ 破片遺物が、覆土中より出土。出土量は少ない。
- ⑤ 須恵器・壺の破片（裏面の調整は青海波のタタキ目）が数片出土したが、接合資料とならなかった。

調査者観察・考察

- ① 本住居址は、本遺跡で検出された遺構中最も高い壁高（97cm）をもつ住居址であった。
- ② 検出住居址中最も西から検出された。
- ③ 本遺跡の居住域の西端に辺るものと想定される。



写真22 4号住居址



写真23 刀子出土状態

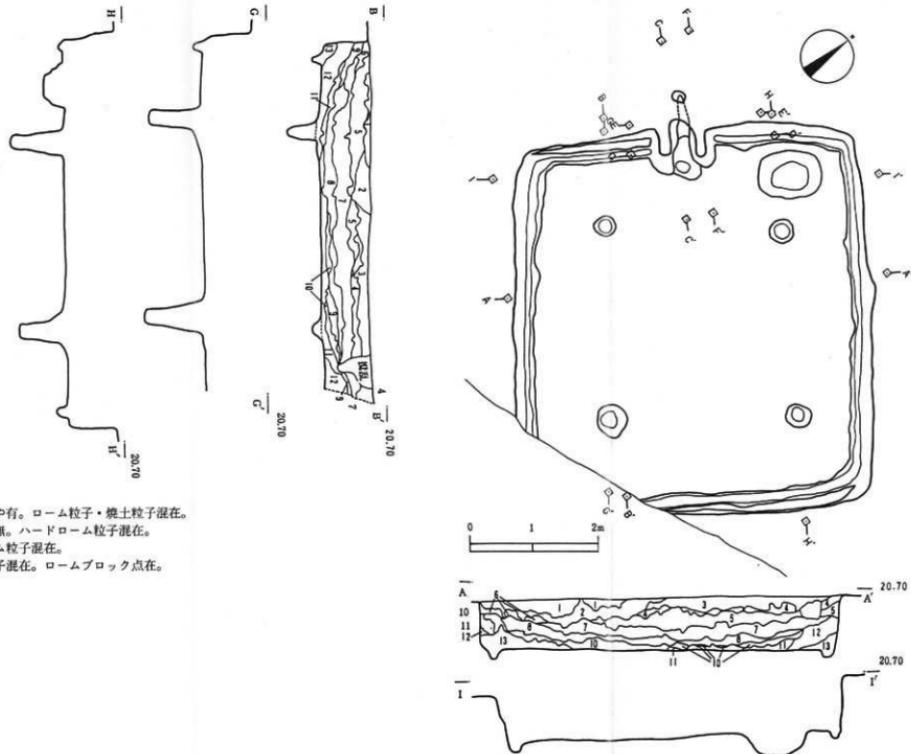


写真24 鉄族出土状態

土層注記

- 1層 暗オリーブ暗褐色土層。粘性弱。締まり有。まり有。白色テフラ混在。
- 2層 黒褐色土層。粘性弱。締まりやや有。白色テフラ混在。ローム粒子・焼土粒子点在。
- 3層 黑褐色土層。粘性弱。締まりやや有。白色テフラ混在。焼土粒子点在。
- 4層 黑褐色土層。粘性・締まり共に共にやや有。白色テフラ・焼土粒子・ローム粒子点在。
- 5層 黑褐色土層。粘性弱。締まり有。テフラ混在。焼土粒子点在。
- 6層 黑褐色土層。粘性・締まり共に弱。テフラ点在。
- 7層 黑褐色土層。粘性弱。締まりやや有。ローム粒子・焼土粒子・テフラ粒子混在。
- 8層 黒色土層。粘性弱。締まりやや有。ローム粒子・焼土粒子点在。
- 9層 黑褐色土層。粘性・締まり共にやや有。
- 10層 暗オリーブ褐色土層。粘性・締まり共にやや有。ローム粒子・焼土粒子混在。
- 11層 暗オリーブ褐色土層。粘性やや有。締まり無。ハードローム粒子混在。
- 12層 暗褐色土層。粘性やや有。締まり弱。ローム粒子混在。
- 13層 暗褐色土層。粘性有。締まり弱。ローム粒子混在。ロームブロック点在。

第14図 4号住居址



5号住居址



写真25 5号住居址

位置 D-5・6 G

方位 N-14.5-W

形状 正方形

規模 5.39×5.36m

竈位置 北辺・中央

焚口部幅 57cm

燃焼部 56×51cm

煙道部長 43cm

構築材 袖…長甕・粘土

架梁部…長甕・粘土

煙道部…土器片・粘土

貯藏穴 位置 北東隅 平面形 楕円形 規模 62×56cm

壁溝 全周 壁高 65cm

柱穴 5本 (2.18—2.32—0.50—1.93—2.60 m)



写真26 5号住居址 遺物出土状態(1)

重複関係 無

遺物出土状況

- ① 電の構築材として
電周辺より土師器の
長胴甕が出土。
- ② 電脳、貯藏穴周辺
より完形個体（土師
器の甕、壺）が出土
- ③ 住居址の中央、床
面直上より、土師器
の壺（大型）が押し
つぶされた情況で出
土。
- ④ 全体的に見て、完形個体の出土以
外の破片個体の出土は少なかった。

調査者観察・考察

- ① 遺物の出土が、電およびその周辺、
貯藏穴周辺に集中し、しかも完形個体
の多いことが目立つ。
- ② 電が比較的良好に残存しており、電
の構造を判断するのに良好な状態にあ
ったが、電内にすえてあった完形の土
師器・壺が盗難にあうとともに、その
際電が破壊され、充分な記録が残せな
かったことが悔まれる。
- ③ 粉失土器については、取り上げの最
終番号（217）を付し、出土状態の写
真にて報告することとする。
- ④ 柱穴が5本確認されており、Pit 3・
4の新旧関係は不明なもの、柱の立
て換え、もしくは付加が想定される。



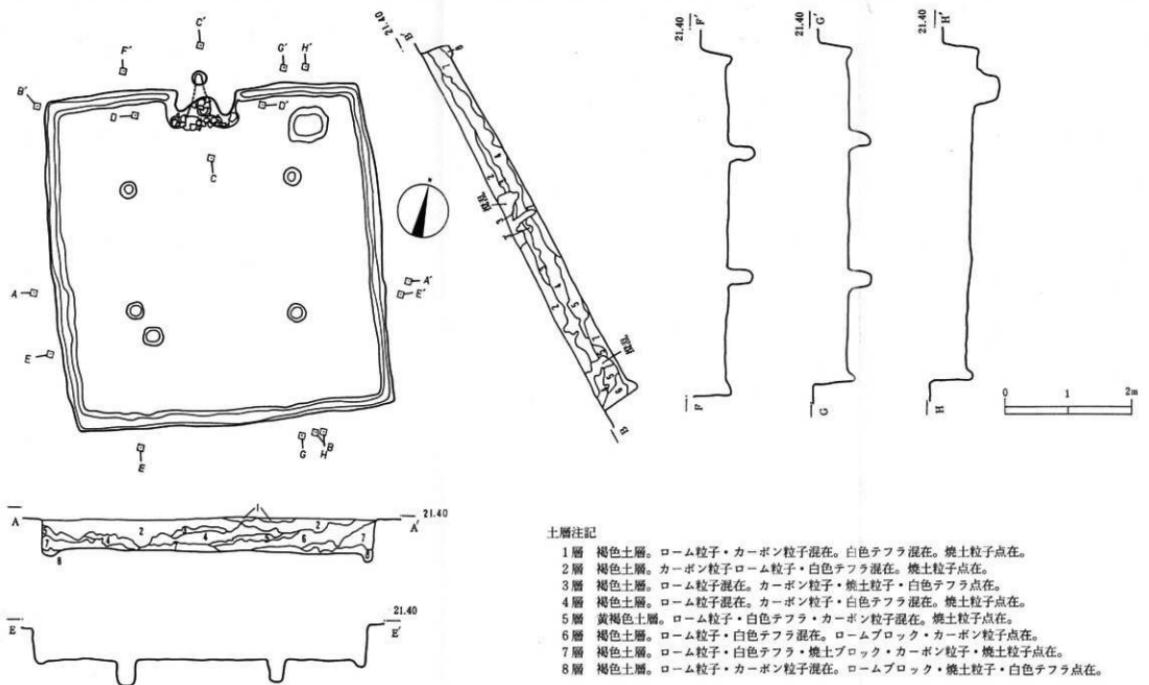
写真27 5号住居址 電



写真28 5号住居址 遺物出土状態(2)

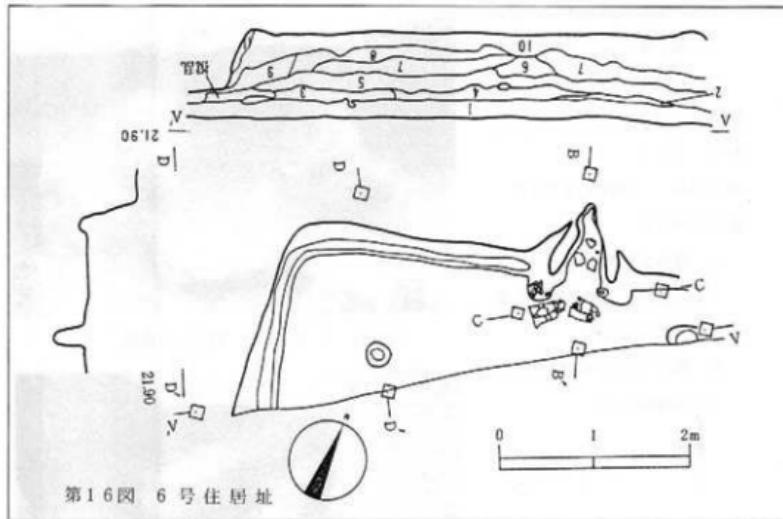


写真29 5号住居址 遺物出土状態(3)



第15図 5号住居址

6号住居址



位置 E-5G
方位 N-7°-W
形状 方形
規模 (4.86) × (2.18) m

電 位置 北辺・中央
　　焚口部幅 56cm
　　燃焼部 61×(50) cm
　　煙道部長 (53) cm
構築材 袖…長甕・粘土
　　架梁部…長甕
　　支脚…石

(角閃石安山岩)

貯藏穴 位置 北東隅
平面形 不明
規模 不明



写真30 6号住居址

壁溝 北辺・西辺

(南辺は調査区外にて不明。東辺は、木根による搅乱のため未確認)

壁高 63cm

柱穴 (1本)

重複関係 調査区内では無。

遺物出土状況

- ① 罐および甌周辺から、構築材として、土師器・長甌支脚石等が出土。
- ② 覆土中からの遺物の出土は比較的少ない。



写真31 6号住居址 遺物出土状態



写真32 6号住居址 罐

6号住居址 土層注記

1層 褐色土層。ローム粒子・カーボン粒子混在。燒土粒子点在。2層 暗褐色土層。ローム粒子・燒土粒子・燒土ブロック点在。砂質。色調は均質。3層 暗褐色土層。ローム粒子・燒土粒子混在。砂質。4層 暗褐色土層。ローム粒子・燒土粒子点在。砂質。5層 暗褐色土層。ローム粒子・燒土粒子・カーボン粒子混在。燒土ブロック点在。砂質。6層 暗褐色土層。ローム粒子・燒土粒子・カーボン粒子混在。ロームブロック点在。7層 暗褐色土層。ローム粒子・燒土粒子・カーボン粒子混在。砂質。色調は不均質。8層 暗褐色土層。ローム粒子・燒土粒子・カーボン粒子混在。カーボンブロック・ロームブロック点在。砂質。9層 暗褐色土層。ローム粒子・カーボン粒子混在。燒土粒子・燒土ブロック点在。やや砂質。10層 黄褐色土層。ローム粒子・カーボン粒子混在。ロームブロック・燒土ブロック点在。やや砂質。11層 褐色土層。ローム粒子・カーボン粒子混在。燒土粒子点在。やや砂質。

7号住居址 土層注記

1層 褐色土層。ローム粒子混在。砂質。2層 褐色土層。ローム粒子混在。ロームブロック点在。砂質。3層 褐色土層。ローム粒子混在。ロームブロック・燒土ブロック点在。砂質。4層 暗褐色土層。ローム粒子・ロームブロック混在。燒土粒子点在。やや砂質。5層 褐色土層。ローム粒子均質に混在。ロームブロック・カーボンブロック・燒土粒子点在。ローム粒子混在。やや砂質。6層 褐色土層。燒土粒子・燒土ブロック点在。6層 に古い黄褐色土層。カーボン粒子点在。ローム粒子混在。やや砂質。7層 褐色土層。燒土粒子・燒土ブロック点在。ローム粒子・ロームブロック・カーボンブロック混在。8層 褐色土層。ローム粒子混在。カーボン粒子少量点在。9層 黄褐色土層。ローム粒子・ロームブロック多量混在。カーボン粒子・燒土粒子点在。10層 褐色土層。燒土粒子点在。ローム粒子・カーボン粒子・ロームブロック混在。砂質。11層 褐色土層。ローム粒子・ロームブロック・燒土粒子・カーボン粒子混在。燒土ブロック点在。12層 褐色土層。ローム粒子混在。カーボン粒子・ロームブロック・燒土粒子点在。

7号住居址

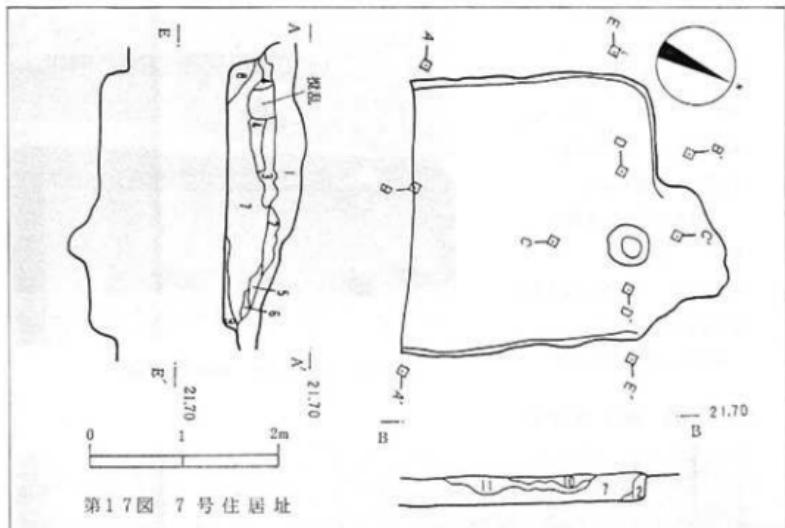


写真33 7号住居址

位置 D-3G
方位 (N-17°-W)
形状 方形
規模 3.00×(2.79)m
竈 位置 北辺・中央
貯蔵穴・壁溝・柱穴
調査区内では未検出。

壁高 46cm
重複関係 調査区内では無。
遺物出土状況
遺物出土量は少ない。



写真34 7号住居址 遺物出土状態

8、9、16、25号住居址

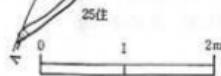


写真35 8号住居址

位置 D-3G 方位 N-29°-W 形状 方形（推定）
規模 (3.40)×(0.62m)
竈 位置 北辺・中央 焚口部幅 34cm 燃焼部 34×(33)cm

土層注記

- 3層 暗褐色土層。粘性弱。締まり有。カーボン粒子・焼土粒子点在。
- 4層 褐色土層。粘性・締まり共に有。カーボン粒子・焼土粒子・ロームブロック点在。
- 5層 暗褐色土層。粘性弱。締まりやや有。焼土粒子・カーボン粒子点在。
- 6層 褐色土層。粘性強。締まり弱。焼土ブロック点在。
- 7層 暗褐色土層。粘性無。締まり有。焼土粒子・ローム粒子・カーボン粒子混在。
- 8層 暗褐色土層。粘性弱。締まり有。焼土粒子・カーボン粒子点在。
- 9層 にぶい黄褐色土層。粘性やや有。締まり有。白色粘土粒子・焼土粒子点在。
- 10層 褐色土層。粘性有。締まり有。焼土粒子・カーボン粒子点在。
- 11層 暗褐色土層。粘性無。締まり有。焼土粒子混在。カーボン粒子点在。
- 12層 黒褐色土層。粘性無。締まりやや有。焼土粒子・ブロック・白色テフラ点在。ローム粒子混在。
- 13層 暗褐色土層。粘性無。締まり有。焼土粒子・ローム粒子・カーボン粒子混在。焼土ブロック・クロームブロック・クロック点在。



第18図 8、9、16、25号住居址

- 8住 暗褐色土層。2100
- 14層 暗褐色土層。粘性弱。締まりやや有。焼土粒子点在。
- 15層 褐色土層。焼土粒子点在。
- 16層 褐色土層。粘性・締まり共にやや有。焼土粒子・カーボン粒子点在。
- 17層 暗褐色土層。粘性無。締まり強。白色テフラ・カーボン粒子点在。
- 18層 暗褐色土層。粘性無。締まりやや有。焼土粒子・カーボン粒子点在。
- 19層 暗褐色土層。粘性弱。締まりやや有。焼土粒子・カーボン粒子・ロームブロック点在。
- 20層 暗褐色土層。焼土粒子混在。カーボン粒子・白色テフラ点在。
- 21層 褐色土層。粘性・締まりやや有。焼土粒子・カーボン粒子混在。ロームブロック点在。

煙道部長 23 cm
 構築材 袖…長甕・粘土
 煙道部…粘土
 貯藏穴 位置 北西隅
 平面形 楕円形
 (推定)
 規模 59×(40) cm.
 壁溝・柱穴 調査区内未検出
 壁高 40cm
 重複関係 16号住居址より古い。



写真36 8号住居址 竈

位置 D-2 G
 方位 N-28°-W
 形状 方形
 規模 (3.54)×(0.70) m
 竈 位置 北辺・中央(推定)
 焚口部幅 43cm
 燃焼部 43×59cm
 煙道部長 35cm
 構築材 袖…長甕・粘土
 架梁部…長甕
 支脚…高坏(逆位)
 貯藏穴 位置 北東隅
 平面形 圓丸方形
 規模 (20)×(67) cm
 壁溝・柱穴 調査区内では未検出。
 壁高 20cm

重複関係 16・25号住居址と重複
 (16・25号両住居址よりも古い)

遺物出土状況

- ① 竈の構築材として、竈および竈周辺より長甕・高坏等出土。
- ② 覆土中よりの出土量は少ない。

調査者観察・考察



写真37 9号住居址

- ① 重複関係は、16号住居址
25号住居址より古いことが
土層状況から判断できるが
16号住居址・25号住居址と
ともに、出土遺物がほとんど
なく、遺物からの新旧関係
は判断できなかった。
- ② 8号住居址とも平面プラン
からは、重複関係が推察
できるが、調査区内で8号
住居址との直接の重複関係
は見られなかった。また、
8号住居址の出土遺物が少
ないため、遺物からの新旧
関係も判断できなかった。
- ③ 竪の保存状況も良く、竪
の構造も明らかにできた。



写真38 9号住居址 遺物出土状態



写真39 9号住居址 竪

位置 D-2・3G
方位 不明（調査区内では竪未検出）
形状 方形（推定）
規模 $(1.90) \times (2.97) m$
竪・貯蔵穴 調査区内未検出
壁溝 西辺の一部 壁高 33.6 cm
柱穴 調査区内未検出
重複関係 8号住居址・9号住居址と重複
(8号住居址・9号住居址より新しい)
遺物出土状況 出土量は非常に少ない。



写真40 16号住居址

位置 D-2G
方位 不明（調査区内では竪未検出）
形状 方形（推定）
規模 (1.20) × (1.70) m
竪・貯蔵穴・壁溝・柱穴
調査区内未検出
壁高 63cm
重複関係 9号住居址と重複。
(9号住居址より新しい)
遺物出土状況 出土量は少ない。



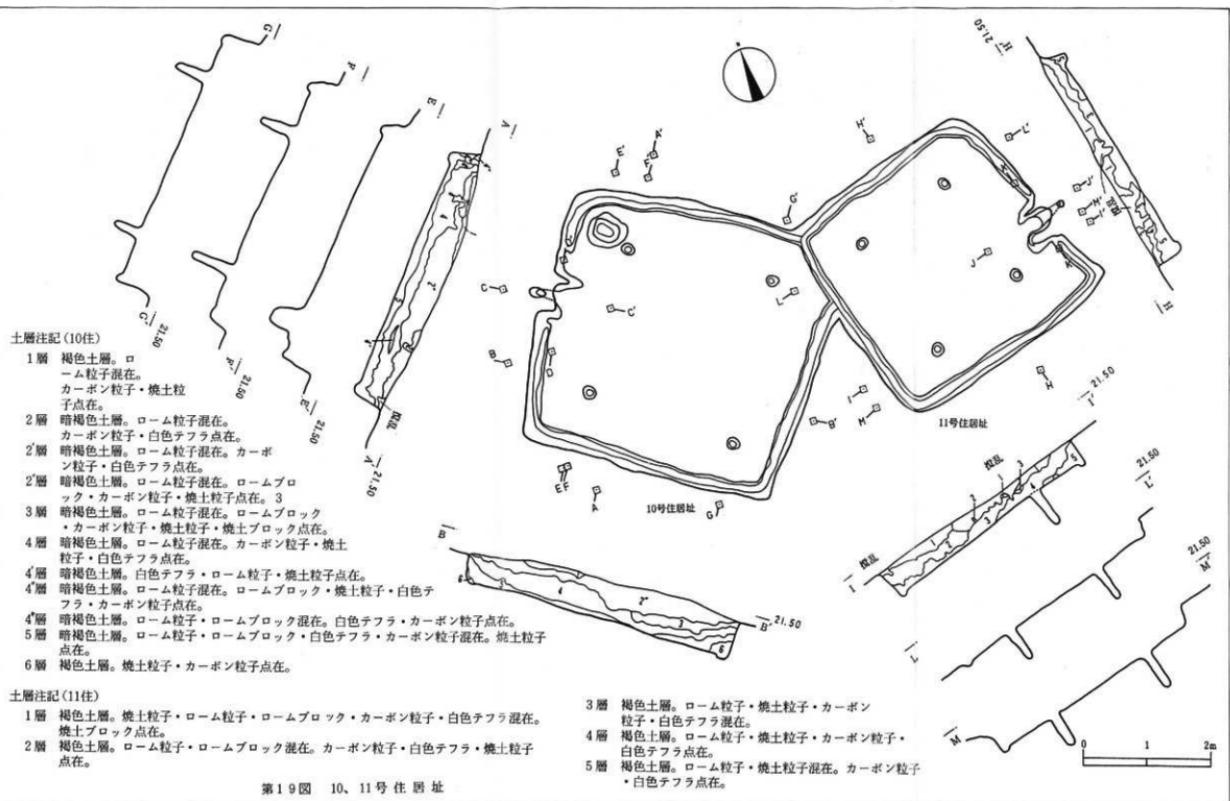
写真41 25号住居址

10、11号住居址



写真42 10号住居址

位置 C-5G 方位 N-56.5°-W
形状 正方形 規模 4.43 × 4.71m
竪 位置 西辺・中央 焚口部幅 41cm 燃焼部 41 × 36cm



第19図 10、11号住居址

煙道部長 42cm
構築材 粘土
貯藏穴 位置 北西隅
平面形 楕円形
規模 55×61cm
壁溝 全周
壁高 60cm
柱穴 4本 (2.35—2.67
2.44—2.38m)
重複関係 11号住居址と重複
(11号住居址より古い)

遺物出土状況

- ① 全体的に出土遺物の量は少なかった。
- ② 床面直上よりの出土遺物は、竈の周辺を除いては見られなかった。

調査者観察・考察

重複関係は、平面プランおよび土層状況から、11号住居址より古ないと判断できたが、11号住居址も含め、出土遺物が少ないため、出土遺物から新旧関係を判断することは不可能であった。



写真43 10号住居址 遺物出土状態



写真44 10号住居址 竈



写真45 11号住居址

位置 C-4・5G

方位 N-68°-E

形状 正方形

規模 3.86×3.84m

窯位置 東辺・中央やや

南より

焚口部幅 30cm

燃焼部 35×59cm

煙道部長 25cm

構築材 柚…長甕・粘土

貯藏穴 未検出

壁溝 全周 壁高 58cm

柱穴 4本 (1.74—2.08—1.66—1.84m)

重複関係 10号住居址と重複 (10号住居址より新しい)

遺物出土状況

① 全体的に出土遺物は少ない。



写真46 11号住居址 遺物出土状態

- ② 竈の構築材として、長胴
甕が使われている。

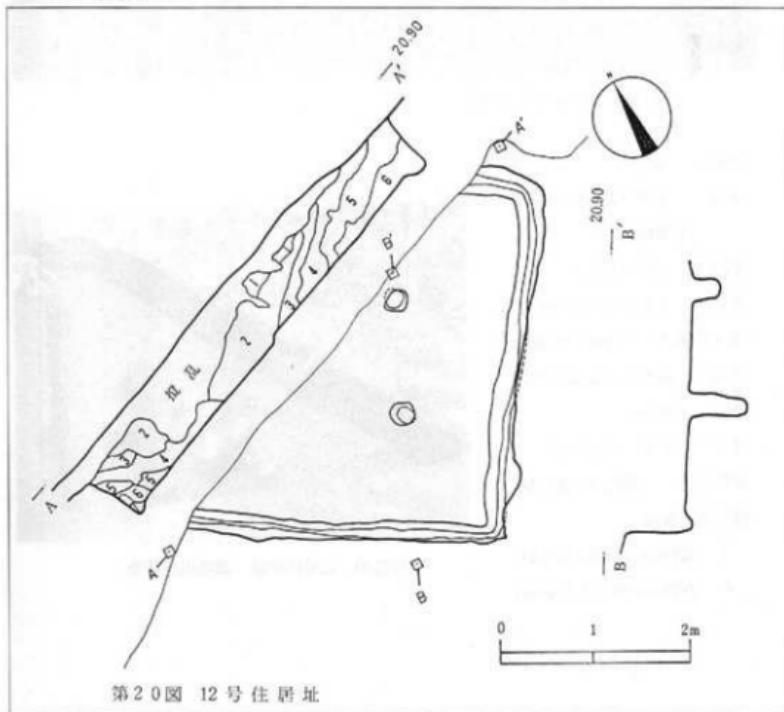
調査者観察・考察

- ① 重複する10号住居址と共に、遺物の出土量が少ない
ことが指摘できる。
- ② 本遺跡において数少ない
東竈の住居址である。



写真47 11号住居址 竈

12号住居址



第20図 12号住居址



写真48 12号住居址

位置 B-4G

方位 不明（調査区内では
竪未検出）

形状 方形（推定）

規模 $4.22 \times (3.56) m$

竪・貯蔵穴 調査区内未検出。

壁溝 調査区内では全周。

壁高 66cm

柱穴 2本（1.26m）

重複関係 調査区内では無。

遺物出土状況

① 遺物の出土量は少ない。

② 石製品が出土している。



写真49 12号住居址 遺物出土状態

12号住居址 土層注記

1層 暗褐色土層。ローム粒子混在。燒土粒子・カーボン粒子点在。
 2層 褐色土層。ローム粒子・ロームブロック・
 カーボン粒子混在。燒土粒子点在。3
 層 暗褐色土層。ローム粒子・ロームブロ
 ック混在。燒土粒子・カーボン粒子点在。
 4層 暗褐色土層。カーボン粒子・ロー
 ム粒子混在。燒土粒子・ロームブロック
 点在。5層 暗褐色土層。カーボンブロッ
 ク点在。6層 暗褐色土層。カーボン粒
 子・ローム粒子混在。燒土粒子・ローム
 ブロック点在。7層 暗褐色土層。ロー
 ム粒子混在。カーボン粒子・燒土粒子点
 在。色調は均質。



写真50 石製品出土状態

13号住居址

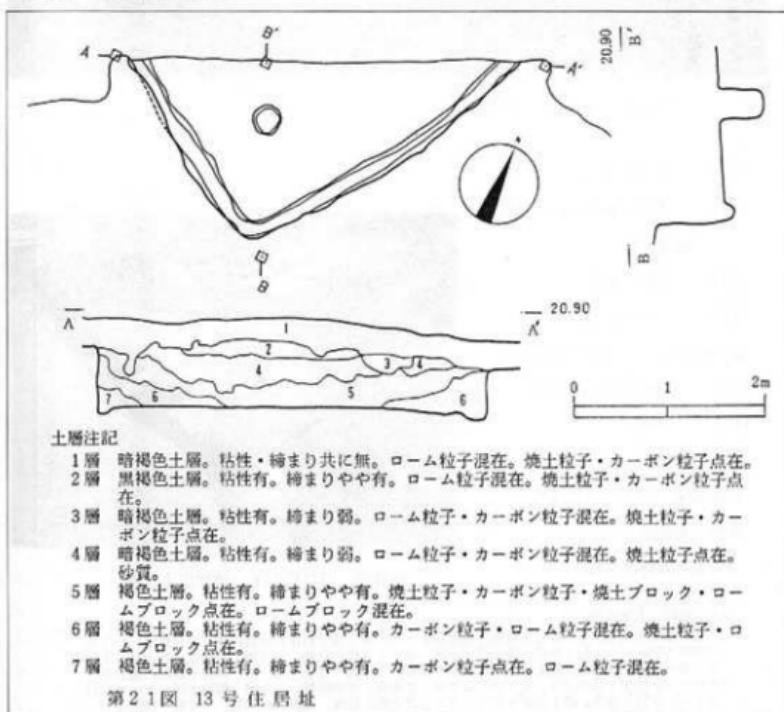




写真51 13号住居址

位置 A・B-3G

方位 不明（調査区内では
竪未検出）

形状 方形（推定）

規模 (3.64×2.44m)

竪・貯蔵穴 調査区内未検出

壁講 調査区内では全周

壁高 75cm

柱穴 1本

重複関係 調査区内では無

遺物出土状況

出土遺物は少ない。



写真52 13号住居址 遺物出土状態

13号住居址 土層記

1層 暗褐色土層。ローム粒子混在。焼土粒子・カーボン粒子点在。砂質。現在の耕作土。 2層 黒褐色土層。ローム粒子混在。焼土粒子点在。カーボン粒子点在。 3層 暗褐色土層。ローム粒子・カーボン粒子混在。焼土粒子点在。やや砂質。 5層 暗褐色土層。ローム粒子混在。焼土粒子・ローム粒子混在。焼土粒子・ロームブロック点在。やや砂質。 6層 暗褐色土層。カーボン粒子・ローム粒子混在。焼土粒子・ロームブロック点在。粒度・色調共に均質。 7層 暗褐色土層。カーボン粒子点在。ローム粒子混在。色調は均質。土質は粘土質に近い。

14・17号住居址



写真53 14号住居址

位置 B-3G

方位 N-42°-W

形状 長方形

規模 4.38×3.36m

竪 位置 北辺・中央

焚口部幅 56cm

燃焼部 56×31cm

煙道部長 61cm

構築材 粘土

貯蔵穴 未検出

壁溝 全周 壁高 5cm

柱穴 4本 (2.14-2.83-2.20-2.69m)

重複関係 17号住居址と重複 (17号住居址より新しい)

遺物出土状況

① 銅製の耳環が、住居址の南西部分で出土している。

② 遺物の顕著な集中は認められない。



写真54 14号住居址 遺物出土状態

③ 完形罐体の出土は、竈
右側前方より土師器の坯
が出土。



写真55 14号住居址 竈



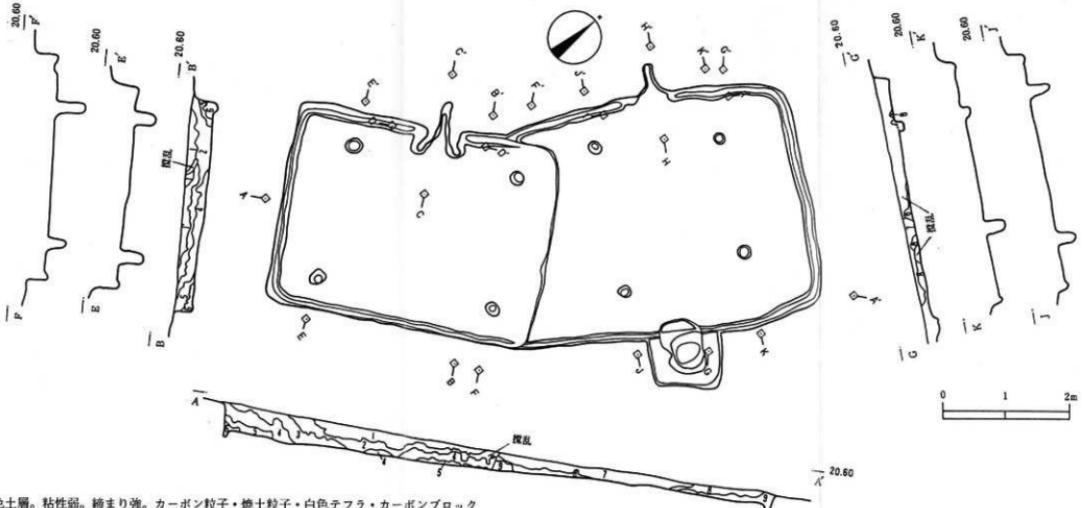
写真56 17号住居址

位置 B-2・3G 方位 N-61.5°-W 形状 長方形

規模 (5.04) × 3.97m

竈 位置 北辺・中央 焚口部幅 47cm 燃焼部 47×10cm

煙道部長 38cm 構築材 粘土



土層注記

- 1層 棕褐色土層。粘性弱。締まり強。カーボン粒子・焼土粒子・白色テフラ・カーボンブロック
・焼土ブロック点在。ロームブロック・ローム粒子混在。
- 1'層 暗褐色土層。粘性弱。締まり有。白色テフラ・焼土粒子・焼土ブロック・カーボン粒子・
カーボンブロック点在。ローム粒子・ロームブロック点在。
- 2層 棕褐色土層。粘性やや有。締まり有。ローム粒子・焼土粒子混在。ロームブロック・カーボン粒子・カーボンブロック点在。
- 3層 棕褐色土層。粘性有。締まり有。白色テフラ・焼土粒子・カーボン粒子・ロームブロック点在。ローム粒子混在。
- 4層 棕褐色土層。粘性やや有。締まり有。カーボン粒子・ローム粒子混在。白色テフラ・カーボンブロック・焼土粒子点在。
- 5層 棕褐色土層。粘性有。締まりやや有。ローム粒子混在。カーボン粒子・焼土粒子・カーボンブロック・ロームブロック点在。
- 6層 棕褐色土層。粘性・締まり共に有。カーボン粒子・焼土粒子点在。ローム粒子混在。
- 7層 黄褐色土層。粘性無。締まり強。焼土粒子・ローム粒子・カーボン粒子点在。白色テフラ
混在。
- 8層 棕褐色土層。粘性・締まり共にやや有。カーボン粒子・ローム粒子・白色テフラ混在。ロームブロック・カーボンブロック・焼土粒子点在。
- 9層 棕褐色土層。粘性有。締まり有。焼土粒子・カーボン粒子・白色テフラ・ローム粒子点在。

第22図 14、17号住居址

貯蔵穴 調査区内未検出

壁溝 全周

壁高 27cm

柱穴 4本 (1.85-2.00

-2.37-1.98m)

重複関係 14号住居址と重複

(14号住居址より古い)

遺物出土状況

① 遺物の出土量は少ない。

② 竈の周辺に集中する傾向
がある。

③ そのほとんどが破片遺物
であった。

調査者観察・考察

① 平面プランおよび土層状
況からは、14号住居址との
重複関係は、14号住居址よ
り古いと判断できたが、出
土遺物が少ないため、遺物
からの新旧関係は確認でき
なかった。

② 住居址の南辺に3段の構
造をもつ土塙を確認した。

この土塙については、その性格は判然としないが、住居址の付属施設（入り口施設・
貯蔵穴等）とは判断できない。

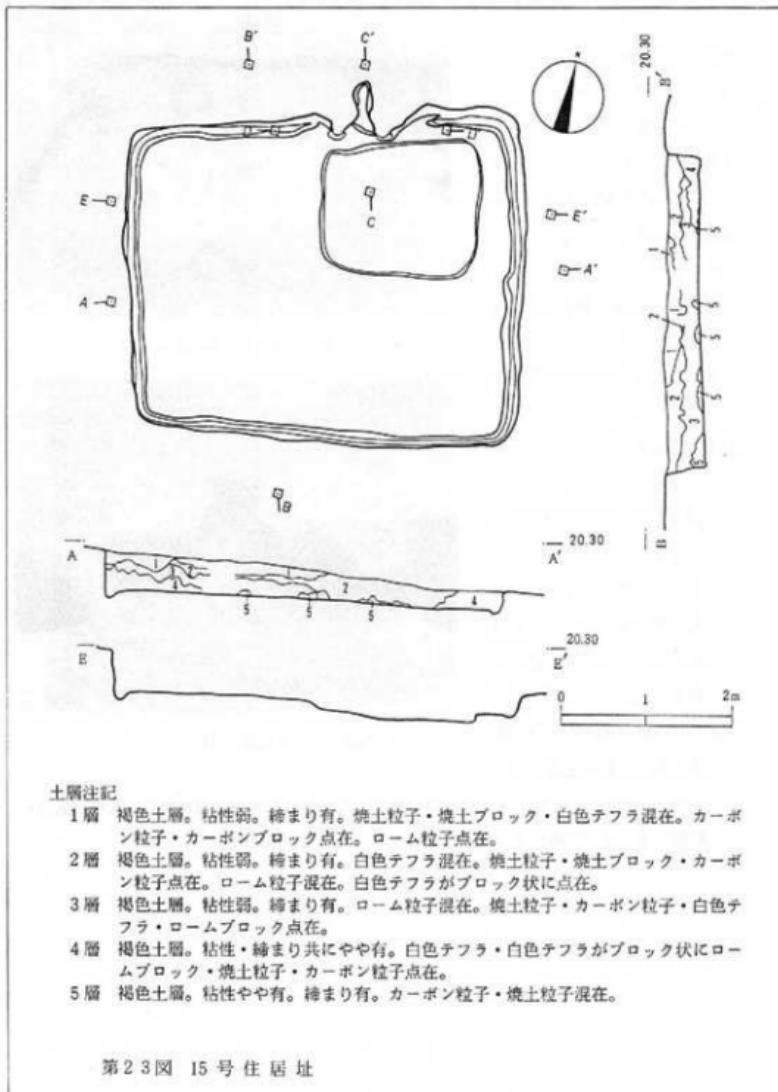


写真57 17号住居址 遺物出土状態



写真58 17号住居址 竈

15号住居址



土層注記

- 1層 褐色土層。粘性弱。締まり有。焼土粒子・焼土ブロック・白色テフラ混在。カーボン粒子・カーボンブロック点在。ローム粒子点在。
- 2層 褐色土層。粘性弱。締まり有。白色テフラ混在。焼土粒子・焼土ブロック・カーボン粒子点在。ローム粒子混在。白色テフラがブロック状に点在。
- 3層 褐色土層。粘性弱。締まり有。ローム粒子混在。焼土粒子・カーボン粒子・白色テフラ・ロームブロック点在。
- 4層 褐色土層。粘性・締まり共にやや有。白色テフラ・白色テフラがブロック状にロームブロック・焼土粒子・カーボン粒子点在。
- 5層 褐色土層。粘性やや有。締まり有。カーボン粒子・焼土粒子混在。

第23図 15号住居址

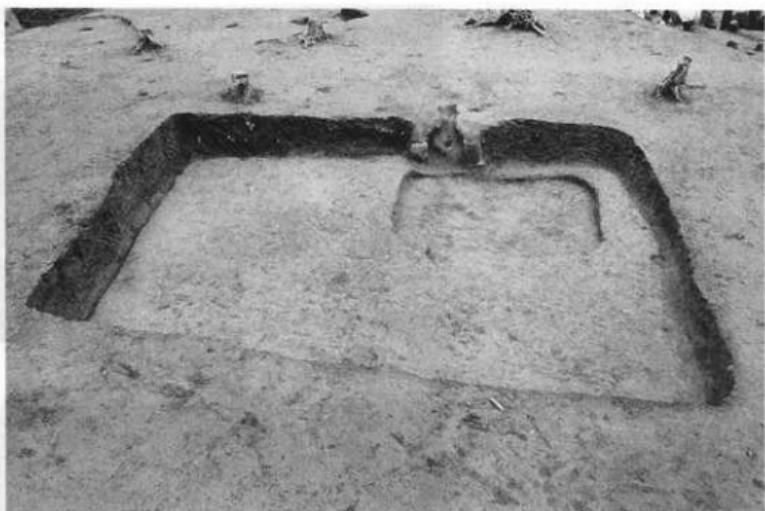


写真59 15号住居址

位置 B・C-2G

方位 N-18.5°-W

形状 長方形

規模 4.82×4.05m

竪位置 北辺・中央

やや東より

焚口部幅 36cm

燃焼部 36×30cm

煙道部長 42cm



写真60 15号住居址 遺物出土状態

構築材 柚…長婆・角閃石安山岩・粘土

貯藏穴 未検出

壁溝 全周 壁高 75cm

柱穴 未検出

重複関係 無

遺物出土状況

① 遺物の出土量は比較的多い。

- ② 出土遺物は、住居址の北西よりに集中する傾向をもつ。
- ③ 滑石製の勾玉が、住居址北西部で出土した。
- ④ 住居址のほぼ中央で土師器・壺が焼土に覆われ、押しつぶされた状況で出土している。

調査者観察・考察

- ① 竪の構築材に棟名山二ッ岳噴出の鈍錐状角閃石安山岩を使用しているところから、住居址の構築・使用は棟名山二ッ岳の爆発以後であると判断できる。
- ② 住居址の北西部で出土した勾玉（滑石製）は、孔を穿つ際失敗したものと思え系を通しての使用は不可能と判断できる。
- ③ 竪の前面から北東隅にかけて、長方形に一段低い施設が確認された。その性格については不明。



写真61 15号住居址 竪



写真62 勾玉出土状態

18・24号住居址



写真63 18号住居址

位置 A・B-2G
方位 N-48°-W
形状 方形
規模 (4.00)×5.05m
竪 位置 北辺・中央
焚口部幅 34cm
燃焼部 34×32cm
煙道部長 35cm
構築材 粘土

貯藏穴 未検出

壁溝 北・西・南辺のそれぞれの一部

壁高 67cm

柱穴 2本(2.48m)

重複関係 24号住居址と重複(24号住居址より古い)

遺物出土状況



写真64 18号住居址 遺物出土状況

- ① 遺物の出土量は少なかつた。
- ② 住居址の北西隅に集中する傾向をもつ。
- ③ 完形個体の出土ではなく破片での出土が見立つ。
- ④ 重複する24号住居址とともに、流れ込みと判断できる縄文土器（加曾利E式）の出土を見た。



写真65 18号住居址 窯



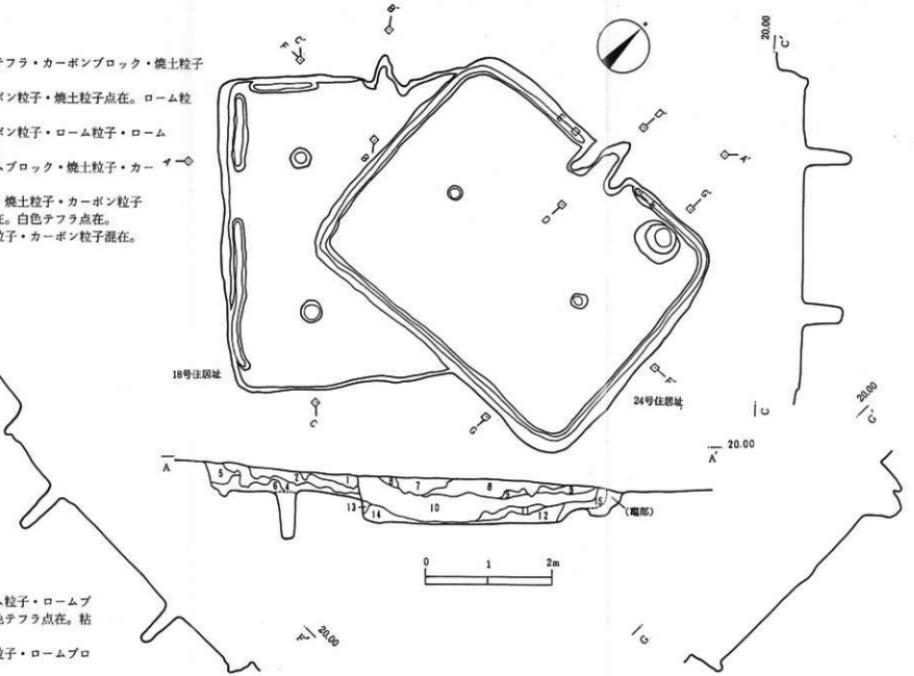
写真66 24号住居址

位置	A・B-1・2G	方位	N-2°-W	形状	長方形
規模	5.46×4.30m				
竈 位置	北辺・中央	焚口部幅	52cm	燃焼部	39×(66)cm
煙道部長	(34)cm	構築材	袖・煙道部…粘土 支脚…土製品		

土層注記

- 1層 暗褐色土層。粘性やや有。締まり有。白色テフラ・カーボンブロック・焼土粒子点在。カーボン粒子混在。
- 1層 暗褐色土層。粘性弱。締まりやや有。カーボン粒子・焼土粒子点在。ローム粒子混在。
- 2層 暗褐色土層。粘性強。締まりやや有。カーボン粒子・ローム粒子・ロームブロック混在。焼土粒子・白色テフラ点在。
- 3層 褐色土層。粘性・締まり共にやや有。ロームブロック・焼土粒子・カーボン粒子点在。
- 4層 暗褐色土層。粘性・締まり弱。ローム粒子・焼土粒子・カーボン粒子混在。焼土ブロック・カーボンブロック点在。白色テフラ点在。
- 5層 褐色土層。粘性やや有。締まり有。ローム粒子・カーボン粒子混在。焼土粒子点在。
- 6層 暗褐色土層。締まり有。ロームブロック・カーボン粒子混在。焼土粒子・白色テフラ点在。
- 7層 暗褐色土層。粘性有。締まりやや有。ローム粒子・焼土粒子・ロームブロック・カーボン粒子・白色テフラ混在。
- 8層 暗褐色土層。粘性有。締まりやや有。ローム粒子・白色テフラ・ロームブロック・焼土粒子・カーボン粒子混在。
- 9層 暗褐色土層。粘性・締まり共に有。ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・カーボン粒子・白色テフラ・粘土粒子混在。
- 10層 暗褐色土層。粘性・締まり共に有。ローム粒子・カーボン粒子・白色テフラ混在。ロームブロック・燒土粒子点在。
- 11層 褐色土層。粘性有。締まりやや有。ローム粒子・カーボン粒子・粘土粒子・焼土粒子混在。ロームブロック・白色テフラ点在。
- 12層 暗褐色土層。粘性有。締まりやや有。ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・カーボン粒子混在。白色テフラ点在。粘土粒子も含む。
- 13層 褐色土層。粘性有。締まりやや有。ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・カーボン粒子点在。
- 14層 暗褐色土層。粘性有。締まりやや有。ローム粒子混在。ロームブロック・焼土粒子・カーボン粒子・白色テフラ点在。
- 15層 褐色土層。粘性有。締まりやや有。ローム粒子・焼土粒子混在。ロームブロック・白色テフラ・カーボン粒子点在。粘土粒子含む。

第24図 18、24号住居址



貯蔵穴 位置 北東隅
平面形 楕円形
規模 68×56cm
壁溝 全周
壁高 83cm
柱穴 2本 (2.58m)
重複関係 18号住居址と重複
(18号住居址より新しい)
遺物出土状況

- ① 遺物の出土量は比較的に少ない。
- ② 住居址の西側(斜面山より)に集中する傾向をもつ。
- ③ 窯の前方部分で土師器・壺の完形個体の出土を見た。
(床面直上)
- ④ 貯蔵穴内より土師器・壺の完形個体の出土を見た。
- ⑤ 重複する18号住居址とともに、流れ込みと思われる繩文土器(加曾利E式)の出土を見た。

調査者観察・考察

本住居址で確認された柱穴は2本であった。

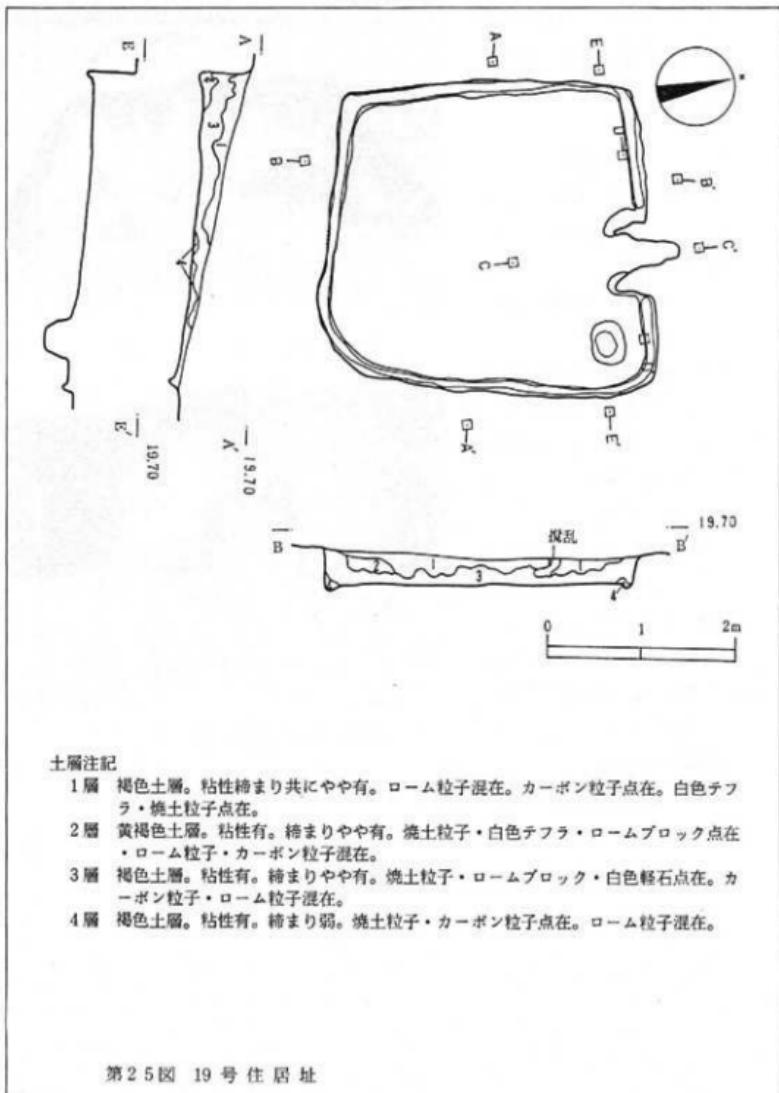


写真67 24号住居址 遺物出土状態



写真68 24号住居址 窯

19号住居址



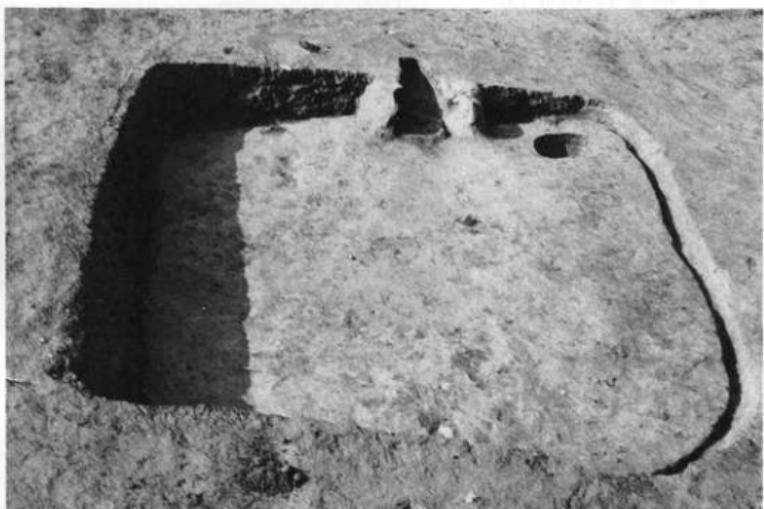


写真69 19号住居址

位置 B・C-1・2G

方位 N-2.5°-W

形状 台形

規模 3.53×3.57m

電 位置 北辺・中央

焚口部幅 40cm

燃焼部 43×30cm

煙道部長 50cm

構築材 粘土

貯藏穴 位置 北東隅

平面形 楕円形

規模 47×30cm

壁溝 全周 壁高 70cm 柱穴 未検出 重複関係 無

遺物出土状況

- ① 遺物の出土量は比較的少ない。



写真70 19号住居址 遺物出土状況

- ⑧ 床面直上からの出土は少ない。
- ⑨ 完形遺物の出土はなかった。

調査者観察・考察

斜面より検出された住居址である。



写真71 19号住居址 窯

20号住居址

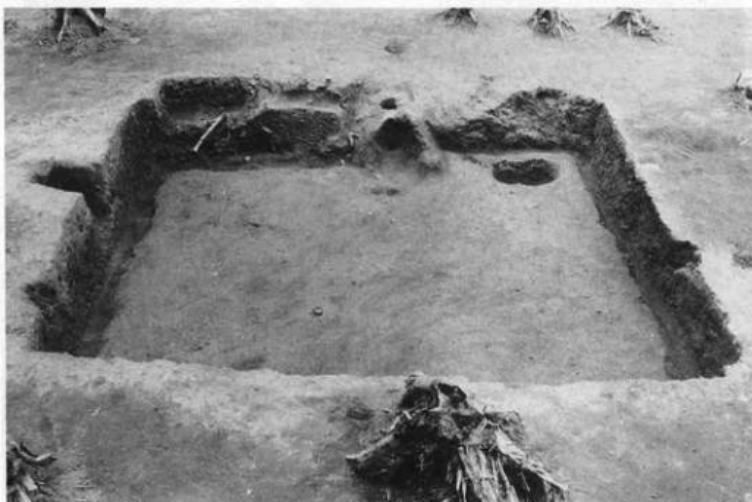


写真72 20号住居址

位置	D-4・5G	方位	N-42°-W	形状	正方形
規模	4.47×4.15m				
竈 位置	北辺・中央	焚口部幅	53cm	燃焼部	53×53cm

煙道部長 39cm
構築材 粘土
貯藏穴 位置 北東隅
平面形 楕円形
規模 63×50cm
壁溝 全周
壁高 70cm
柱穴 未検出
重複関係 無
遺物出土状況

- ① 住居址の中央から西よりに集中する傾向をもつ。
- ② 壁の前面より土師器・坏（完形體）が出土。
- ③ 住居址の中央やや北よりの地点から、滑石製の紡錘車が出土。



写真73 20号住居址 遺物出土状態(1)



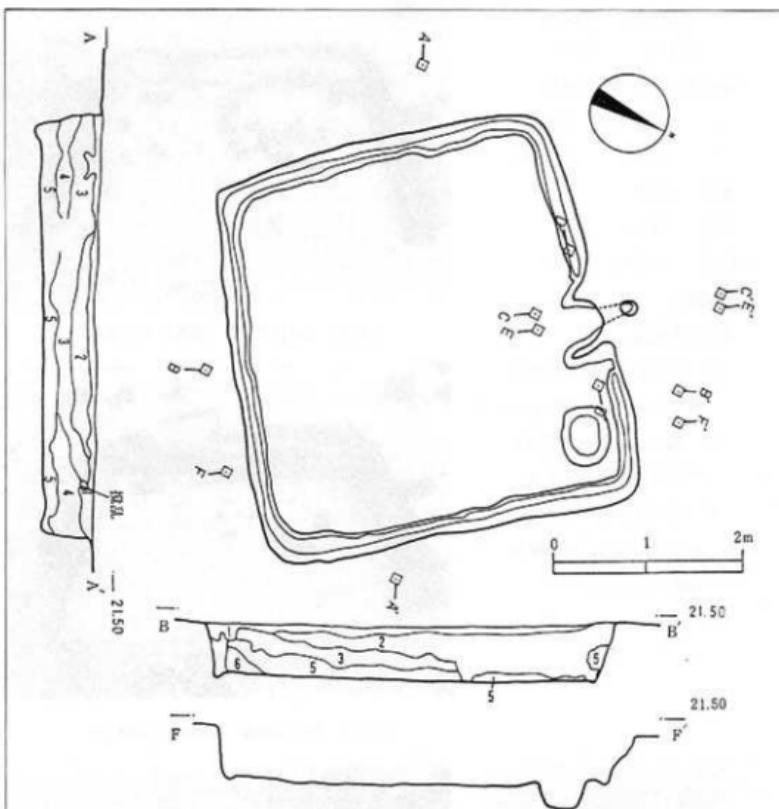
写真74 20号住居址 遺物出土状態(2)



写真75 紡錘車出土状態



写真76 20号住居址 竈

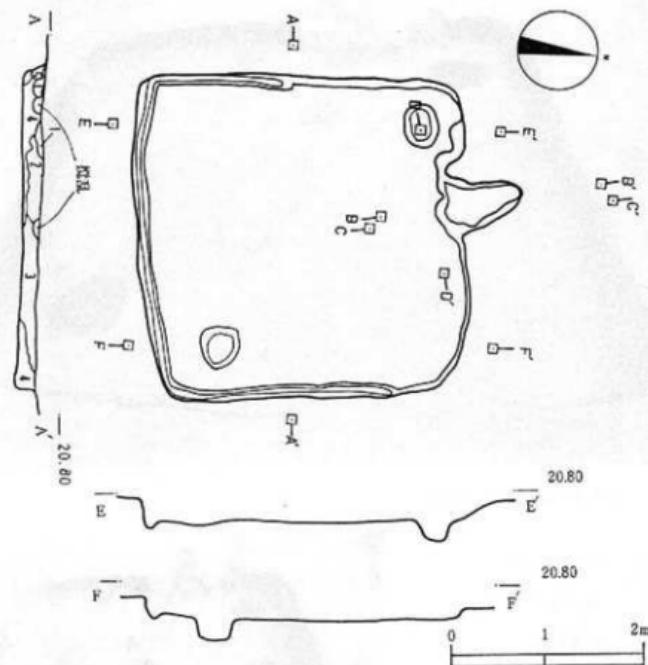


土層注記

- 1 層 暗褐色土層。粘性強。締まり無。ローム粒子・白色テフラ混在。焼土粒子・カーボン粒子点在。
- 2 層 暗褐色土層。粘性やや有。締まり無。ローム粒子・焼土粒子・白色テフラ混在。白色燧石・カーボン粒子点在。
- 3 層 褐色土層。粘性やや有。締まり無。ローム粒子・焼土粒子・カーボン粒子点在。白色テフラ混在。
- 4 層 褐色土層。粘性・締まり共にやや有。ローム粒子・ロームブロック・カーボン粒子・白色テフラ混在。焼土粒子点在。
- 5 層 褐色土層。粘性有。締まりやや有。ローム粒子・白色テフラ混在。焼土粒子・カーボン粒子・ロームブロック点在。
- 6 層 褐色土層。粘性やや有。締まりやや弱。ローム粒子・カーボン粒子混在。焼土粒子・白色テフラ・カーボンブロック点在。

第26図 20号住居址

21号住居址



十一

- 1層 褐色土層。粘性・繊維共に有。ローム粒子混在。焼土粒子・カーボン粒子・白色テフラ点在。
2層 褐色土層。粘性・繊維共に有。焼土粒子・カーボン粒子混在。ローム粒子・ロームブロック点在。白色テフラ点在。
3層 褐色土層。粘性・繊維共に有。カーボン粒子・ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・白色テフラ混在。
4層 褐色土層。粘性やや有。繊維有。ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・カーボン粒子・白色テフラ点在。
5層 褐色土層。粘性・繊維共に有。ローム粒子・ロームブロック・カーボン粒子混在。

第27図 21号住居址

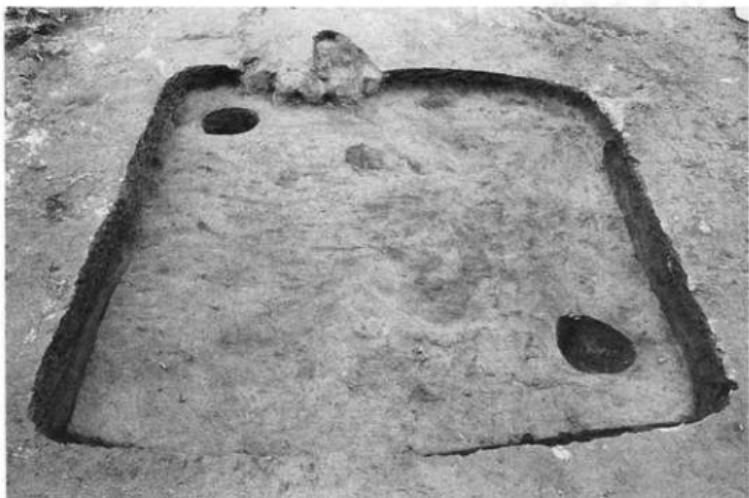


写真77 21号住居址

位置 C・D-3G

方位 N-13.5°-W

形状 正方形

規模 3.53×3.50m

竪 位置 北辺・中央

焚口部幅 60cm

燃焼部 60×(42)cm

煙道部長 (52)cm

構築材 粘土

貯蔵穴 位置 北西隅

南東隅

平面形 北西隅貯蔵穴…橢円形

写真78 21号住居址 遺物出土状態

規模 北西隅貯蔵穴…45×36cm

南東隅貯蔵穴…45×32cm

壁溝 南辺と東辺・西辺の一部

壁高 37cm

柱穴 未検出



重複関係 無

遺物出土状況

- ① 遺物の出土量は非常に少ない。
- ② 要著な遺物の集中は見られない。
- ③ 完形個体の出土もなかった。



写真79 21号住居址 窯

20・23号住居址

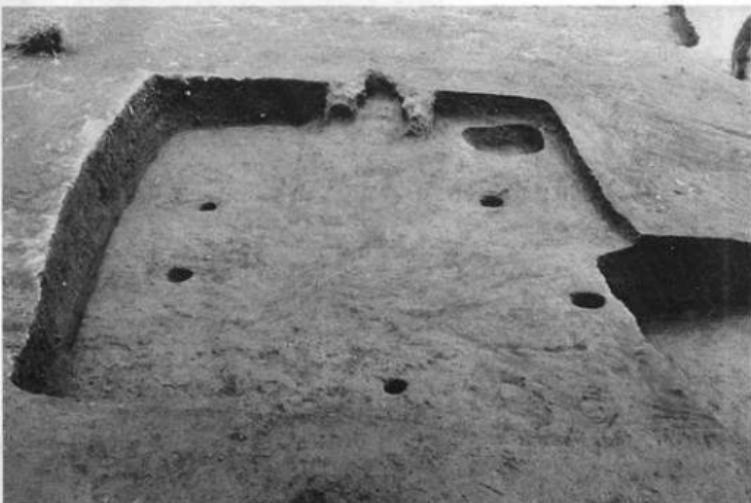


写真80 22号住居址 窯

位置 C・D-2G 方位 N-18°-W 形状 長方形

規模 4.42×5.02m

竈 位置 北辺・中央 焚口部幅 52cm 燃焼部 55×(66)cm

煙道部長 (37) cm
構築材 粘土
貯藏穴 位置 北東隅
平面形 隅丸長方形
規模 79×64cm
壁溝 北辺・西辺の一部
壁高 70cm
柱穴 5本 (1.70—1.78—
2.06—1.16—2.45m)

重複関係 23号住居址と重

複 (23号住居址より古い)

遺物出土状況

- ① 貯藏穴の東脇から順位で二つ重ねて土師器・壺が出土。
- ② 貯藏穴の西脇、竈の右脇から土師器・壺が数片に割れて出土。
- ③ 遺物の出土量は非常に少ない。
- ④ 顯著な遺物の集中は見られない。

調査者観察・考察

- ① 貯藏穴は2段の構造をもつ。
- ② 本住居址は縦長方形の平面プランを持ち、5本の主柱穴を持つ。



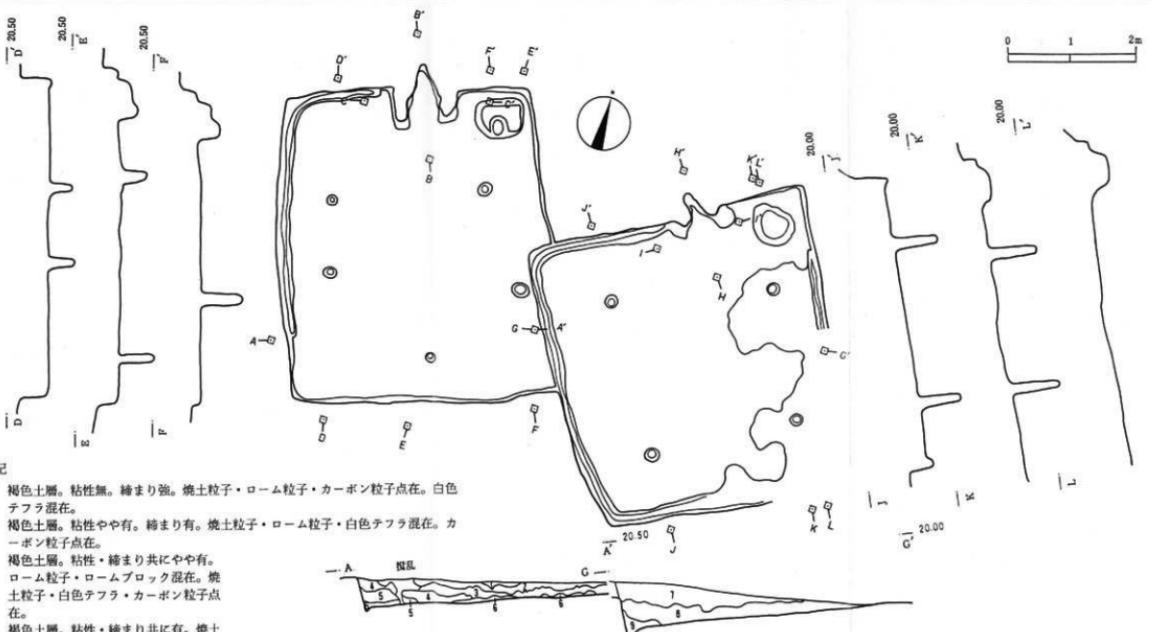
写真81 22号住居址 遺物出土状態(1)



写真82 22号住居址 遺物出土状態(2)



写真83 22号住居址 壺



第28図 22、23号住居址

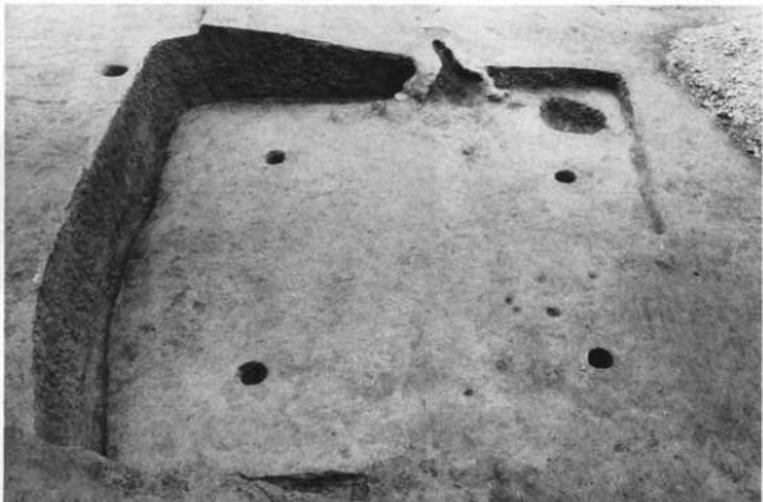


写真84 23号住居址

位置 C-1・2G

D-2G

方位 N-48.5°-W

形状 正方形

規模 4.57×4.82cm

竈 位置 北辺・中央

焚口部幅 38cm

燃焼部 38×38cm

煙道部長 39cm

構築材 粘土

貯藏穴 位置 北東隅

平面形 円形 規模 65×68cm

壁溝 全周 壁高 88cm

柱穴 4本 (2.10-2.36-2.97-2.59m)

重複関係 22号住居址と重複 (22号住居址より新しい)



写真85 23号住居址 遺物出土状態

遺物出土状況

- ① 住居址の西側（斜面・山側）に集中する傾向をもつ。
- ② 完形遺物の出土はなかった。

調査者観察・考察

- ① 斜面から検出された住居址である。
- ② 南東隅は削られている。



写真86 23号住居址 端

26号住居址



写真87 26号住居址

位置 A-1・2G 方位 N-60°-E 形状 長方形

規模 3.60×6.46m

電 位置 東辺・北隅 焚口部幅 58cm 燃焼部 58×31cm

煙道部長 57cm
 構築材 粘土
 貯藏穴 位置 南東隅
 平面形 円形
 規模 76×75cm
 壁溝 未検出
 壁高 78cm
 柱穴 6本 (1.40—1.76—
 1.68—1.57—1.72—2.01m)
 重複関係 無
 遺物出土状況



写真88 26号住居址 遺物出土状態

- ① 貯藏穴内より、土師器・
 壺(下半部を欠損している)
 が順位で出土。
 ② 住居址東側(斜面谷側)に
 集中する傾向をもつ。

調査者観察・考察

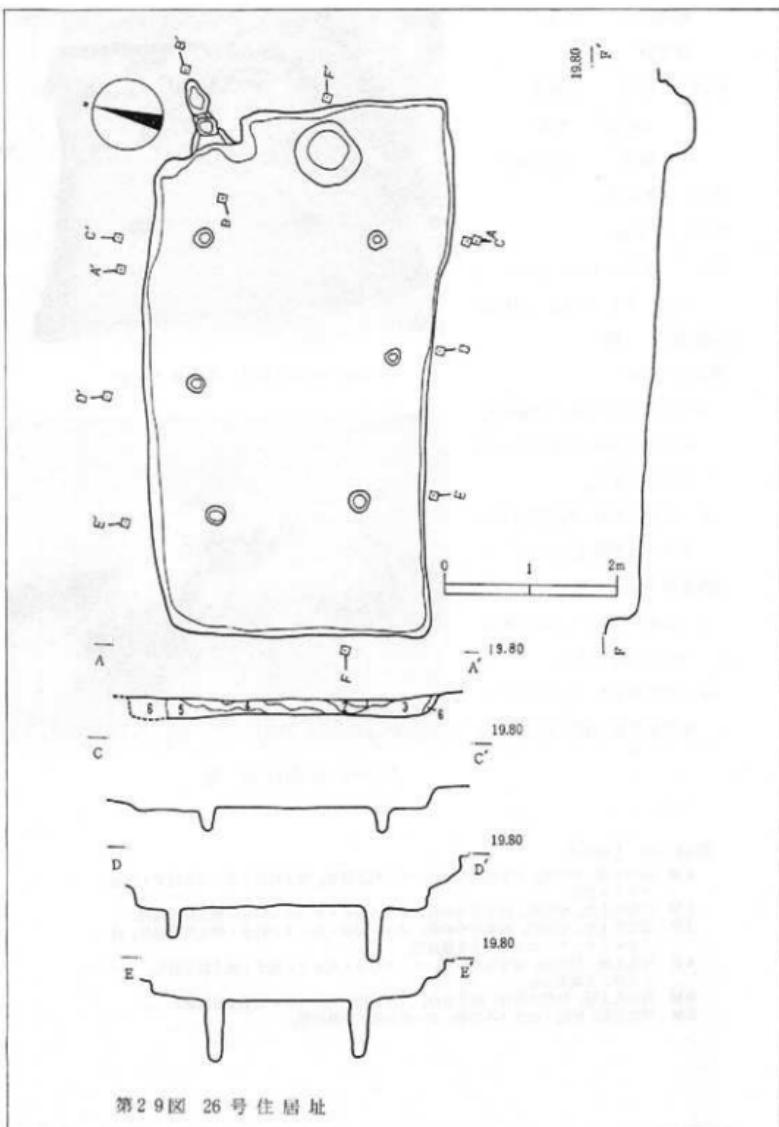
- ① 検出住居址中、最も谷よ
 りの住居址で出土。
 ② 検出住居址中、数少ない
 東に壇を持つ住居址である。



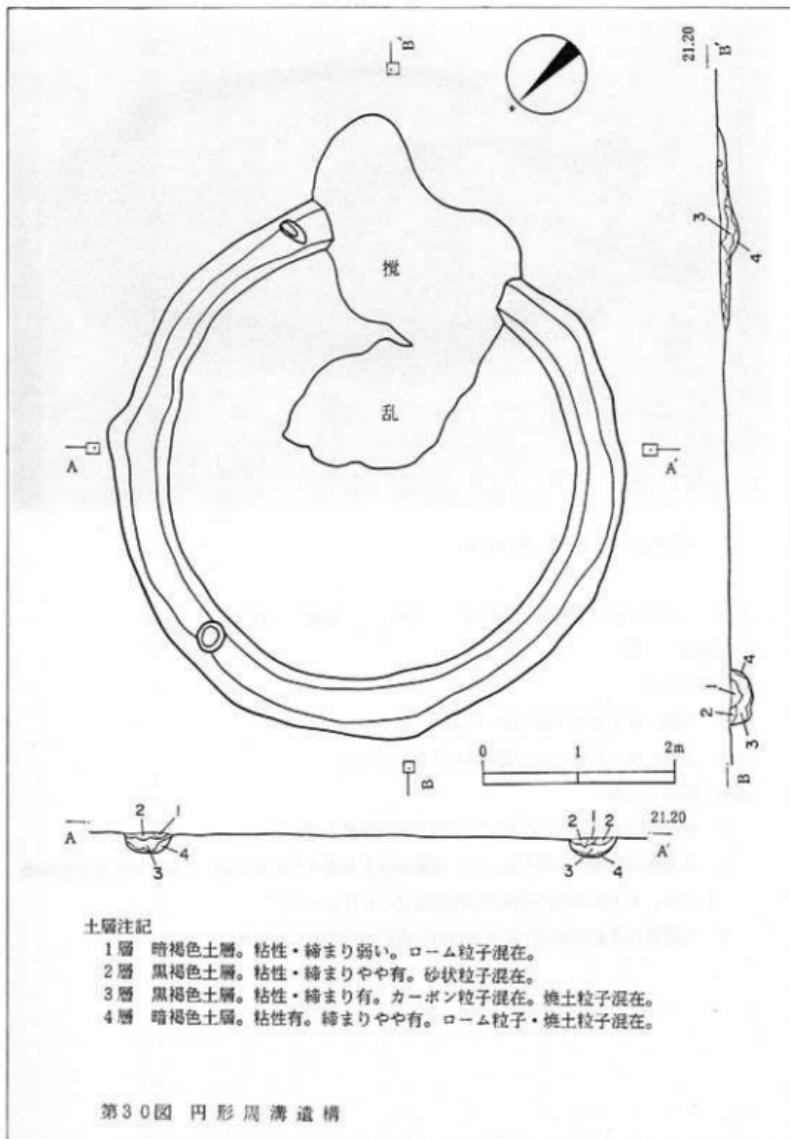
写真89 26号住居址 壇

26号住居址 土層注記

- 1層 暗褐色土層。粘性無。締まりやや有。ローム粒子混在。燒土粒子・カーボン粒子・白色
 チフラン点在。
 2層 暗褐色土層。粘性有。締まりやや有。ローム粒子・カーボン粒子・燒土粒子点在。
 3層 暗褐色土層。粘性弱。締まりやや有。ローム粒子・カーボン粒子・燒土粒子混在。燒
 土ブロック・カーボン微粒子多量混在。
 4層 暗褐色土層。粘性弱。締まりやや有。ローム粒子・カーボン粒子・燒土粒子混在。ロー
 ムブロック微量点在。
 5層 暗褐色土層。粘性やや有。締まり有。ローム粒子・カーボン粒子少量点在。
 6層 暗褐色土層。粘性・締まり共に強。カーボン粒子少量点在。



円型溝遺構



第30図 円形周溝遺構



写真90 円形周溝遺構

位置 H・I-15・16G 形状 円形 規模 直径 5.50m

付属施設 無

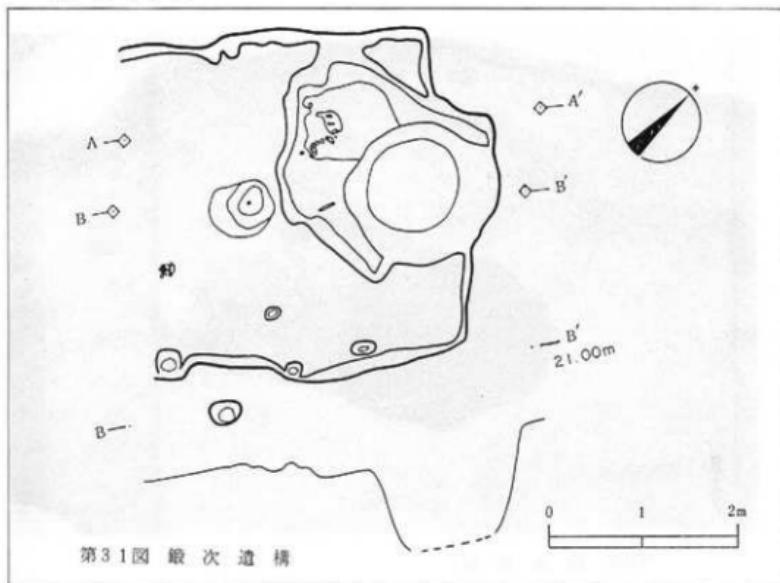
遺物出土状況

- ① 遺物の出土量は非常に少ない。
- ② 遺構に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

調査者観察・考察

- ① 本遺構の名称は、その形状から円形周溝遺構と呼称した。
- ② 本遺構の性格は不明であった。埋葬施設とも考えられるため、トレンチを設定し調査したが、主体部等の付属施設の検出は見られなかった。
- ③ 本遺構の構築時期を比定する資料の検出も見られなかった。

銀次造構



位置 J・K-23G

形状 不整形

付属施設 不明

重複関係 5号井戸址と重複

(新旧関係は不明)



写真91 銀次造構 羽口出土状態



写真92 錫 次 遺 構

1号井戸址

位置 M-25G

形状 円形

規模 径 1.50m

深さ 1.60m(未完掘)

付属施設 無

遺物出土状況

① 遺物の出土量は非常に
少ない。

② 遺構に伴う遺物の出土
はなかった。



写真93 1号井戸址

2号井戸址

位置 L-26G

形状 円形

規模 径 1.07m

深さ 1.80m(未完掘)

付属施設 無

遺物出土状況

- ① 遺物の出土量は非常に少ない。

- ② 遺構に伴う遺物の出土はなかった。



写真94 2号井戸址

3号井戸址

位置 K-25G

形状 円形

規模 径 1.52m

深さ 1.67m(未完掘)

付属施設 無

遺物出土状況

- ① 遺物の出土量は少ない。

- ② 遺構に伴う遺物の出土はなかった。



写真95 3号井戸址

4号井戸址

位置 H・I-14G

形状 円形

規模 径 0.95m

深さ 2.25m(未完掘)

付属施設 無

遺物出土状況

- ① 遺物の出土量は非常に少なかった。

- ② 遺構に伴う遺物の出土はなかった。

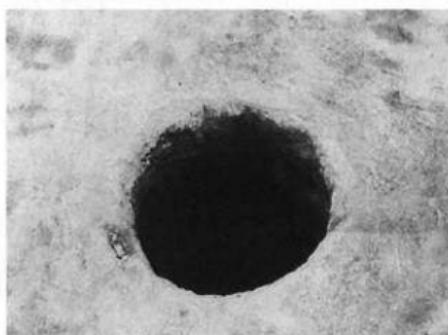
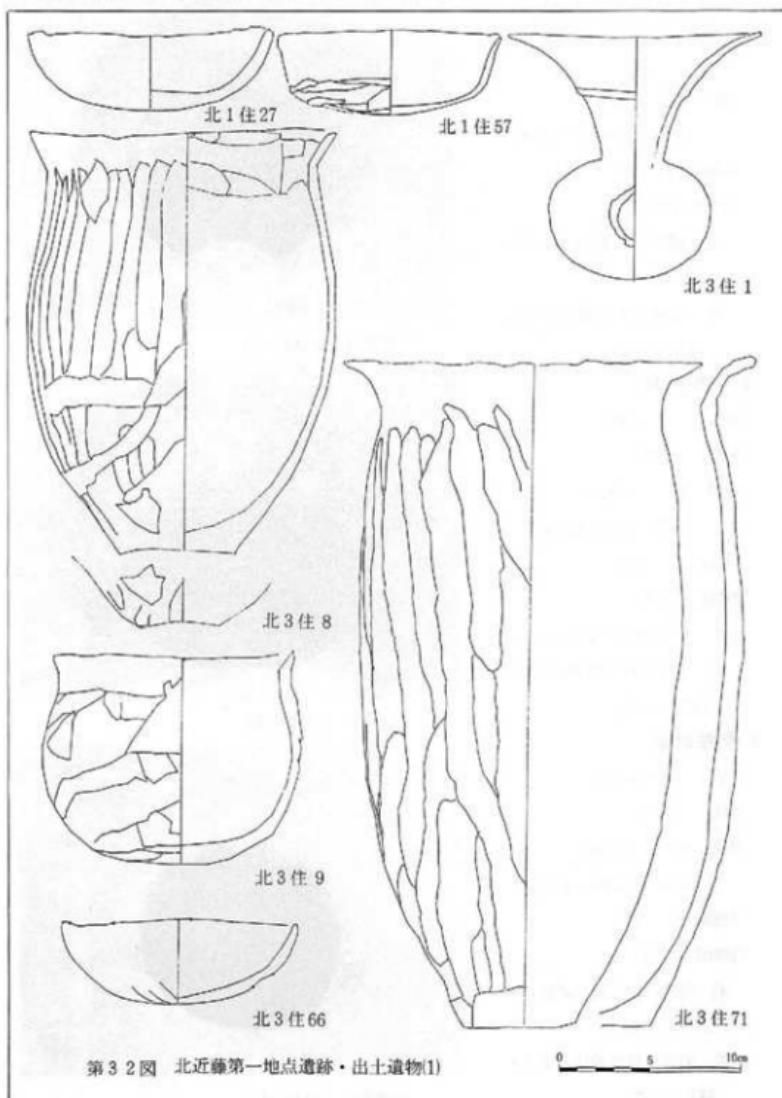
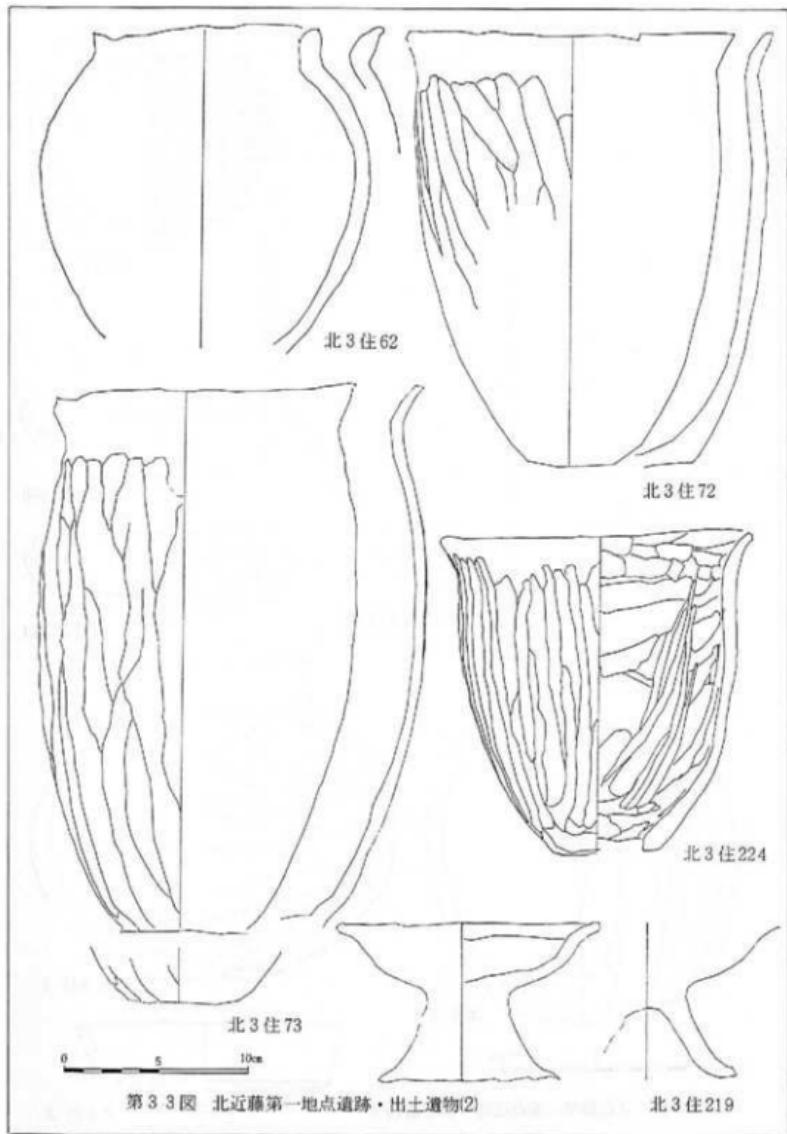


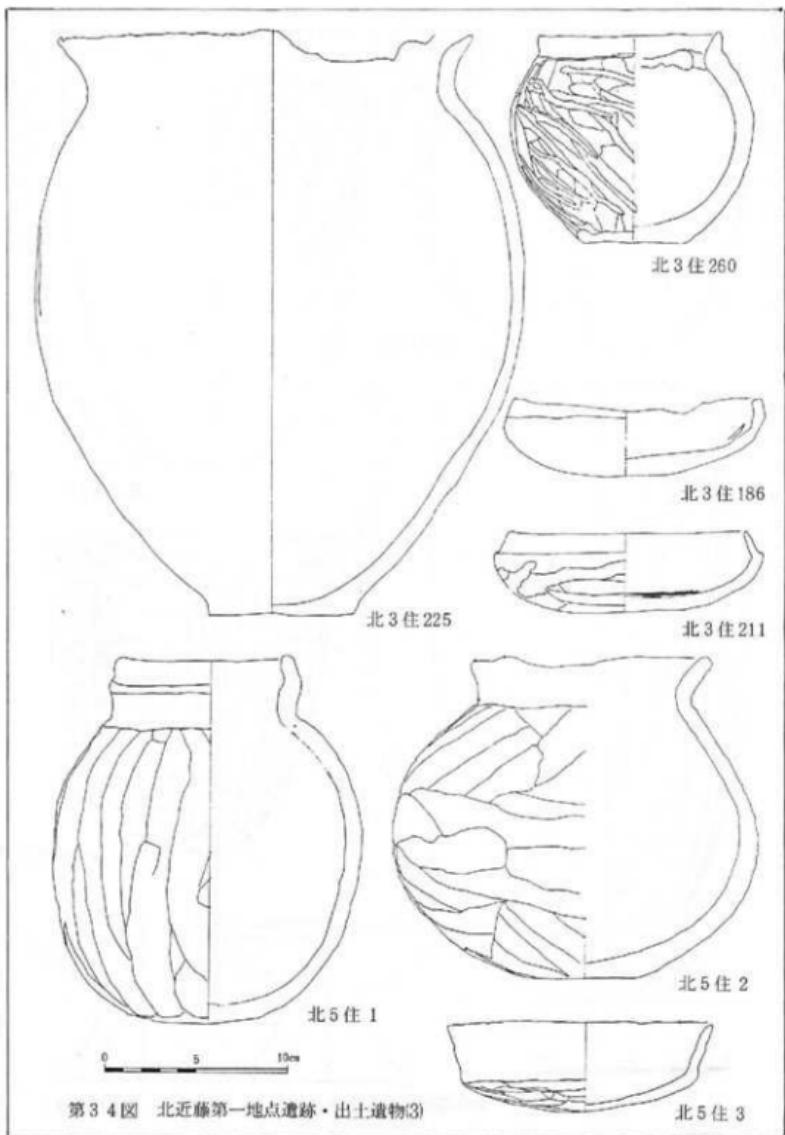
写真96 4号井戸址

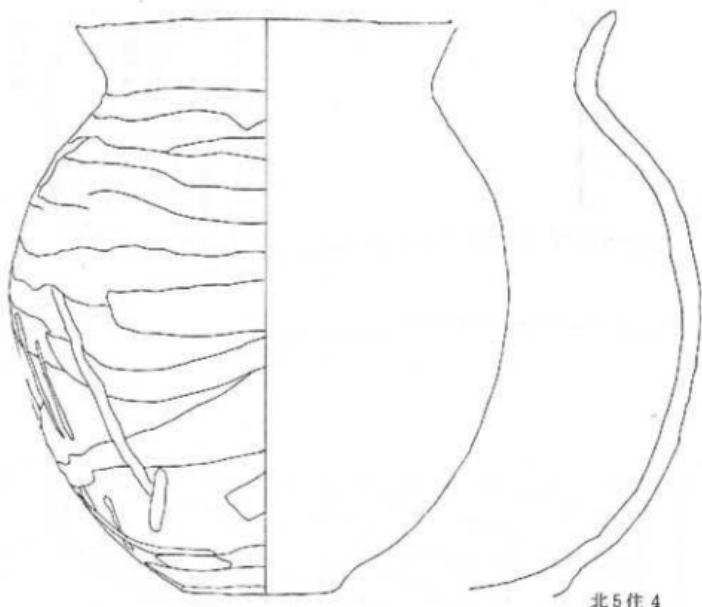
第3節 出土遺物



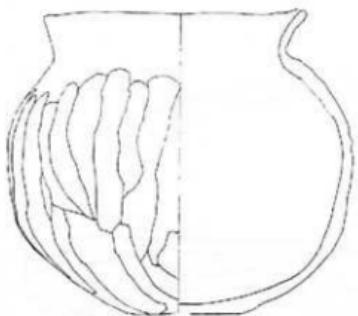


第33図 北近藤第一地点遺跡・出土遺物(2)

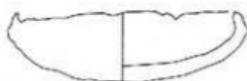




北5住4



北5住5



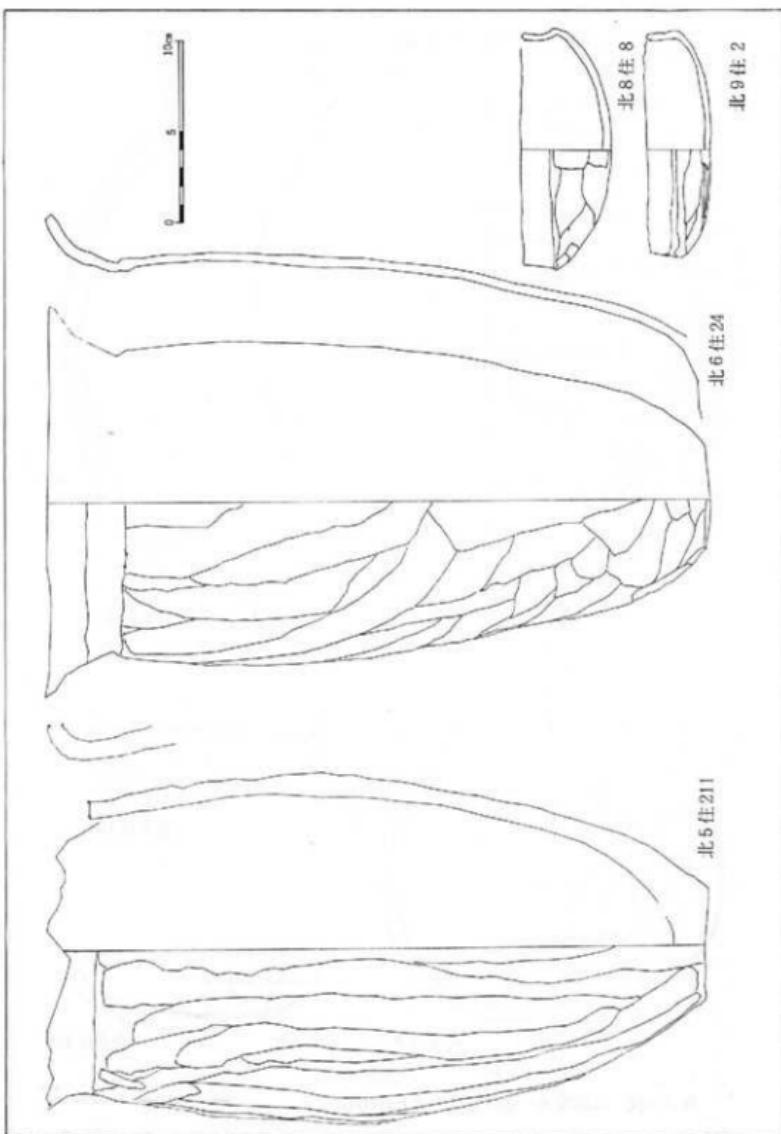
北5住124

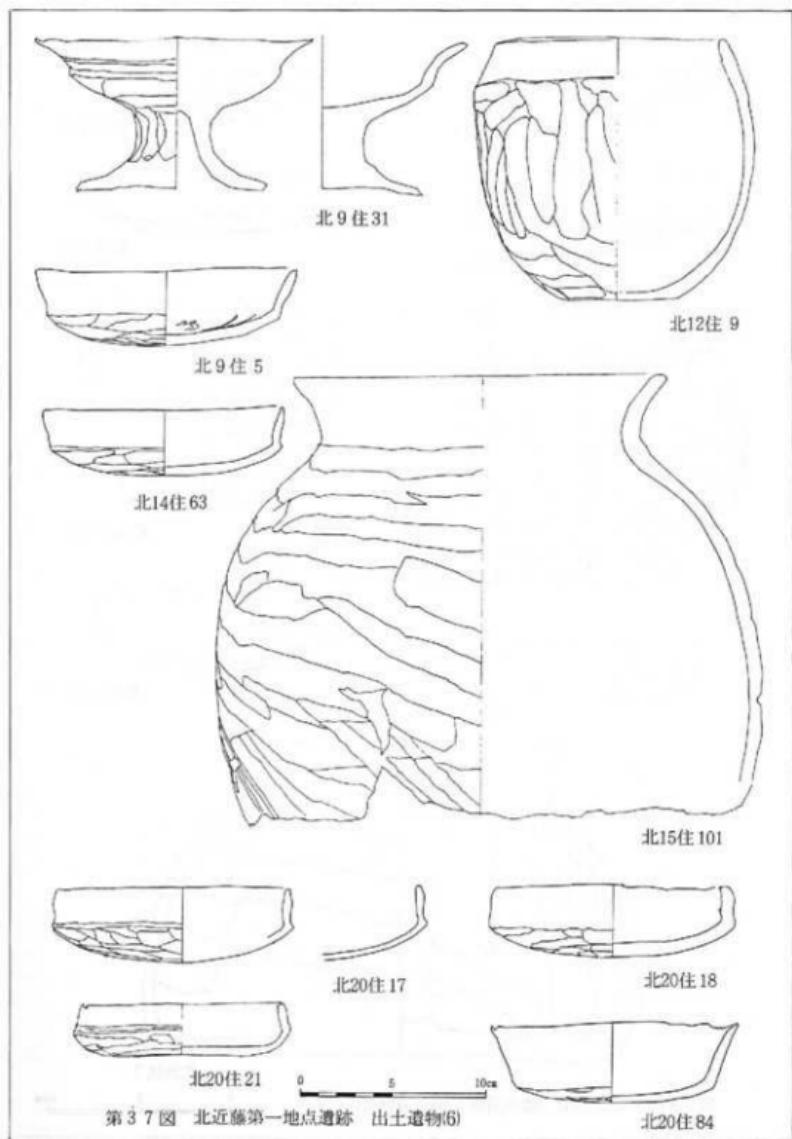


北5住139

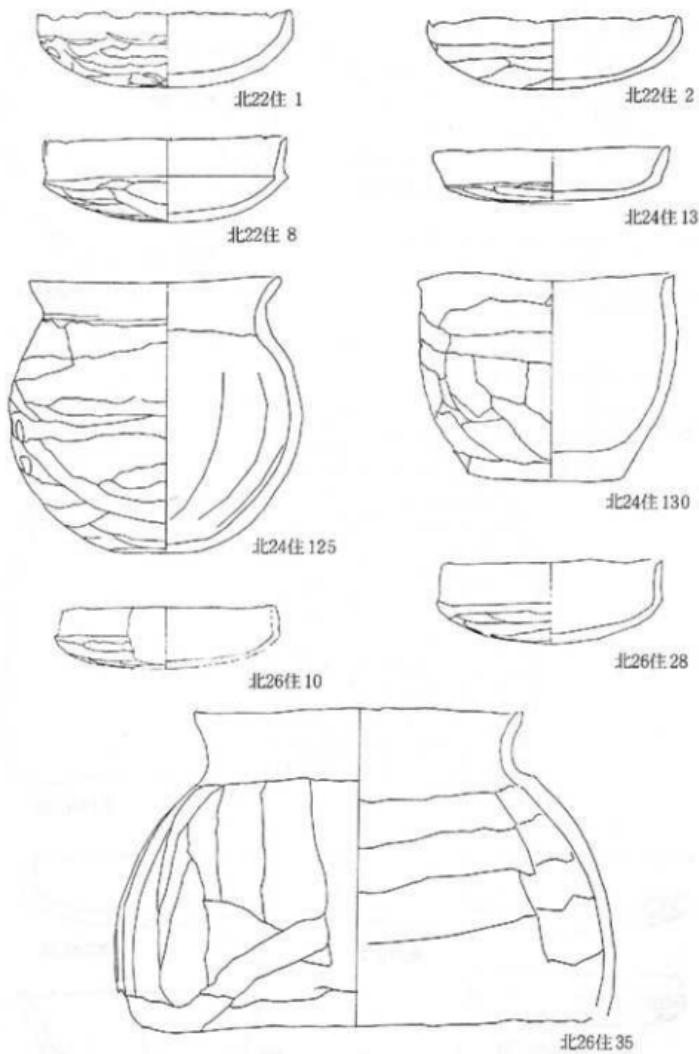
0 5 10cm

第35図 北近藤第一地点遺跡 出土遺物(4)

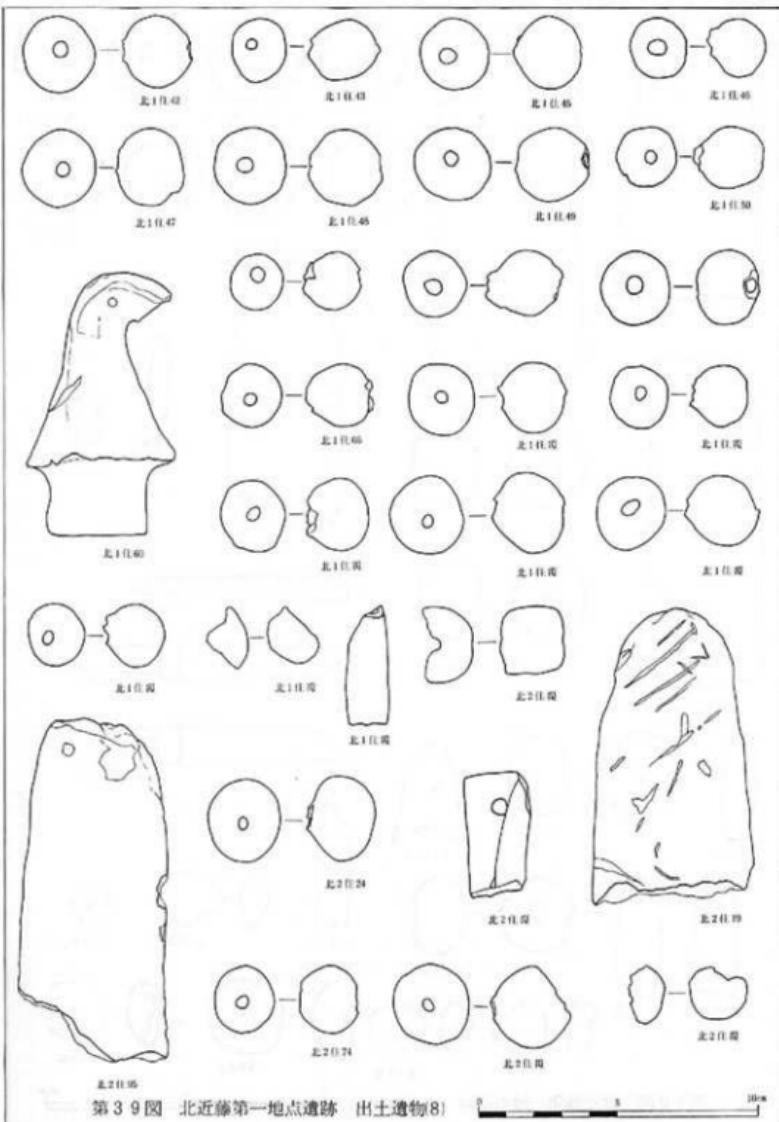




第37図 北近藤第一地点遺跡 出土遺物(6)

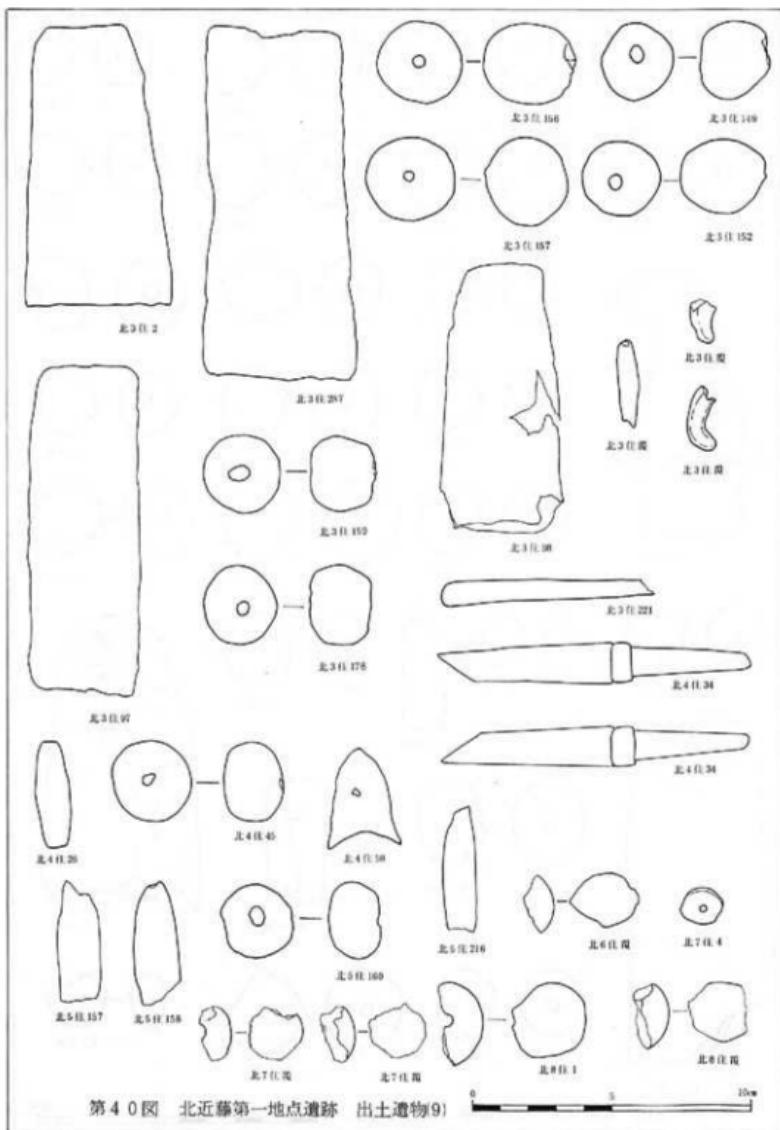


第38図 北近藤第一地点遺跡 出土遺物(7)

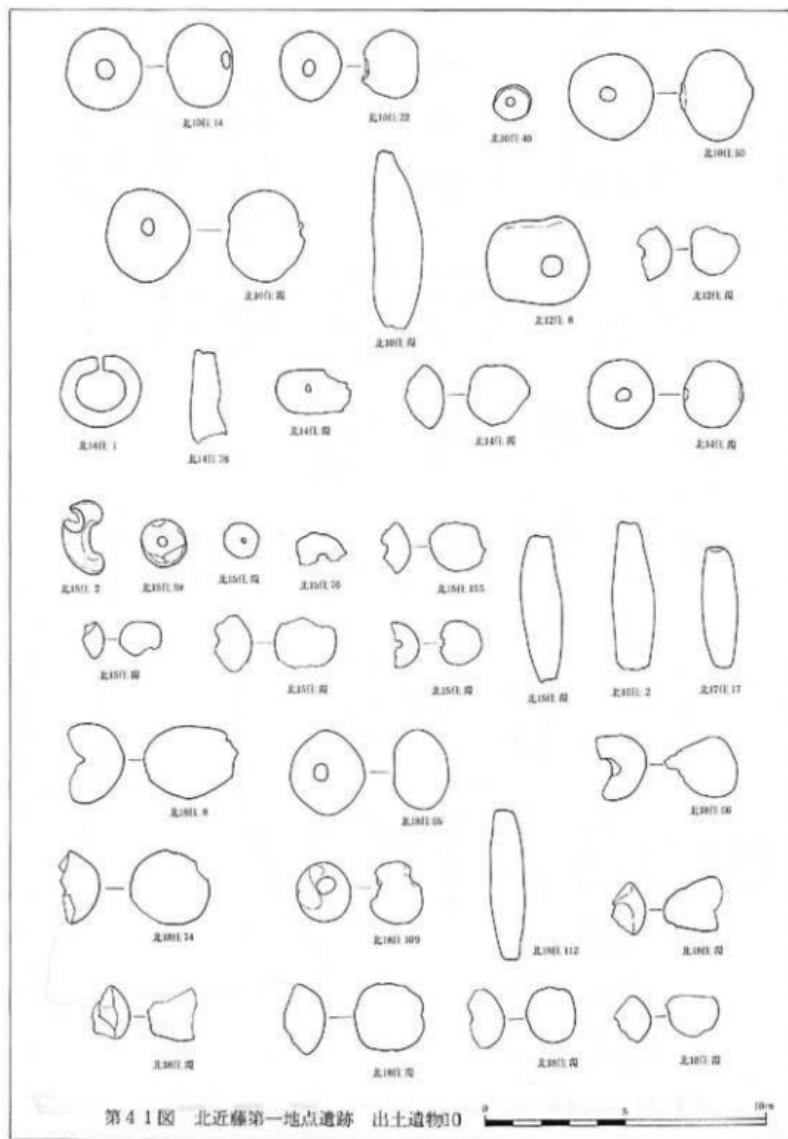


第39図 北近藤第一地点遺跡 出土遺物(8)

— 103 —

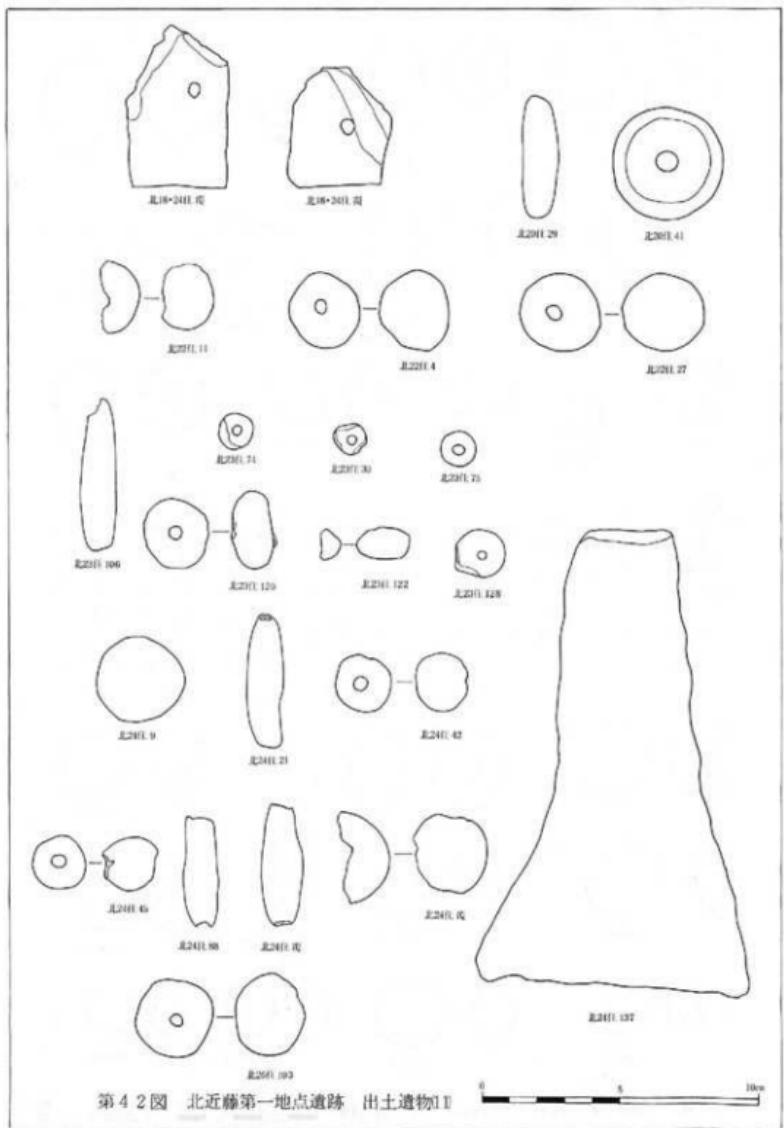


第40図 北近藤第一地点遺跡 出土遺物(9)



第41図 北近藤第一地点遺跡 出土遺物10

— 105 —



第42図 北近藤第一地点遺跡 出土遺物II

第VI章 南近藤遺跡

第1節 調査の内容

本遺跡の調査区は、道路によって区切られた2区より成り、東からⅠ区・Ⅱ区と呼称した。

調査はⅠ区より順次着手し、表上の掘削を行い、遺構確認後精査を実施した。

調査グリッドは、国家座標(X=25380、Y=-29240)を基準として、南へA~Gの7G、西へ1~13の13G、計91個の10×10mのグリッドを想定し、路線にかかるA-1~3G、B-1~6G、C-1~9G、D-1~9G、E-4~9・11~13G、F-7~9・11~13G、G-11~13Gの計45個のグリッドを調査した。

調査によって検出された遺構は、住居址4軒・井戸址1基・土壙1基で、遺構はすべてⅠ区からの検出で、Ⅱ区からは検出されなかった。

検出された遺構が少なく、考察するための資料は充分とは言えないが、周辺地の遺物散布状況も含めて考えると、今回の調査によって検出された4軒の住居址は、集落の北限に迫るものと考えられる。また1号住居は西限にあたる可能性が高い。

本遺跡は、近藤沼北岸から北へ小規模に伸びる開析谷の基部西岸を中心に近藤沼北岸に広が



写真97 調査風景

る、古墳時代後期から奈良時代にわたる集落址であると考えられる。（4号住居址は、出土遺物より奈良時代の住居址に比定できる）

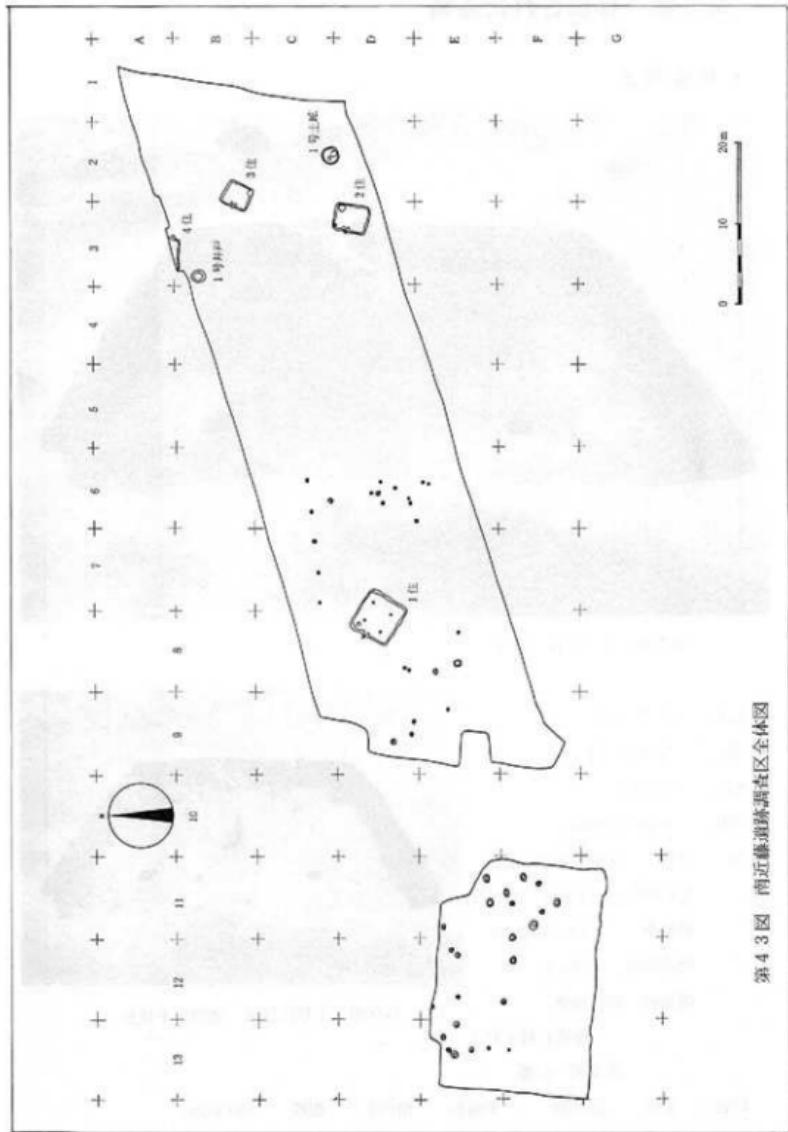
本遺跡で検出された住居址は、1号住居址が一辺5.5mの正方形の住居址である以外は、一辺3～4m前後の小型の長方形の住居址である。

時期が大きく隔たる4号住居址を除き、竈の位置は西辺に付設されていることが共通するが柱穴は1号住居址が4本主柱で整然とした構造を持つに比して、2号・3号住居址は主柱と判断できる柱穴はなく、整然とした構造を持たない。また、貯蔵穴に関しても、1号住居址が竈の右側に整然とした構造を持つに比して、2号・3号住居址は、整然とした構造を持たない。

奈良時代と比定できる4号住居址は、調査区外に未調査部分を残し、形態等を判然としないものの、竈の位置が、検出住居址中唯一東辺にあるなど大きくその形態が異なることが推察できる。

本遺跡の集落址としての中心地は、今回の調査区の南隣の地であると考えられ、調査の期間中、南隣の土地の地権者より、耕作中に出土したという土師器の小壺と滑石製の勾玉を実見させていただいた。他にも耕作中に遺物を見たという話も多くの方から聴取することができた。

また、北隣の土地の地権者より、以前小さな土盛りが存在し、埴輪の出土したことを聞いた。現在も、若干の高まり（かなり削剥され平坦化している）が確認できるものの、埴輪片等の散布は見られず、古墳である確証は得られなかった。北近藤第一地点遺跡同様、本遺跡の居住者の墓域については、課題として残った。



第43图 南近藤油藏调查区全体图

第2節 検出された遺構

1号住居址



写真98 1号住居址

位置 D-7・8G
方位 N-60°-W
形状 正方形
規模 5.50×5.54m
竪 位置 西辺・中央
焚口部幅 45cm
燃焼部 48×(50) cm
煙道部長 (53)cm

構築材 柴…長甕
砂質石材・粘土
架梁部…長甕

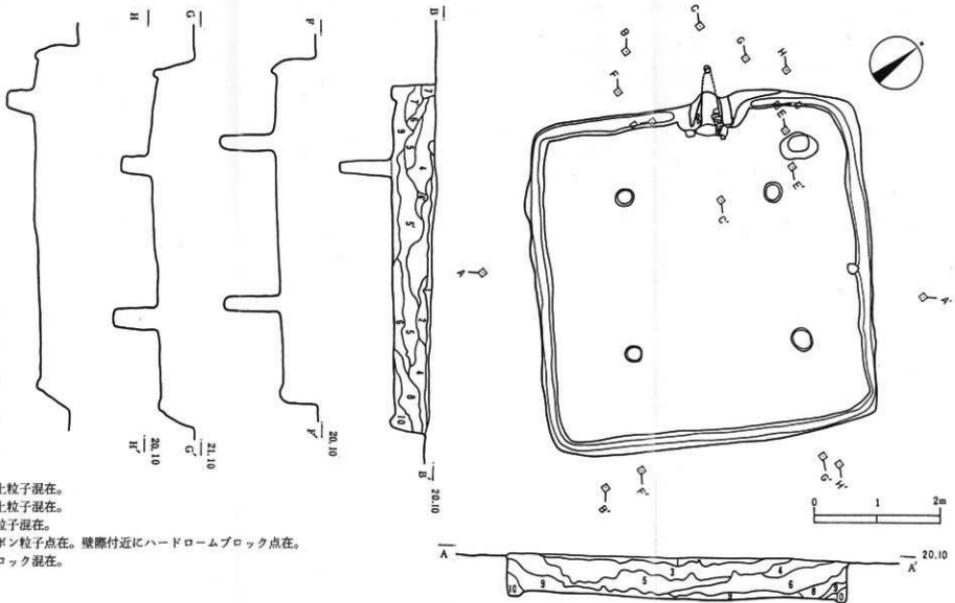
貯藏穴 位置 北西隅 平面形 楕円形 規模 58×42cm



写真99 1号住居址 遺物出土状態

土層注記

- 1層 暗褐色土層。ローム粒子・焼土粒子・白色テフラ混在。
- 2層 暗褐色土層。ローム粒子・焼土粒子・白色テフラ混在。
- 3層 黒褐色土層。ローム粒子・焼土粒子混在。
- 4層 暗褐色土層。ローム粒子点在。
- 5層 黑褐色土層。焼土・カーボン・ローム粒子・白色テフラ混在。
- 6層 黑褐色土層。ローム粒子・焼土粒子混在。
- 7層 暗褐色土層。ローム粒子・焼土粒子混在。
- 8層 褐色土層。ローム粒子・焼土粒子混在。
- 9層 暗褐色土層。焼土粒子・カーボン粒子点在。壁際付近にハードロームブロック点在。
- 10層 暗褐色土層。ハードロームブロック混在。



第44図 1号住居址

壁溝 全周

壁高 73cm

柱穴 4本 (2.41—2.68—
2.50—2.35m)

重複関係 無

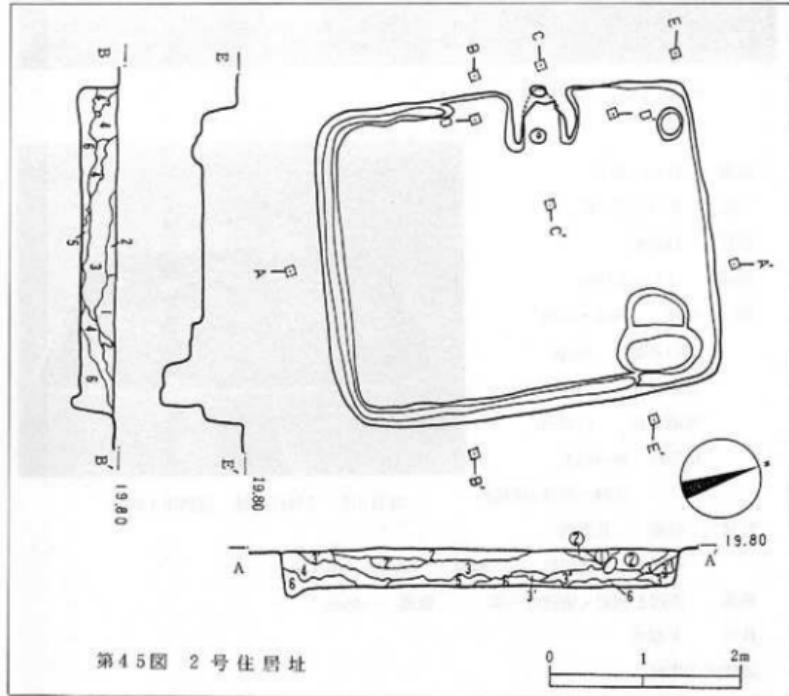
遺物出土状況

- ① 窯およびその周辺から
竪構築材としての土師器・
長甕が4個体出土。
- ② ①のほかは、遺物の出
土量は少ない。



写真100 1号住居址 窯

2号住居址



第45図 2号住居址

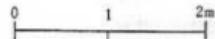




写真101 2号住居址

位置 D-2・3G

方位 N-75.5°-W

形状 長方形

規模 4.15×3.48m

竪 位置 西辺・中央

焚口部幅 48cm

燃焼部 51×(58)cm

煙道部長 (13)cm

構築材 柴…粘土

支脚…高環(逆位)

写真102 2号住居址 遺物出土状態

貯藏穴 位置 北東隅

平面形 楕円形 規模 88×50(88)cm

壁溝 南辺と西辺・東辺の一部 壁高 45cm

柱穴 1本(?)

遺物出土状況



- ① 瓦およびその周辺から
甕構築材として土師器・
壺、高环等が出土。
② 貯蔵穴周辺にも集中す
る傾向がある。

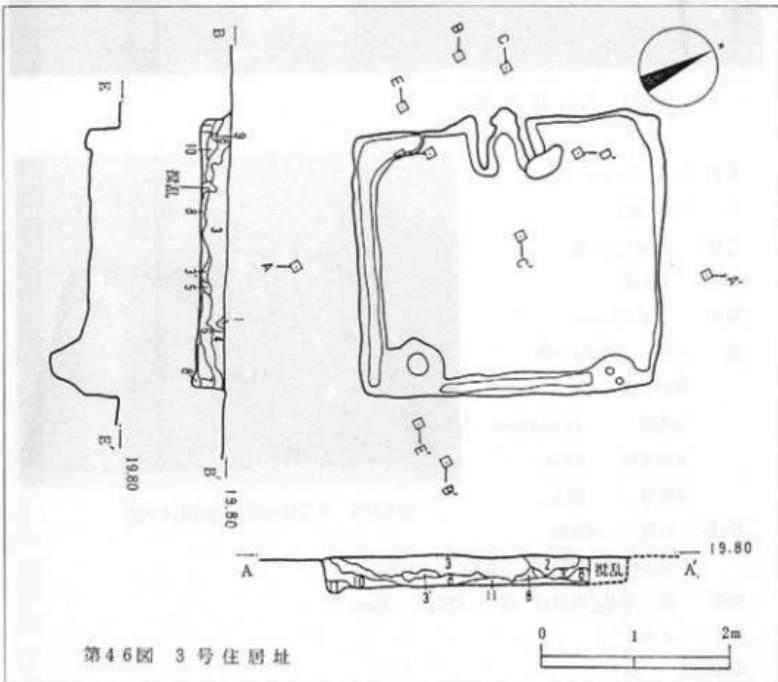


2号住居址 土層注記

1層 褐色土層。 2層 暗褐色土層。
3層 黒褐色土層。 4層 にぶい黄
褐色土層。 5層 にぶい黄褐色土層。
6層 黄褐色土層。 ③層 にぶい黄
褐色土層。 ④層 にぶい黄橙色土層。

写真103 2号住居址 瓦

3号住居址



第46図 3号住居址



写真104 3号住居址

位置 B・C-2G

B-3G

方位 N-67.5°-W

形状 長方形

規模 3.45×3.02m

竪 位置 西辺・中央

焚口部幅 42.5cm

燃焼部 42.5×43cm

煙道部長 28cm

構築材 粘土

貯藏穴 位置 南東隅

平面形 円形 規模 70×65cm

壁溝 東・南辺と西辺の一部 壁高 33cm

柱穴 1本(?)

重複関係 無



写真105 3号住居址の遺物出土状態。

遺物出土状況

竈脇から土師器・瓢・环等
が出土。

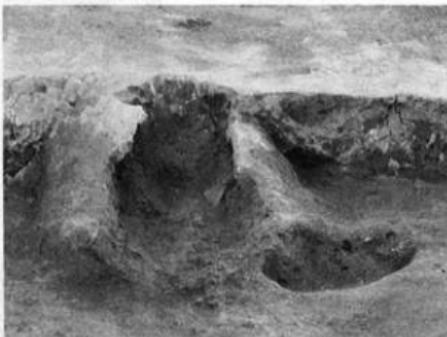
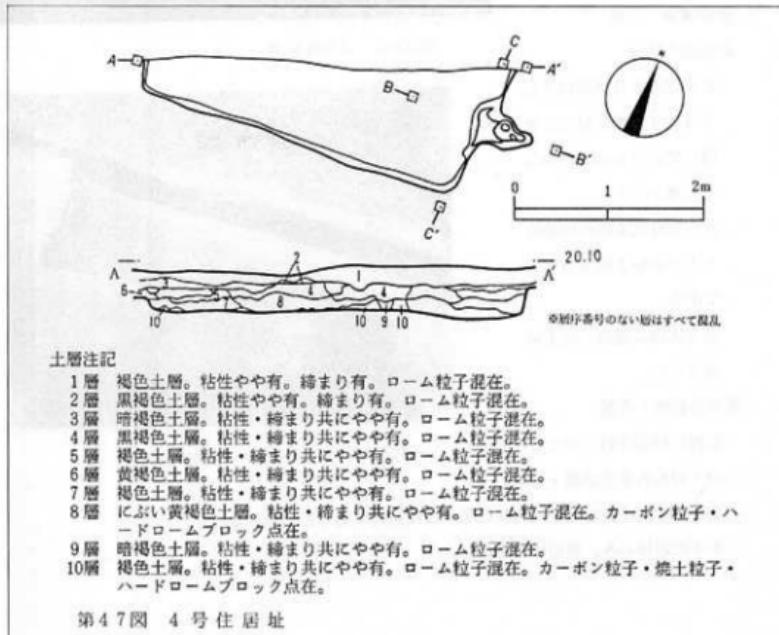


写真106 3号住居址 竈

4号住居址



第47図 4号住居址

位置 A・B-3G
方位 N-93°-E
平面形 方形
規模 (4.00) × 3.64m
竈 位置 東辺・南より
 焚口部幅 34cm
 燃焼部 34×50cm
 煙道部長 20cm
 構築材
 袖…粘土
 支脚…坏(逆位)
 貯藏穴・壁溝・柱穴
 調査区内未検出
 壁高 27cm
 重複関係 無
 遺物出土状況

- ① 竈周辺より構築材として坏、また竈に付設し使用していたものと思われる長甕が出土。
- ② 住居址南東隅の床面直上より坏が2個体重なって出土。
- ③ 全体的に遺物の出土量は少ない。

調査者観察・考察

- ① 竈に付設されていたものと思われる土師器・長甕より、本住居址は奈良時代に属する住居址であると思われる。
- ② 本住居址のみ、東辺に竈を持つ。



写真107 4号住居址



写真108 4号住居址 遺物出土状態



写真109 4号住居址 窓

1号井戸址

位置 B-3G

形状 円形

規模 径 1.80m

深さ 1.71m(未完掘)

付属施設 無

遺物出土状況

① 遺物の出土量は非常に

少なかった。

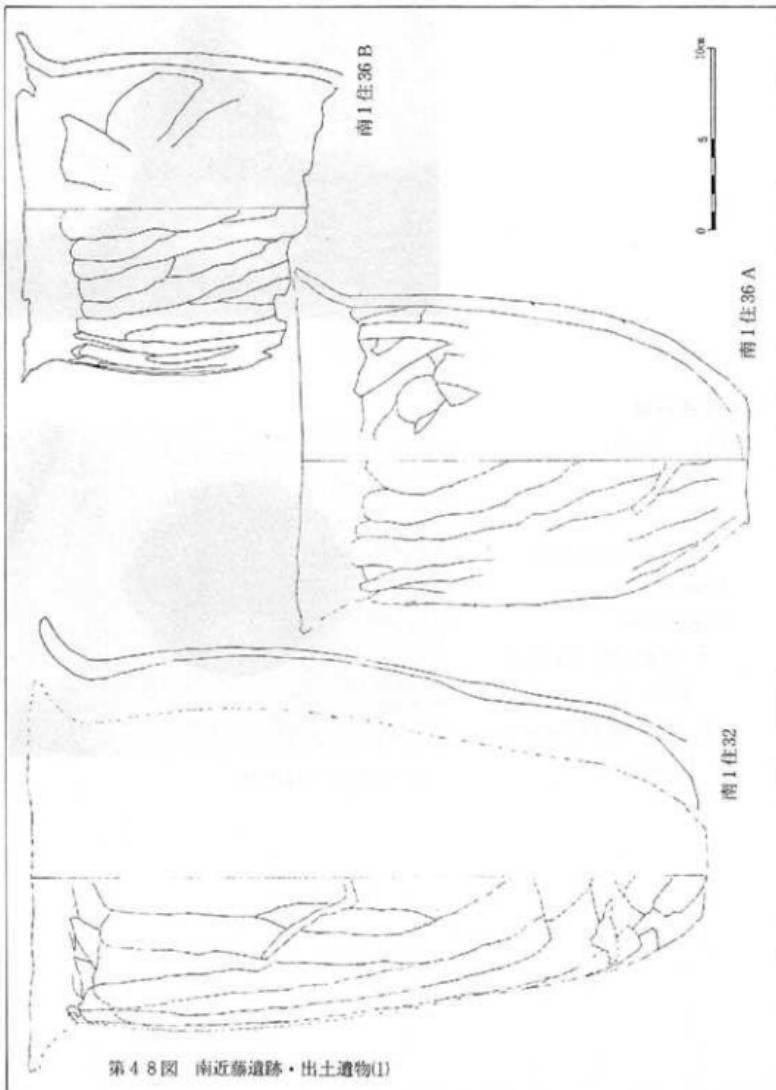
② 遺構に伴う遺物の出土

はなかった。

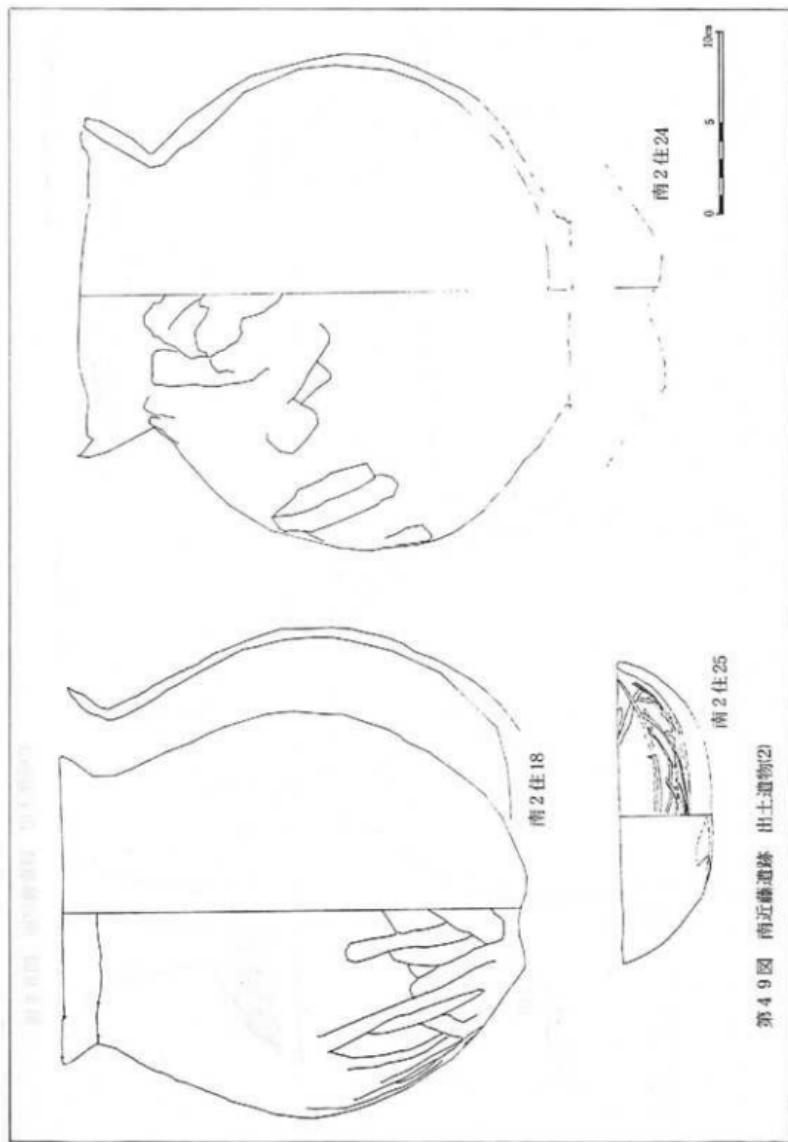


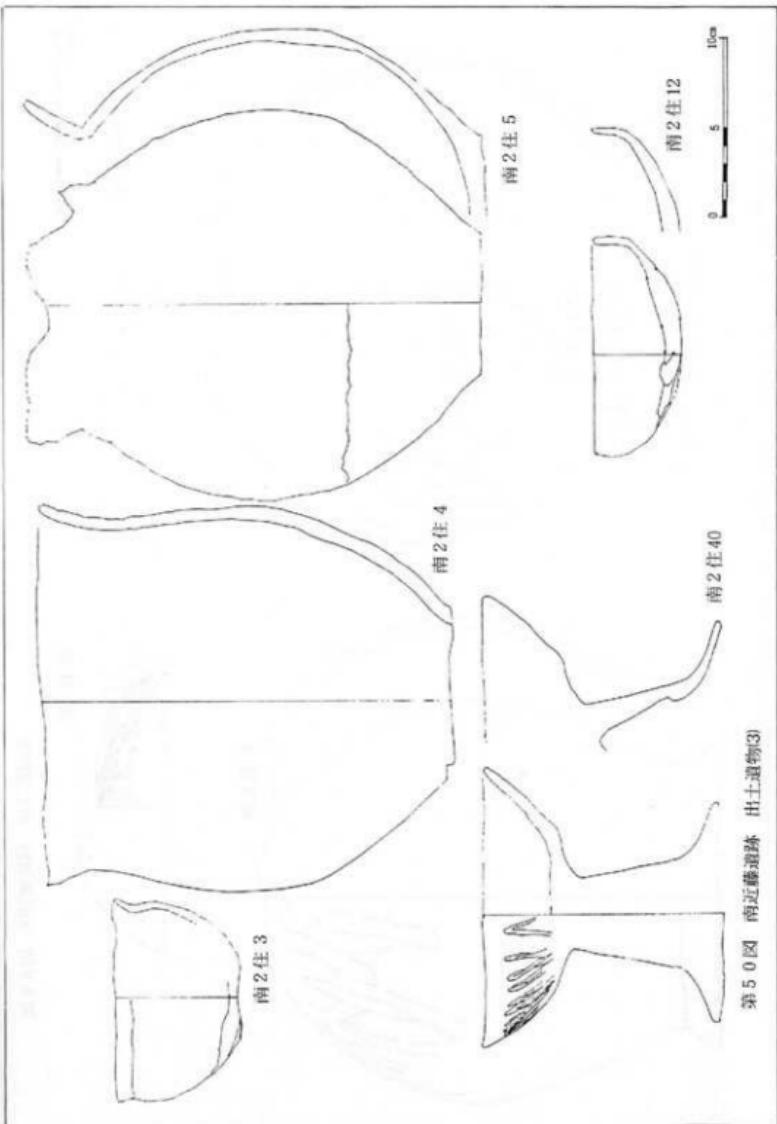
写真110 1号井戸址

第3節 出土遺物

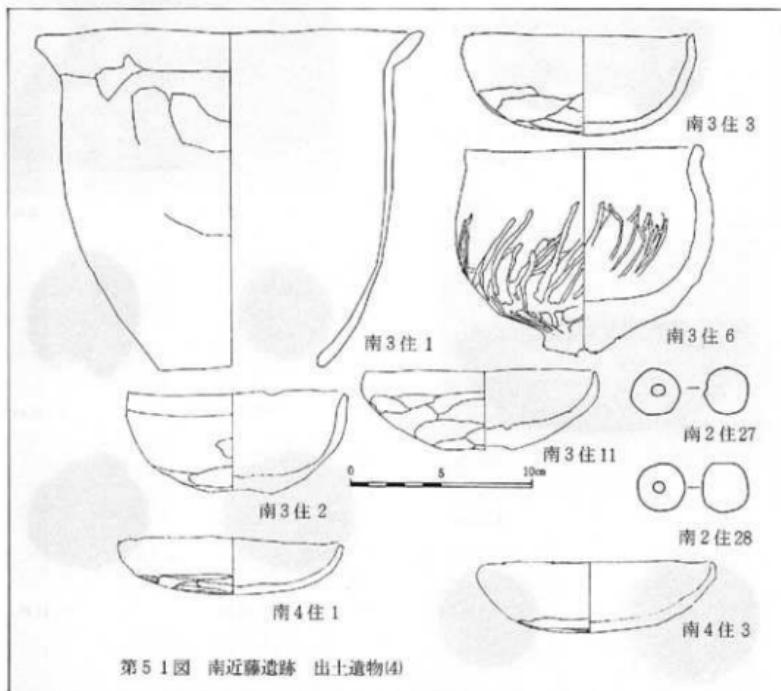


第49圖 南近牆道跡 出土遺物(2)

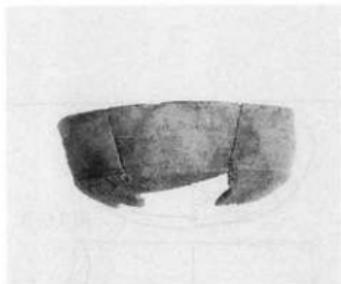




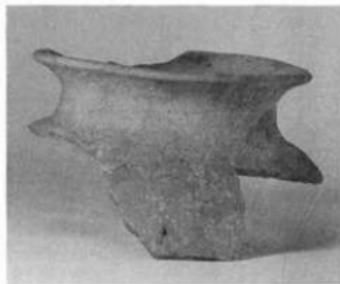
第50圖 南近藤遺跡 出土遺物(3)



第51図 南近藤遺跡 出土遺物(4)



北1住 1



北1住 24



北1住 27



北1住 42



北1住 43



北1住 45



北1住 46



北1住 47



北1住 48



北1住 49



北1住 50



北1住 57



北1住 60



北1住 63



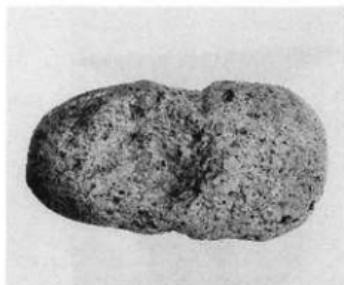
北1住 64



北1住 65



北1住 66



北1住 70



北1住 覆



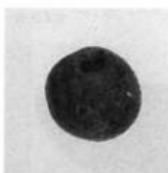
北1住 覆



北1住 覆



北1住 覆



北1住 覆



北1住 覆



北1住 覆



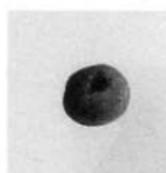
北1住 覆



北2住 19



北2住 24



北2住 74



北2住 95



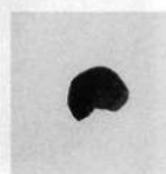
北2住 覆



北2住 覆



北2住 覆



北2住 覆



北3住 1



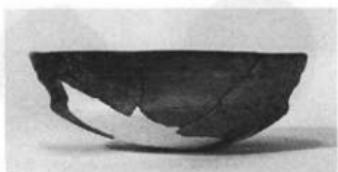
北3住 2



北3住 8



北3住 9



北3住 10



北3住 66



北3住 62



北3住 71

新石器

新石器

新石器



北3住 72



北3住 73



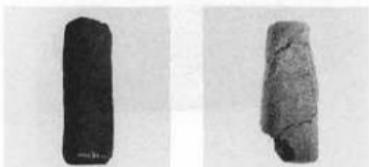
北3住 79



北3住 93



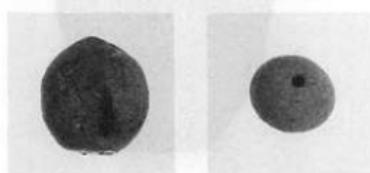
北3住 110



北3住 97

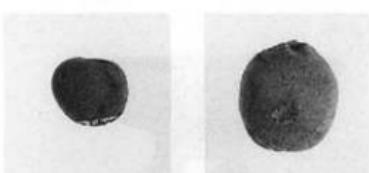


北3住 99



北3住 156

北3住 157



北3住 149



北3住 152



北3住 159



北3住 178



北3住 190



北3住 200



北3住 209



北3住 211



北3住 219



北3住 224



北3住 225



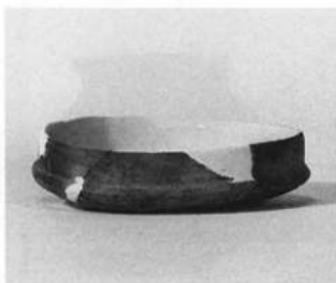
北3住 260



北3住 287



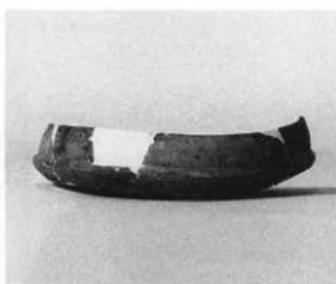
北3住 291



北3住 292



北3住 293



北3住 294



北3住 295



北4住 45



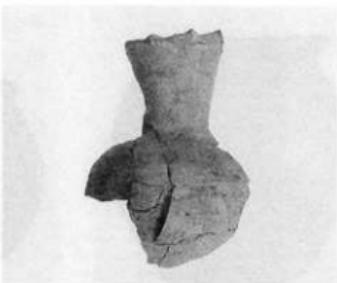
— 129 —



北4住 26



北4住 59



北4住 60



北5住 1



北5住 2



北5住 3



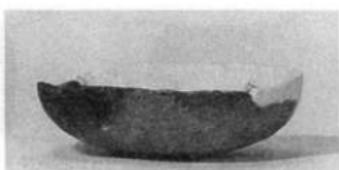
北5住 4



北5住 5



北5住 124



北5住 131



北5住 141



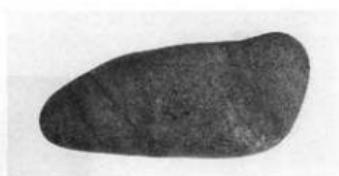
北5住 144



北5住 149



北5住 157



北5住 159



北5住 158



北5住 160



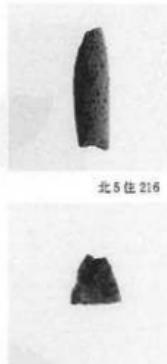
北5住 206



北5住 205



北5住 211



北5住 216



北5住 217



北6住 4



北6住 5



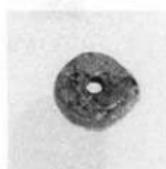
北6住 5



北6住 6



北6住 24



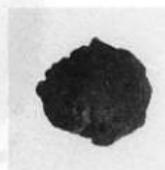
北7住 4



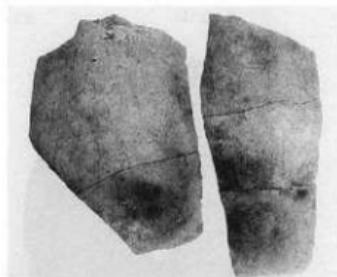
北7住 No.5



北6住 残



北7住 残



北7住 残



北7住 No.5



北7住 覆



北8住 1



北8住 8



北8住 23



北8住 24



北9住 4



北9住 2



北9住 5



北10住 14



北10住 22



北10住 29



北10住 40



北10住 50



北10住 覆



北10住 覆



北10住 覆



北10住 覆



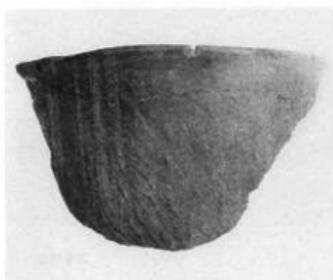
北10住 覆



北11住 覆



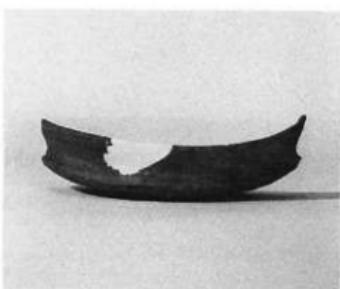
北11住 覆



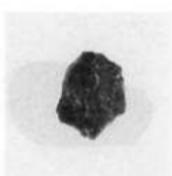
北12住 3



北12住 8



北12住 9



北13住 7



北14住 1

北14住 7

北14住 39



北14住 43



北14住 45

北14住 59



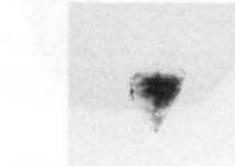
北14住 49



北14住 78

北14住 覆

北14住 63



北14住 覆



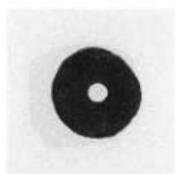
北14住 覆



北15住 1



北15住 2



北15住 59



北15住 76



北15住 78

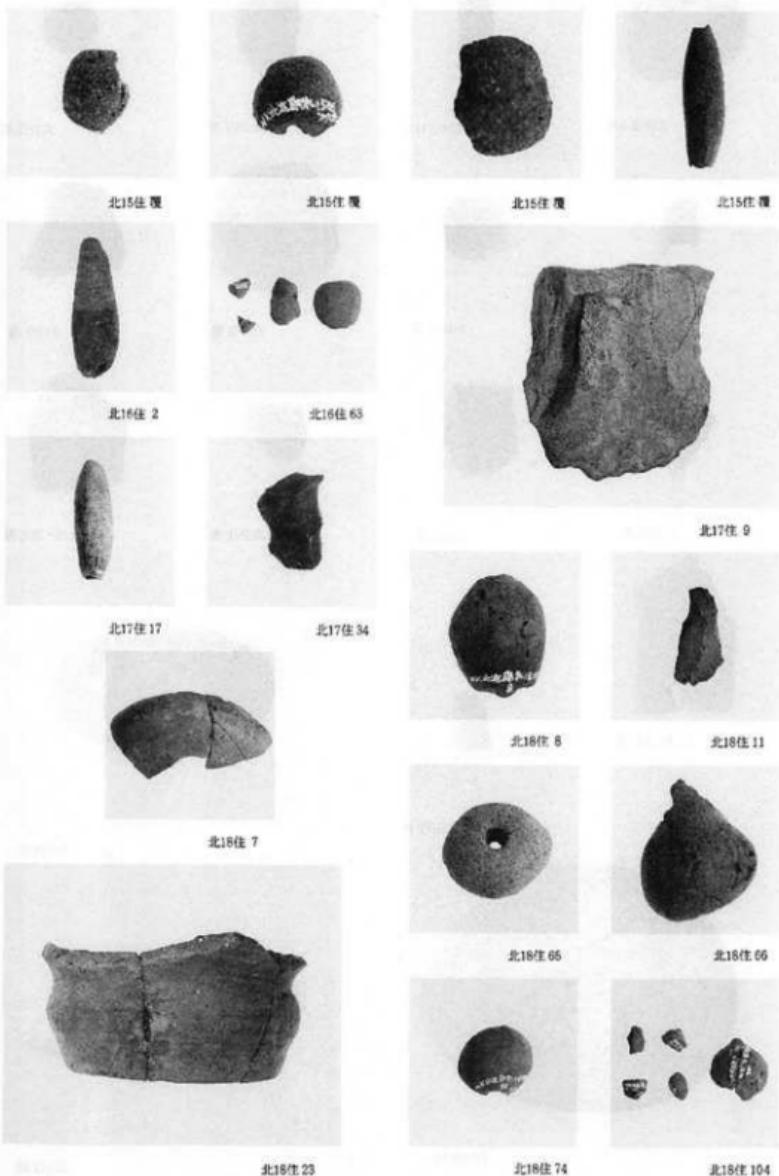


北15住 101



北15住 155

北15住 覆





北18住 109



北18住 112



北18住 113



北18住 114



北18住 115



北18住 116



北18住 117



北18住 118



北18住 119



北18住 120



北18住 121



北18·24住 122



北18·24住 123



北19住 124



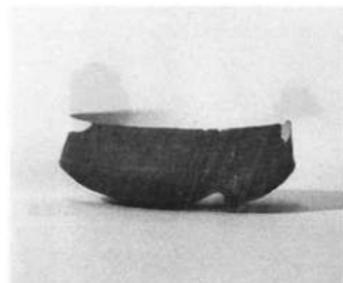
北19住 125



北19住 126



北19住 127



北20住 2



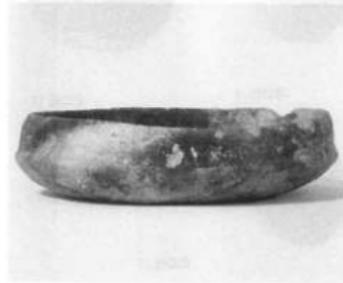
北20住 16



北20住 17



北20住 18



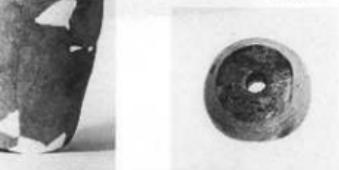
北20住 21



北20住 23



北20住 29



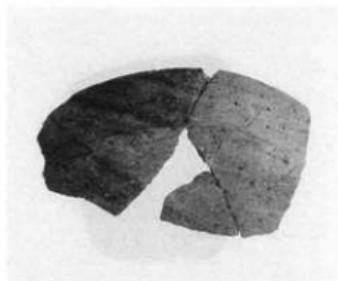
北20住 41



北20住 81



北20住 84



北21住 11



北21住 12



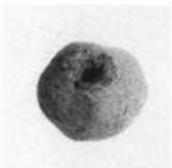
北21住 13



北22住 1



北22住 2



北22住 4



北22住 11



北22住 27



北22住 8



北22住 33



北22住 30



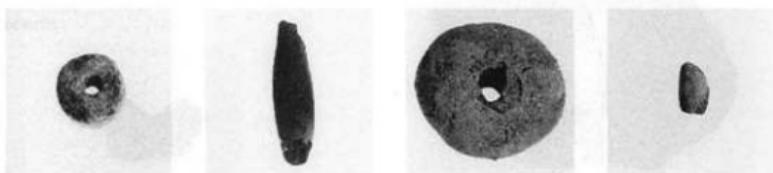
北23住 79



北23住 90



北23住 52



北23住 74



北23住 106



北23住 120



北23住 122



北23住 126



北24住 9

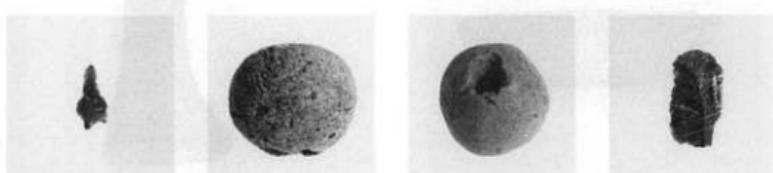


北23住 128

北23住 149



北24住 21



北24住 34

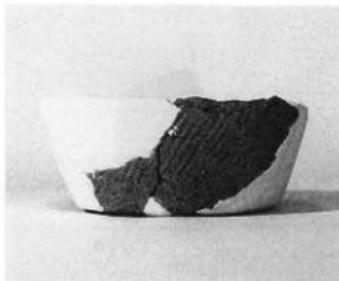
北24住 42

北24住 45

北24住 78



北24住 88



北24住 90



北24住 98



北24住 121



北24住 120



北24住 125



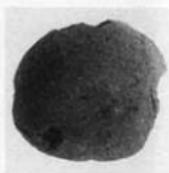
北24住 131



北24住 137



北24住 P 1



北24住 瓢



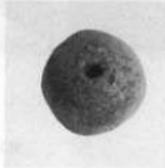
北24住 带



北26住 10



北26住 28



北26住 103



北26住 24



北26住 35



南1住32



南1住36A



南1住36B



南2住3



南2住4



南2住5



南2住12



南2住18



南2住24



南2住25



南2住27



南2住28



南2住40



南3住1



南3住2



南3住 3



南3住 5



南3住 11



南4住 1



南4住 3



南4住 4

あ　と　が　き

中島・北近藤第一地点・南近藤の3遺跡の発掘調査は、延面積14,960m²にも及ぶものであり、昭和65年度以降の館林市教育委員会が担当した発掘調査中最大規模のものであります。

時期的には、遺跡分布調査の報告書『館林市の遺跡』の作成期間と重複し、遺跡分布調査の結果を発掘調査から検証する材料となりました。詳しくは第Ⅲ章に述べるところでありますが、調査された遺跡の中に、本市において最も保存状況が良好な遺跡（北近藤第一地点遺跡）と最も保存状況が劣悪な遺跡（中島遺跡＝破壊された遺跡と判明）が含まれていたことは、本市の遺跡の在り方を考える上で大きなものとなります。今後は個々の発掘調査を進める中で、実例に基く保存状況を各遺跡の備考欄に記入するという作業が必要となり、そうした中で発掘調査の対象となる遺跡を再検討しなければならないものと思われます。

また国道の改良工事に伴う今回の調査は、言うならば幅25mの試掘調査としても捉えられ、近藤沼北岸の台地における居住区域を考える資料を提供するものであります。特に北近藤第一地点遺跡で検出された住居址は26軒を数え、同遺跡の既往の発掘調査で検出された4軒を加えると延30軒の住居址が検出されたことになります。これらの住居址は前述したようにその大部分（26軒中22軒）が発掘調査区東部に立地しており、近藤沼からの開析谷へ向う斜面からも検出してあります。こうした配置状況からは、同遺跡が近藤沼からの開析谷西岸に沿った形の集落址であることを窺わせています。検出された住居址は、総て同様の形・大きさではなく、付属施設も含めて、いくつかの形態に分けられています。詳しくは第Ⅳ章北近藤第一地点遺跡の中で述べてありますので、ここでは取り上げませんが、今後の同遺跡の調査結果を加味する中で集落の実態化を計りたいと思います。

調査報告書としてまとめるにあたりまして、昭和63年7月以降を出土遺物整理作業と報告書作成の期間にあてましたが、報告している遺物は出土遺物総てを網羅するものではありません。土器片などは報告の対象から割愛しており、その他のものでも写真を以てのみ報告している遺物もあります。今回の発掘調査において出土した遺物は総数パンケース70箱に及びます。そのほとんどが調査報告書で取り上げ不可能な土器片であります。

注記・分類作業を終えて整理した形といたしましたが、これらのうちどれほどのものが、考古資料として本市の古代史解明に資するものとなるかは大きな疑問となります。

普及啓蒙活動として、昭和63年6月18日（午後2時から4時までの時間）、北近藤第一地点遺跡発掘調査現場を会場に見学会を開催いたしました。調査中の開催であるため、館林土木事務

所のご理解とご厚意により実現したもので、見学者は350名を数えました。その後の調査工程の中で見落せない事実があるのでここで報告しておきます。北近藤第一地点遺跡第5号住居址竈に付した壺（口径約20cm 器高約30cm）の出土状況は写真28に報告されておりますが、遺物実測図は作成されておりません。遺物検出から取り上げまでの期間（6月30日午後5時15分より翌7月1日午前8時）において紛失したためであります。発掘調査現場の状況については、周囲を仮柵で囲い、「立入禁止」の看板を設置するなど通常以上の保安措置を講じておしましたが、夜間の侵入を防ぐものではありません。この件の取り扱いについては、群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業團・太田市教育委員会などにおける事例をご教示戴き、地元駐在所へ口頭で報告し、紛失の事実を文書として記録するといった形としました。この種の紛失は今後防ぐ手段は難しく、対応法についても各市町村を越えた行政区で統一化を検討されるべきものとなります。

本報告書では、調査の事実を報告したのみであり、十分な考察を踏まえた上での成果を述べるまでには至っておりません。破壊された遺跡（表土に散布する遺物に結びつく遺構が検出されない遺跡）と判明された中島遺跡を除いた近藤沼北岸の2遺跡は、集落の中の居住域であることがほぼ判明しました。保存状況も良好と言え、今後本市の古代史を語る上で「邑楽・館林台地」南部の典型的な集落となる可能性があります。検討の方法については多くの余地を残すものと考えられておりますので、他方面からのご教示、ご指導をいただければ幸甚であります。

館林市教育委員会 文化財係



見学会の風景

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第20集

中 島 遺 跡
北 近 藤 第 一 地 点 遺 跡
南 近 藤 遺 跡
国道 354 号道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発 行 館 林 市 教 育 委 員 会
印 刷 所 中 塚 印 刷 所
発行年月日 平成元年 3月31日



文化財登録シンボルマーク
ふる郷の文化と歴史を見なおそう